

$\infty \rightarrow 0$  ・ ストラトス

南無三

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——死なないで、ゼロ——

電子の妖精は、最後の力を使って、異界への扉を開いた。

．．．  
ロックマンゼロとISのクロスオーバーです。

私の妄想が爆発した捏造考察や拡大解釈が多少含まれています。

それでも大丈夫。という方は生暖かい目で見てください。

別の話も書いてるので、更新頻度はかなり不定期です。あしからず

# 目次

地図のない島

プロローグ

プロローグⅡ

現状のセツメイ

舌戦

実戦

親和性

独逸

苗字

圧倒／暗闇を斬る幻影

紅蓮に燃える

訓練

77 70 57 49 42 34 23 18 10 1

資金繰り、思慕、憧憬

思い知る

絶技

能動的慣性相殺兵装

200℃の戦い／形見の男

対峙

結末

I S 学園

試験勉強

丙龍

翠緑の髪の色

ウーマン・リユニイト・ロボット

190

175 167 158 150 143 128 117 107 100 87

感謝	198
殺陣（たて）	205
英雄の役目	212
狂気と恋心	220
再会と初対面	229
だが男だ	240
番外：回避型のメイン盾、信じるもの、	
悪のウイルス	253
一夏とゼロ／絶対零度の恋	267
一夏と転校生	282
弾雨の後／ゼロ・シノノ	297
黒い雨・稲光る雷鳥	308
戦うための強さ、強さのための戦い（S	

he is stronger than	
n I)	317
強さの因果論	328



# 地図にない島

## プロローグ

——とある孤島の地下

ディスクプレイの無機質な光、縦横無尽に駆け巡るケーブル、ハードディスクの回転するカリカリという音

地図上には「無人島」として登録されているこの島の地下空間は、そんな言葉などお呼びもつかないほどに機械化されていた。

その機械城の中心にたたずむ少女、篠ノ野束

宇宙開発用のマルチフォームスーツIS（インフィニット・ストラトス）を開発し、その優秀さから、世界の軍事バランスを崩壊させ、世界各国から絶賛逃走中の彼女は、たった数キロバイトのメールにより今、大いに困っていた。

2  
From : X  
??? / ?? / ??  
?? : ??

To: シノノノ タバネ

Title: 力を貸して

Message: 傷ついた友人を助けてください。

ボクは訳あつて姿を見せることは出来ないけど、数日後に彼があなたの元にやってくる。

あなただけが頼りです。

なにとぞよろしくおねがいします。

—END—

「うーん、なんで束さんのところにメールが届くのかなあ？」

彼女の疑問は至極もつともなものだった。

それは、そのメールがどこの基地局も経由していないことでも、

アドレスが宛名と同じX（エックス）しかないことでも、

天才と名高い彼女のPCアドレスを探り当て世界最高峰のセキュリティを破ったことでもない。

仮に三つ目だったなら、彼女も少し感心したのち、迅速に流出データの確認、セキュリティの見直し、情報を盗んだ相手への肅清の作業に入っていただろう。

だが、それはありえなかった。

なぜなら、彼女のPCは外界と隔絶されたスタンドアローンだからだ。

先ほど例に挙げたハッキングによる情報漏えいをピッキングによる空き巣に例える  
と、このメールの送り主はドアも郵便受けもない家の中に手紙を届けたようなものだ。

機密も何もあつたものではない。

今や世界各国で最強のセキュリティと信じられているスタンドアローンのPCにアクセスできるということは、自分を含めありとあらゆる国の機密を閲覧出来るということ。

もう一度言おう、機密も何もあつたものではない。

彼女は悩んだ。

「Xとかいうメールの送り主は友人を助けて欲しい。と言っている。

でもXは暗に、この要求を呑まない場合、私のPCの中の機密情報を外部に流出させる。と脅しをかけてきているって考えるのが自然だ。

でも、この地球上に私と対抗できる人材はいなかったはず、いたら、各国が黙ってな

い…

…ともかく、Xの正体も、独立PCにアクセスできる謎の技術も「彼」っていう人が来てからじゃないとどうしようもできない…さらに「彼」がどうやって来るのかも曖昧

だ」

うっとうしそうに頭を搔く。

いつも、世界を相手にいつも先手を取ってきた彼女にとって、後手に回るしかないことはとてももどかしいことであつた。

二日後

「——ッ!!!」

束は孤島内の居住ブロックで起床してすぐ、声にならない叫びを上げ、ベッドから転げ落ちた。

寝相の悪い彼女のためのダブルサイズのベッド、その左半分に彼女以外の人間がいたからである。

孤島のセキュリティは完璧だった。うかつに島に上陸しようものなら一瞬で対IS用の重火器で蜂の巣になり、仮にそれらが破られたとしても束を（にんじんシャトルで）避難させてから自爆する。という機構が彼女の就寝中も作動するようになっていた。

つまり、ここには束以外の人の存在はありえない。

幸い侵入者は気絶していたようなので、彼女は一目散に逃げ出した。

道中、複数犯の可能性を警戒した束は孤島全体の生命反応も確認したが、なぜか自分以外の生命反応は確認されなかった。

空恐ろしいものを感じながら開発ブロックから手近な武器を手に取り、侵入者のいる自室に戻った。

束は自室の扉の前で自分の手元を見、泣きそうになった。

「……なんでとっさに持って来れた武器がドリルだけだったんだろ……しかも天元突破しそうな感じのドリル……束さん一生の不覚かも」

「仕方なかったんだもん！だって、銃系は全部ロボットアームに備え付けだったし、真剣なんて持ってないし扱えないもん、ちーちゃんじゃあるまいし。」

と勝手に納得し、女は度胸!!と両手で頬を叩いて気合を入れた。

そして音を立てないように自室のドアを開け、ドリルを構えながらゆつくりと侵入者のにじりより、その顔を見た。

前衛的なデザインのヘルメットからこぼれる金の長髪、戦士のように精悍だが中性的

な顔があつた。

次に体を見る。

侵入者は紅い I S のような装甲と体をおおうスニーキングスーツらしき全身タイツを纏っていたが、それはところどころ焦げ、傷つき、剥がれ、ボロボロだった。

その女性（：）が持つそれらは、破損も含め一つの芸術品のような美しさを放ち、束を魅了した。

：が、詳しく見ると、その評価は間違っていることに気付く。

なぜなら、傷のある箇所から流れ出してベッドを汚しているものは赤い血液などではなく、誰でも知っている機械油のような臭気を放っているし、傷からは火花が飛び散りベッドに焦げ目を作っていた。

手足の傷だけなら、義手の可能性があつたが、内臓まで達しているであろう腹部の大きな裂傷の中から、機械のようなニビ色が覗いているのを確認し、束は確信した。

—芸術品（ロボット）みたい、じゃなくて、芸術品（ロボット）そのものなんだ。

束は瞬間的に、この芸術品（ロボット）を作り出した技術者の才能に嫉妬した。

と同時に、「彼女が X の言っていた「彼」なのではないか？」という疑問が湧き上がる。

—ピリリリリリ…

無機質なメールの着信音、ちーちゃんでも、いつくんでも、ほうきちゃんでもない初期設定のそれを鳴らすことができるのは、件（くだん）のXしかない。

おそるおそるポケットから端末を出し、メールの確認をする。

案の定Xからで、本文はなく二つのテキストファイルが添付されているだけだった。念入りにウイルステックをして開く。

一つ目は目の前の彼女の設計図だった。

ISを作る過程で、機械技術関連は一通り学んだ束だったが、現代のロボットテクノロジーなど兎戯にも等しいと思えてしまうほど高度な理論や設計、プログラム構築に舌を巻かざるを得なかった。

——人間のようを考え、行動するロボット

日夜、各国の研究者達を取り組んでいる命題の答えがここにあった。

そして、これらの情報を惜しげもなく提供するXという存在に恐怖した。

製作者はアルバート・W・ワイリー

形式番号はDR・W・NO $\infty$

ドクターワイリーラストナンバーと読むらしい。

戦闘行為を目的にしたレプリロイドとして作られた。

レプリロイド、という単語の意味は束はわからなかったが、おおよそ人の形をした口

ボットの総称であると推測。

「…つて男（男性体）だったの!？」

でもやっぱり、間違いなくXの言ってた「彼」で間違いなさそう…修理しろってこと  
でいいのかな？」

それにしても、X（未知数）に、形式番号∞（infinity）とは…

『未知』の宇宙を探索するための『インフィニット』・ストラトス製作者の束となにか掛  
けているのかと束は驚いた。

二件めのファイルを開く。

そこには同じく目の前の「彼」のものだったが、先ほどと比べ、どこか安上がりな感  
が否めない作りになっていた。

「廉価版…?」

読み進めていくと、この廉価版ボディはバイルという研究者が「彼」のオリジナルボ  
ディを他の事に利用するために作った、人格プログラムの受け皿のようなもので、今の  
「彼」のボディはこちらのものだということがわかった。

「今の破損を修復しつつ、元のボディに近づける、つて言われてる気がする…いいよ…  
やってやる!!」

「この天才束さんの実力、甘く見てもらっちゃあ困るよ!!」

束は作業を開始した。

## プロローグⅡ

大気圏突入による高熱が、巨大人工衛星のラグナロクを覆いつつある。

その中で、高笑う異常者と無言でたたずむ紅い戦士。

「貴様に出来るのかね!？」

…レプリロイド達のエイユウである貴様が!

…人間(…)を守るセイギの味方が!

地上の人間を守るために……このワシ(人間)を……倒すということが!!」

.....

ロボット三原則というものがある。

その第一に「いかなる場合においてもロボットは人間に危害を加えてはならない」というものがある。

当初、『人間と同じように考え、行動するロボット』として作られたレプリロイドたちにとって、その第一こそが、守るべき絶対遵守の法であり、それを犯すものはイレギュ

ラーと呼ばれ、同胞であったはずのレプリロイドの手で狩られてしまう。

(もつとも、今ではイレギュラーの定義も歪んでしまっているが)

.....

かつて、イレギュラー狩りにおいて、伝説の英雄とまで呼ばれた彼の今の行動は、その禁忌を犯す行為に他ならない。

だが、エイユウと揶揄された紅い戦士は微塵の迷いもなく告げる。

「オレは、セイギの味方でもなければ、自分をエイユウと名乗った覚えもない……」

……オレはただ、自分が信じる者のために戦ってきた」

——オレは……悩まない

「目の前に敵が現れたなら」

たとえ、エックスが守ろうとした「人間」だったとしても

「叩ききる……までだ」

通信機から漏れる、自身の帰還を切望する少女の悲鳴のような声とはうらはらに——

『ゼロー—————!!!』

戦士は光る剣を構え、敵と定めたモノ（バイル）に切りかかった。

バイルを下し、崩壊するラグナロクで、ゼロと呼ばれた紅い戦士は倒れていた。  
大気圏突入による空気摩擦で生じる熱が、彼の駆動系に重大なダメージを与えたよう  
だ。

自らの死を確信しながらも、彼の表情には一片の後悔もない。  
むしろ穏やかにも見える表情を浮かべていた。

…さらば、俺の信じた者

…さらば、俺の信じた物

…すまない。シエル

…やはり、ハイワな世界に俺のような存在は不要のようだ。

……ここで、彼の意識は途絶えた。

故に彼は気付かない。彼の元へサイバー空間への扉が開き、その体ごと吸い込まれて  
いったのを・・・

∴ ∴ ∴ ∴ ∴

——サイキドウヲカクニンシマシタ

脳内に響いたシステム音声を皮切りに、彼は思考を再会する。

どういうことだ、オレはあの時間違いなく死んだはずだが…、と目を開け、視覚から

の情報収集を始める。

そこらじゅうにディスプレイ、コンピュータと思しき箱型の機械、それらを繋ぐコードが彼の目に付いた。

「…どこかの研究所のようだが…？いかんせん設備が旧型過ぎるな」

「起きたと思つたらいきなり束さんのラボを旧型扱いにするなんて…：…一体君は何者なんだろうね？」

「!？」

引き戸になっている自動ドアから長髪の女性が入ってくる。

ゼロは整備用らしい無機質な診察台の上で体を起こし、臨戦態勢を取る。

「ああ、待つて待つて!!束さんは君に危害を加えるつもりはないよ!もしそうだったら君のこと直したりなんてしないし」

両手をぶんぶん振って、敵意のないことをアピールする束。ゼロは警戒を続けながら問う。

「…直した？」

「そう!!君、生身で大気圏突入したでしょ!!いくら自分が機械で直しが利くからって…

駆動系、制御系ありとあらゆる部分の回路が焼きついちゃってほとんど一から作り直した、つて言ってもいいようなもんなだからね!!?…：…ほんと、X君からの技術供与が

なかつたら詰んでたよまったく…」

「…Xと会ったのか!？」

直す方のことも考えてよ…と東は若干呆れ気味に続けようとして、ゼロにまた別の質問を言われる。

ゼロにしてみれば、エックスはゼロがオメガを倒した直後、永い眠りに就いた。という認識であり、誰かと思疎疎通できる状況にはないと考えていたため、エックスと何かしらの情報をやり取りしたというこの女性を疑問に思うのは当然のことであった。

「君がゼロゼロでここに来てからメールのやり取りを何回かしただけで、会ってはいないよ…それより、こっちの質問にもいい加減答えてくれるとうれしいな」

「…オレは、ゼロだ」

「ゼロ、か…言いえて妙だね」

「…?」

いぶかしげな顔をするゼロに、東は続ける。

「私にとつて、君（レプリロイド）は、私の開発したISの『無限大』の可能性を文字通り『零』にするものだからね……」

…兵器分野にしても、宇宙開発分野にしても、量産の効くレプリロイドのほうが向いてるし、各国の軍部にも受けがよさそうだから」

人間と同じように考え、行動するロボットが存在する。ということは人的な被害を全く考慮せずに、戦争や、宇宙開発をおこなうことが出来ることと同義であるといつても過言ではない。

人々は軍役から解放され、一滴も血を流さない戦争が始まる。

だが、伊達に『天災』と呼ばれているわけではない束はこうも考える。

—人間と同じように考え、行動するロボットは、ただの人間と一体何が違うのか？、と  
いや、違わない。

唯一違うことといえば、体の構成物質が無機物か有機物か、ということだけだ。

しかし、各国の重鎮はそうは考えず、ただ「高性能な機械」としてしか考えないだろう。

—機械風情に人権など、バカげている。と言わんばかりに

…そんな束の思考をよそに、ゼロは問う。

「…待ってくれ、レプリロイドがないのか？」

「私の知っている限り、君以外は見たことがないよ」

「…なら、ラグナロクは、エリアゼロはどうなった!？」

突然ゼロが語気を強める。が束には彼が何のことを言っているのかわからない。

「そんな地名や計画の名前は世界のどこにもなかったよ？」

「……一体ここは……」

どこなんだ？というゼロの嘆きは、突然に鳴り響いた電子音にかき消された。

——ピリリリリリ

『そこから先はボクが話そう』

相手は、二人の共通の知人となったエックスからであった。

## 現状のセツメイ

自ら説明を買って出たエックスがまず束に説明する。

『まずタバネ。ゼロは未来の地球から来たんだ…』

エックス曰く、未来といっても、確定した未来ではなく、可能性世界の一つなのだとか。

ちなみに、束がISを開発した時点で、その未来へいたる可能性がほぼなくなってしまう。ということも話した。

また、彼の世界は深刻なエネルギー不足で、省エネのために、何の罪もないレプリコイドをイレギュラー（犯罪者）と認定し処分を繰り返していたという。

ゼロは、その風潮に異を唱える科学者が指導者を勤めるレジスタンスに在籍、体制に抗った。

そして、ようやくその科学者によってエネルギー問題が解決されよう、というときにゼロは重大な損傷を負い、束の元にやってきた。

ということだった。

「そんな説明じゃ、束さんは納得しないよ?」

そう、この説明には、具体的な科学理論を全く読み取ることが出来ない。

『そう来ると思ってたよ…』

エックスはため息をつき、続ける。

『サイバー空間、って知ってるかい？もしくは、それに順ずる仮説とかでもいいんだけど』

「コンピュータやコンピューターネットワーク上の仮想空間のこと？」

『そう、そのサイバー空間…それが仮想空間なんかじゃなく、別位相の世界なんだよ』

そこから語られる話は、天災の束をもつてしても、荒唐無稽といわざるを得なかった。ゼロやエックスのいた未来では、ありとあらゆるものにコンピュータネットワークが繋がっていた。

当然、それに応じてサイバー空間というものも倍々式に増えていった。

たとえば、冷蔵庫のサイバー空間は冷蔵庫の形をし、建物の総合管理端末のサイバー空間は建物の形をした。

また、壁を流れるネットワークケーブルや飛び交う無線にも、サイバー空間が存在し、それらはその電波の届く範囲すべての視覚的情報をサイバー空間に投影した。

そしてあるとき、サイバー空間は現実の世界とほぼ変わらない景色になった。

そして人は、この世界を自由に往来できるプログラムを作った。

——サイバーエルフ

妖精と銘打たれた彼らは、サイバー空間を介して現実世界に干渉し事象を捻じ曲げる  
ことが出来た。

『サイバーエルフには、人工的に作られた存在と、ボクみたいで元レプリロイドの精神体  
：いや、人格プログラムか……それがサイバー空間に残留した存在と二種類ある』

前者は一度現実干渉すると死んでしまうが、後者にそれは当てはまらない

「つまり、エックス君がサイバーエルフで、サイバー空間越しに束さんのPCにメールを  
送った、っていうのはわかったけど、それじゃあこの世界とエックス君たちの世界が繋  
がる理由にはなっていないよね？」

『それは、ISのコアネットワークが広大なサイバー空間を形成して僕らの世界のサイ  
バー空間に干渉を始めたからだよ』

サイバー空間を、現実世界という星に纏わり着く大気のようなものとたとえるとわか  
りやすい。

異なる星（現実世界）の大気（サイバー空間）が広がりすぎて一部融合したのだ。

『だから、サイバー空間越しにメールも送れるし、ゼロをこの世界に転送することも出来  
たってわけさ……転送はこっちの世界でいうと『量子化』と『展開』って言うのかな？』

荒唐無稽だが、現にゼロはこちらに転送している。

信じるしかない。と束は思った。

「じゃあ、この世界にゼロくんを送り込んで、私に直させて、目的は達成したんじゃないのかな？ そしたら、さっさとこの世界から出てって欲しいんだけど」

そうだ。ISの開発者である束にとっては、ISが無用の長物と化すであろうレプリロイドの存在など邪魔でしかない。ましてや、未来の、滅びかけた世界の技術となれば、悪用された場合、この世界がエックス達の世界と同じ末路をたどる可能性があるからだ。

『残念だけど、それは出来ないよ』

束の意見に、エックスは搾り出すように言った。

「理由を聞いてもいいかな？」

『ああ——』

ゼロは最後の戦いに赴く際、一匹の相棒とも言えるサイバーエルフを連れていた。

クロワールと名付けられた彼女はあらゆるサイバーエルフの能力を模倣し、サイバーエルフを殺すことなく能力を行使できる。という破格の性能を持っていた。

彼女はゼロの死に際、己が命のすべてを使って彼をこちらへ転移させ、そのまま息絶えてしまった。

『だから、送り返そうにもエネルギーが足りないんだ。ボクのエネルギーもいまはほとんど残ってないし、こうやってコンタクトが取れるのも、後数回が限界なんだ。だから……』

彼を頼む』

そういつて、彼はゼロに向かって話し出す。

『ゼロも、無理に戻ろうとしなくても大丈夫だ。エリアゼロも、シエルも、皆前に歩き始めている。だから君も、この世界でゆつくりと前に進んで欲しい。あと、彼女（クロワール）からの遺言だけど』

——ゼロ、あなたに『平和』がどんなものかを知ってほしい……私の代わりにだつてさ。と付け加え、電話が切れた。

残されたのは、仏頂面の戦士と、先が思いやられるとばかりに額に手を当てる研究者のみであつた。

## 舌戦

無表情のまま電話機を見つめるゼロを見、東は言う。

「それにしても平和……ねえ？　世界が平和であったことなんて果たしてあるのかな？」

「少なくとも、レジスタンスの仲間は平和のために戦っていた。自分達が無実の罪で虐殺されない。そんな世界を目指して」

「その言い草だと、君は平和を望んでいなかったように聞こえるけど？」

「そういうわけではないが、オレはどちらかというレジスタンスの仲間のために戦っていたに過ぎん、オレは戦うことしかできなかったからな」

—— 私たちにとって、あなたはもうゼロ（救世主）なの

組織の存亡をかけてゼロの封印を解きに向かった彼女の声がゼロの脳裏にフラッシュバックする。

それは、記憶をなくし、自らの存在意義もあやふやだった彼を救った。

ゼロが彼女らにとっての救世主であったように、彼女もまた、ゼロにとっての救世主となりえた。

「ふうん。だから『平和を知れ』なのかな」

戦う以外にも、生きる道がある。ということをお伝えしたのだろうか、と東は勘繰った。

「オレには……わからない。一体何を思ってクロワールがオレなんかを助けたのか」

自分なぞ、助けたところで何かの役に立つとは思えない。ましてや、ヘイワな世界なのだとしたら、戦うことしか出来ない自分の存在価値など無いに等しい。

と、ゼロが心底不思議そうな表情をし、東はそれを鼻で笑った。

「自分を庇って死んでくれた相手に対して、「何故助けた？」なんて考えるんじゃないよ。レプリロイド（人間と同じように考え、行動するロボット）が聞いて呆れる」

……大切だから

……自分の命よりも、君の命のほうが大切だと想われた（……）から

理由なんて、それしか考えられない。

それで十分だ。

「……」

それを、このレプリロイドは『解せぬ』という。

あまりにも彼女が報われなさ過ぎる。

戦うことしか出来ない？ ならば、壊れるまで戦わせてやろう。それこそ馬車馬のよ

うに、

ちようど、戦力が欲しかったところだ。

東の心情を一言で表すなら「鈍感主人公もげろ」だった。

「じゃあ取引をしよう。東さんは、君にどうしたら『平和』を教えられるのか考えるから、君はその間に東さんの指示の元に平和維持活動（PKO）をして欲しいんだ。どう？ 対等でしょ」

「……取引か」

ゼロは、東が先ほど、『世界が平和であつたことなど無い』といっておきながら平和『維持』活動といつてのけたたあたりにいぶかしげな表情をしたが、東は別の意味に取つたのか、おどけたように付け加える。

「それとも『正義の味方の英雄様、どうか弱い私の力になってくださいませ』って一方的に依存される方が好みなのかな？」

「……………オレは、セイギの味方でもなければ、自分をエイユウと名乗つた覚えもなし」

癪に障つたのか、ゼロは東を睨んだ後、すぐに目を逸らし、

……………対等な関係であるに越したことは無い。と付け加えた。

そのとき彼の脳裏に浮かんでいたのは、歪んだ理想郷（ネオ・アルカディア）のこと

だった。

エックスというエイユウに頼りすぎた人間は、いつしか考えることをやめてしまった。

……考える必要が無かったから、

……エイユウ様が考えて、決めてくださるから

……自分達は従うだけでいい。

そういつた考えなしの信頼がエックスを追い詰め、次代のコピーエックスまでも歪ませた。

ゼロの考えをよそに、束は喜んだ。

「取引成立だね♪ 私と君は対等だね♪」

「ああ」

「じゃあ、さっそく君のスペックを見せてもらおうか？ あ、もちろんカタログスペックはもう知ってるよ。見たいのは、君の戦闘技能、自分の体をどこまで使いこなしてるかってこと」

そういつて束は無入島地下に作られただっ広い試験場へとゼロを案内し、自らは観察用の強化ガラスの張ってある部屋に引きこもった。

「3Dシミュレータなんて用意してないから実機でいくね？」

つまり、当たり所が悪いと死ぬ、ということだ。

まあいい、実戦には慣れている。とゼロが答えると、目の前に異形が現れた。

「東さんの開発した無人IS『ゴーストI型』だよ。機動力は大したことないけど、ビームとラリアットが強いから気を付けてね。じゃあ、試合開始!!」

——同時に、紅い影が疾駆した。

#### ・観察室

試験場のいろいろな箇所に設置されたカメラが、ゼロとゴーストI型の死闘を映し出す。

「この動き……予想以上に高性能だ。モーションデータ取ったらISに転用できるかも」

『タバネ、あまりゼロをいじめないでやってくれ、彼は本当に戦うことしか知らないんだから——』

エックスは着信音も鳴らさずに、電話から直接束に話しかけた。

ゼロにはあまり聞かれたくない話をするためである。

人間の性格や行動原理というものは、遺伝的な要素もあるが、大部分はその人の育った環境に起因する。

その点はレプリロイドも例外ではない。

エックスはゼロの隠された生い立ちを話し始めた。

誕生の理由は、子供のけんかのような対抗心から。

ドクターライトの作った「X」という世界最高のロボット、「悩む」ことを可能とし、人間のように考え、行動するロボット。

自ら考えることによって、禁止されているはずの人間への攻撃まで可能に出来るという、良くも悪くも「未知の可能性」に満ちていた。

そんな彼に対抗すべくドクターワイリー最後の作として作られたのが「ゼロ」だ。

性能は、「X」を破壊しうる戦闘能力と凶暴性を持ち、そこに人間味は存在しなかった。しかし、「X」は完成直後に、開発者であるライト本人の手によってお蔵入りとなる。

(実際は未来に「X」を託すために来るべき時まで封印した。というのが正しい)

ワイリーもそれがわかったのか、Xの目覚めまで「ゼロ」を封印した。

そして時は流れ、「X」はある研究者の手によって発見され、目覚めることになる。「X」に使われていた技術を基にしたレプリロイドは世界中に広まった。

そして「ゼロ」も目覚めた。

当時の警察機構によって鎮圧された彼は、そのときの損傷で性格が反転、今のゼロの元の人格が誕生する。

ゼロ自体相当優秀なレプリロイドであったので、当時の警察機構は、凶暴ではなくなった彼を喜んで迎え入れた。

その警察機構には目覚めた「X」が下っ端として所属していた。

「なんで技術の大元のエックス君が下っ端やつてるの？」

『その辺は僕にもわからない。目覚めたときのこととはあんまり覚えていなかったからね。僕を目覚めさせてくれた博士のみぞ知るといふ感じかな』

ゼロはエックスと共に、さまざまな戦いを経験する。

レプリロイドの凶暴化事件、ゼロは尊敬していた上司と同僚を失った。

……

レプリロイドの反乱、ゼロは愛する人と、その兄である戦友を失った。地上には人が住めなくなった。

……

レプリロイドの幻覚による錯乱事件、ゼロは、今までの事件の大元にすべて自分の出自が力かわっていることを知る

戦いは長く続き……

そして、彼は眠りに就く。

己に巢食う凶暴化ウイルスを取り除くために。

「寝てる間に、バイルとかいうのにボディを盗られた。」と

『そういうことになるね』

「それで？ ウイルスは除去できたのかな？」

『彼の悲しい記憶と一緒にね』

そう、ゼロはシエルたちに起こされたときには、ほとんどの記憶に障害が発生していた。

具体的には、自分の正体、前述の愛した人とその兄、同僚、上司、などの記憶がなくなっていた。

エックスは「戦争を戦い抜いた相棒」という認識で、何と戦ったのか、誰と戦ったのかは詳しく覚えていなかった。

それらは、断片的に思い出されることはあっても、終ぞ完全に戻ることにはなかった。

——うう、思いだせん

エックスがここまで弱気な彼の声を聞いたのはあれが初めてだった。

「そこから、ゼロ君はレジスタンスのシエルとかいう指揮官の言われるがままに破壊活動を繰り返し返して、あまつさえ当時の最高指導者（コピーエックス）まで暗殺したってわけだ」

東は皮肉交じりに言い、こう思う。

やっぱりゼロはそこらの機械と同じように使い潰されただけではないか。

今、ゼロを失ったシエルは何を思っているのだろうか？

便利な道具がなくなつて困っている？

それとも、捨てる手間が省けた、と万歳三唱でもしているのだろうか？

『君は、どうしてもシエルを悪者にしたいうだね。でも、コピーにも悪いところはあった。ネオアルカディアに引きこもつた人たちにもね』

「……」

エックスが苦笑混じりに言う。東はこの嫌悪感に心当たりがあった。

同属嫌悪だ。

レジスタンスは己の命を守るため、

対する束は己の発明を認めてもらうため、

……武力に訴えた。

動機も規模も、圧倒的に束の方がしょぼい。

そこにも束はいらだった。

『だから、ゼロは本当に戦うことしか知らない。彼が熟知しているのは、どうやって剣を振るい、どうやって銃を撃ち、どうやって攻撃をかくぐつて敵を倒すかだけだ』

エックスが苦笑をやめ、真剣な声で言った。

悲しみを捨て、悩むことすらも拒絶したゼロ。

それを聞けば、束は「機械に戻っただけじゃん」と思うだろう。

だがエックスは、うじうじ悩み続けた自分などよりも、「悩まない」と決断できたゼロの方がはるかに人間らしいと思っていた。

エックスも、シエルやクロワールと同じく、ゼロに平和を知ってほしいと願う一人なのだ。

「……わかったよ。ゼロ君を便利な道具扱いするのはやめる。でも、修理代と、当面の生活費分は働いてもらうよ。こっちも慈善事業じゃないからね」

エックスの懇願に妥協案を提示するにいたった束

『ははは、それぐらいなら大丈夫か。ゼロも、このまま体をなまらせるつもりもないみた

いだし……』

——バゴン!!

黒い巨体が、強化ガラスに外側から叩きつけられ、ガラスにひびが入った。

束自慢のゴーレムI型の成れの果てである。

それを見た束はピュウと口笛を吹くと、ゼロに呼びかけた。

「さすが、伝説のエイユウは伊達じゃないね。第二ラウンドと行こうか」

——戦乙女と英雄、一体全体どっちが強いのかな？

束は、面白いおもちゃを見つけた子供のように笑い、手元にあったパネルを操作した。

# 実戦

——じゃあ、試合開始

束の言葉に、まず反応したのはゴーレムの方だった。

胴体に対して異様に長い手を動かし、ゼロに向けて構え、ビームを放つ。

「ゴーレム……か」

ゼロの紅い輪郭がぶれ、ゴーレムとの距離を一瞬にして詰める。

ビームはゼロの頭部を狙ったものだったが、ダッシュのために姿勢を低くしたゼロの頭上を通り過ぎるだけになった。

ゴーレムの懐にもぐりこんだゼロは愛用の光剣を構え、振るう。

——横薙ぎ、袈裟懸け、大上段

続く戦いの中で、あきれ返るほどに繰り返され、神速とも呼べる域に達した三段斬りがゴーレムの胴体を捉える。

が、その剣撃はゴーレムの表面のエネルギーシールドのようなものを貫通するにはい  
たらなかった。

実質スーパーアーマー状態といっても過言ではないゴーレムが反撃に出る。長大な

腕部を使つてのダブルラリアットだ。

横への回避は意味を成さないため、ゼロはすぐさま背後へ跳躍、目の前に大質量の物が通り過ぎたための風圧を感じながら、彼は自分が目覚めてから最初の戦闘を思い出していた。

……あの時はゼットセイバーで一刀の元に切り伏せたが、今回はそううまくはいかないようだ。

かつてとの違いを再認識しながら、跳躍中に、これまた愛用の銃を構えて連続で発砲、最初の一発だけ、色と威力が少々異なる撃ち方をした。

ゴーレムはよっぽど自身の装甲に自信があるのか、腕でボクサーのガードのような格好を取り、すべての弾丸を受け止めてしまった、当然、ダメージはかけらも無い。

そして再びビームの発射体制に入り、今度はゼロの胴体の辺りの高さを広範囲に風ぐようにビームを放った。

「……ッ!!」

ビームがくぐれない高さにあると認識したゼロは、ダッシュで接近しつつ跳躍し、ダッシュによって生じた横方向の運動エネルギーでゴーレムの頭上に位置どり、再び光剣を構える。

——ツイバンゲキ（墜盤撃）

ラクレッツァン（落烈斬）とも、ラクサイガ（落砕牙）とも呼ばれた、ゼットセイバーを真下に向けて落下の勢いで突き刺す技を使い、ゴーレムに向かって落下した。

光剣がエネルギーシールドと拮抗し、ゼロは空中で一瞬動きを止めた。

ゴーレムがその隙を逃すはずも無く、頭上のゼロをなぎ払った。

だが、ゴーレムにはゼロを殴り飛ばしたであろう手ごたえを感じることは出来なかった。

「エネルギーシールドが尽きたか、攻撃が通るようになったな」

呟くような声が頭上から聞こえ、ゴーレムは自らの腕が斬り飛ばされたことを認識、もう片方の腕のビーム砲でゼロを狙い撃とうとした。

「……遅い」

ゼロが構えたのは剣でも銃でもなく、拳

今までエネルギーをチャージしていたゼロナツクルがゴーレムの顔面を捉えて、殴り飛ばした。

——バゴン!!

飛んでいった巨体が、束のいるであろう観測室のガラスに激突し、強化ガラスにヒビを入れる。

不気味に光っていたゴーレムの目の灯が消え、機能停止した。

『……さすが、伝説のエイユウは伊達じゃないね。第二ラウンドと行こうか』

機能停止を見計らったような束の皮肉を交えたアナウンス。

それと同時に、また、別の無人ISがせり上がってくる。

『ゴーレム』とは異なる、曲線を多用した女性的なフォルムの全身装甲（フル・スキン）の黒いボディに、一振りの刀を持っていた。

その武人然とした出で立ちに、ゼロは警戒を強める。

『なんかどつかのイカれたドイツ人が作った『VTシステム』積んだ名も無きISだよ。って言うのはちよつとかっこ悪いから名前付けようか……そうだね、

——頭が無い（無人の）戦乙女（ブリュンヒルデ）で『デュラハン』って言うのはどうかな』

「知らん」

「あははっ、そうだよね、君にとっては『VTシステム』も、ましてや『ドイツ』もわからないんだもんね♪」

一蹴したゼロに、さもおかしそうに答える束。

「戦うに当たって、一つアドバイスしとこつか。あのISはブレード一本で世界を制した女性の動きを忠実にトレースするように作られてる。さっきと同じだと思おうと痛い目を見るよ」

——じゃあ、試合開始

ゼロはバスターショットを撃ちつつダッシュで直進、対するデュラハンは上下左右にジグザグ機動と取って距離を詰める。

刹那、紅と黒が交錯する。

ゼロは、ダッシュの勢いそのまま光剣を前に突き出す。

レップウゲキ（烈風撃）、センガトツ（旋牙突）またはブライトツ（武雷突）と呼ばれるゼットセイバーの中でも有数の攻撃力を持つEXスキルだったが、デュラハンは身をひねるように剣線から体をそらし、そのまま回転を加えてゼロの肩を切りつけた。

「……………」

ゼロは腕を切り飛ばされるぐらいには思っていたものの、訪れた衝撃はそれには全く足りなかった。

いぶかしげに思いながらも、デュラハンに向き直り、神速の三段を見舞う。

一、二段目は捌かれたものの、三段目はヒットし、シールドエネルギーを削った。

そこでゼロは武器をバスターショットに代え、連射しながら後退しようとして、できなかった。

——瞬時加速（イグニッション・ブースト）

多少の被弾をもとせずに突っ込んできたデュラハンにゼロは対応しきれず、腰溜

めに構えられたブレードの一閃を喰らう。

とつきに腕で胴体を庇ったゼロだったが、やはり、剣閃はゼロの腕を切り飛ばすことは無く、アーマーに切れ込みを入れるに留まった。

わけが分からない現象に一層戸惑いを強めながら、後退は無理だ、と判断したゼロは、デュラハンの刀を返した振り下ろしをかわし、懐に飛び込んで腹部にゼロナツクルを叩き込む。

ゴレムの巨体を吹き飛ばしたほどの威力で、同じように吹っ飛ばされたデュラハンだったが、空中で体制を建て直し、再び瞬時加速（イグニッション・ブースト）でインファイトに持ち込もうとする。

対して、ゼロは一発の弾丸を放っただけであった。

デュラハンは、なんだそんなもんか、といわんばかりに弾丸を一閃、だが、デュラハンの動きはそこで停止した。

——タイムストッパー

バスターショットのEXスキルが発動、電磁フィールドが形成され、数秒の間、対象の動きが拘束される。

ゼロは動けないデュラハンにダッシュで迫り、

ブライトツ（武雷突）で胸を突いた。

限りなく実戦に近い模擬戦を終え、ゼロと束はメンテナンスルームに戻ってきていた。

「いやあ、見事見事、シールドエネルギーなんてどこ吹く風で二機とも撃破されちゃったね。」

ゼロは切れ込みの入ったアーマーの修復とほかに異常が無いかの検査のため、メンテナンス用のベッドに寝かされていた。

「二機目の……デュラハンといったか？ あいつの攻撃はなんだ。手加減しているように思えたんだが」

「それは、仕方ないことだよ。彼女の武器の性質上、ね」

その後束が語ったのは今のISの状況と、世界最強の女性の話だった。

曰く、ISは現在、本来の宇宙開発分野を離れ、もっぱら軍用（アラスカ条約で禁止されているが）または競技用としてしか研究、開発がなされていないこと。

デュラハンはISの『競技』としての側面において世界一を決める戦い『モンド・グ

ロツソ』で優勝し、『ブリュンヒルデ』と呼ばれた女性の動きをトレースした物であるということ。

彼女の武器の特性として、ゼロがてこずったエネルギーシールドを無効化した一撃を放つことが出来るということ。

「つまり、彼女（ブリュンヒルデ）は相手に怪我をさせないように手加減していて、そこも忠実にトレースされていた。ということか」

「二応『絶対防衛』っていうセーフティがついてるから、殺されることは絶対に無いんだけど……頑固だよ、ちーちゃんも」

「……？」

最後のほうの呟くような声が聞き取れなかったゼロは首を傾げる。

「いや、こっちの話……それよりも、君にPKOとしてやってもらったことが決まったよ」「何だ？」

——ブリュンヒルデの、護衛♪

その声を最後に、ゼロの意識は唐突に断たれた。

## 親和性

ゼロが強制的にスリープ状態にされた後の研究室は、にわかに騒々しくなった。

——ウイーン、ウイーン

すべて、束の足の指でもってコントロールされているロボットアームがウネウネとゼロのボディをまさぐり、

——トンテンカン、トンテンカン………キーーーーー………

束が金槌で何かを叩く音、溶接の音や火花が当たりに撒き散らされる。

——ゴオオ——

PC達も負けていない。オーバークロックによって性能を無理矢理引き上げられ、暴走寸前まで熱を持ったPCが、まるで自らの情熱を見せびらかすように、我先にと熱するファンの風切り音、またそこから出る熱風が部屋の温度を底上げしていた。

それらの音が飽和してから、半日ほど音の耐久レースが続いた後、唐突に鳴り止んだ。「ふいふい、何とか予定との誤差0.02ミリ秒の範囲内ですべての作業が終わった……」燃え尽きたぜ。と額の汗をぬぐいながら独り言を言い、ゼロの寝ているメンテナンス

ベッドの端っこに腰掛けた。

「おーい、ゼロくん起きろー!」

束は眠っているゼロの頭をバシバシ叩きながら呼びかけた。

それが功を奏したのか、ゼロが目を開ける。

「タバネツ!!俺に何を……ッ!!」

勢い良く上体を起こし、束をにらみつけようとして驚くゼロ。

半日ほど前まで、低い男の声だった彼の声は、彼の目の前で不適に笑う女性の物に変えられた。体も改造されていたのか、彼の真紅の装甲はなりを潜め、中性的な顔と体つきを持った金長髪的美丈夫がそこにいた。

「はっはっはっ。良くぞ聞いてくれました。ゼロ君にはちーちゃん……ブリュンヒルデの護衛してもらおうに当たって、ドイツに行つて貰うことになりました」

束曰く、今ブリュンヒルデは二年という条件付でドイツにISの教官をしに行つてい  
るそうだ。

ゼロの仕事はそこに潜入し、よからぬ輩が彼女の寝首を搔かないように護衛をするこ  
とである。

ISには女性しか乗れず、女性に扮さなければならぬため、声の変更とアーマー部  
分の着脱式改造などをしたと語った。

「あと、ゼロくんのアーマー。あれをI Sの部品って形でI Sコアに量子化して格納、んで、ゼットハート? とか言うオリジナルボディにしかなかった正体不明の部品が入ってたデッドスペースにそのI Sコアを入れて接続、エネルギーバリアを張れるようになったり、いつでも私と連絡が取れるようになったり、既存のI Sに搭乗できるように表皮に微弱電流を流せるようにしたり……あと、歴代の君の武器も作つといたよ」

「つまり、俺はI Sコアを持つ自律機械……無人I Sになったということか?」

「……それは君の行動次第だね。ただI Sコアを持つ、というだけで、私はI Sと呼ぶつもりは無いよ」

レプリロイドの定義は、「人間と同じように考え、行動するロボット」

対するI Sの定義は、「宇宙開発を目的としたマルチフォームスーツ」

ただの束の駒（I S）として、命令に従うだけの機械に成り下がるか、レプリロイドであろうとするかは、ゼロ次第だ。

束は、暗に「人間らしく行動しろ」と釘を刺し、それよりも! と声のトーンを上げて言い放った。

「ゼロくんの胸に入ってる産まれたばかりのこの子（I S）の名前を決めないとね!」  
決めないとね!、と言っておきながら、あらかじめ決まっていたかのように続ける。

『クロワール』、なんてどうかな? 『信じる』って意味なんだよ! 素敵でしょ?」

「……」

東のとんでもない当て付けに、ゼロは閉口した。

「沈黙は肯定とみなすよ。じゃあ、起動してみてくれるかな。起動の仕方は……」

——数分後

「クロワール、起動」

……

「おつかしーなー？ 起動ワードが悪いのかなあ。なんかほかにも言ってみてよ」

「来い、クロワール」

……

「おいでなさい、クロワ……」

「おっと余所からの引用は感心しないなあ。君自身の言葉じゃないと、彼女は振り向いてくれないよ〜？」

東は嗜虐的な笑みを湛えて言う。

「……………頼む、クロワール」

ゼロの体が光に包まれる。ゼロは光りに覆われる視界の中、

……………ゼロ、また会えたね。

そう、聞こえたような気がした。

真紅の装甲が戻り、レプリロイドのゼロの姿になる。

そのようなを見ながら、東は機器をチェックしながら驚愕した。

「やっぱり君は面白いね。ISの自己進化が常人とは180度違うよ。それに、初回起動から初期化（フオーマット）と最適化（フッティング）に一秒もかかって無い……」

普通なら、歩いたり飛んだり、戦ったりして搭乗者に慣れさせ、初めて一次移行（フアーストシフト）となるはずなのである。

「何か問題でもあるのか？」

「ない……けど、ちょっと調べさせて、三十秒で終わるから!!」

そういうと、自らの周囲に投影型のキーボードを展開、ウサギ耳をかたどった力チューシヤをピコピコ動かしながら猛烈な勢いで解析を始めた。

東がキーボードを消し、地べたに大の字になって寝転がったのを見計らって、ゼロが尋ねる。

「……終わったか？」

「うん、一応仮説が立ったよ」

仮説に過ぎないけど、とぼやき、どんな物か説明を始めた。

『クロワール』が、君の記憶野にアクセスしたんだと思う。ゼロくんが蓄積された膨大な戦闘データ……数百年分？ を解析して、一瞬で最適化を終えたんだと思う」

ISが搭乗者の記憶を覗くことはそれほど珍しいことではない。

搭乗者に合わせて進化するISには、搭乗者を知ることがダイレクトに進化に繋がる。

だが、人間の記憶を覗く……つまり脳みそというたんぱく質の塊から、脳を傷つけずに、しかも機械が認識できる言語で情報を取得するのは、至難の業だ。

「人間と違って、ゼロくんの記憶野は集積回路だから、記憶をいきなりコンピューター言語で収集、解析が出来た。ってことじゃないかな」

「……オレの記憶か」

「でも、それはゼロくんを送り出した後に研究するとして、ミッションの詳細を説明してもいい？」

「ああ」

「まず、ゼロくんの身分なんだけど……」

——10分後、東アイランドを一つの水中艇が出航し、地球を半周ほどした後、空中に出て、ミサイルと同じ機動で航行、ドイツの名も無き海岸に到着した。

それは、「ちーちゃんへ」と書かれ、リボンで装飾されたにんじんシャツルだった。「また厄介事か？、あのバカ！」

めったにかけてこない友人の電話に呼び出され、第一発見者に仕立て上げられた日本人の女性は、心底呆れたように言った。

## 独逸

## 苗字

ゼロを送り出し、動く者は束だけとなった束アイルランド。

一人になった束は、ドイツにいる友人に電話をかけ、「十二時間後にドイツの〇〇に来てね」と一方的に告げ、パタリと携帯電話を折り畳み、まずにまた別の人物に掛けた。

……ガチャ

「ねえ、エックス君？」

『なんだい？ タバネ』

「クロワールちゃん……死んでないよねえ？」

問いかけるように言ったが、束は何かを確信していた。

『……なぜ、そう思うんだい？』

「だって、何者かがこつちの『クロワール』に不正アクセスしてるんだもん。コアネットワークを介して、ね」

相手方はごまかせると思ってたみたいだけど、と呟いて、話を続ける。

「今、コアネットワークに自由にアクセスできるのは、世界に存在する『自我を持ったI S』と私と、エックス君たちみたいなサイバー空間の住人だけ。

さらにその中でゼロくんのことを考えている人物といたら、君と、クロワールちゃん、あとドクターシエル辺りかな？ あ、でもドクターシエルは今いろいろ忙しいだろうから除外で、エックス君はずっとこの電話から会話を聞いてたよね。

そうすると、クロワールちゃんしかないんだよ」

——『クロワール』にこんな（・・・）細工ができるのは。

そういつて、束は空間投影型ディスプレイを見る。エックスも、携帯のカメラ越しに見た。

——ワンオフアビリティ：『裂光覇（れつこうは）』

『これはオリジナルボディの技だね』

「普通、ゼロくんの攻撃一辺倒の戦歴なら、『アースクラッシュ』とか、『滅閃光（めつせんこう）』とかの攻撃系のワンオフに目覚めるはずなのに、これはシールドエネルギー回復技、しかもエネルギーの供給元のアドレスは文字化けしてて意味不明、なんかやばそうだったからロックかけてるけど、でもしつかりバイパスは通ってる」

前述の通り、『クロワール』はゼロの戦闘データを擬似経験データとして累積することで、短期間での一次移行（ファーストシフト）を完了した。

だが、不正アクセスは、最適化の一瞬の隙を突いて無理矢理自己進化プログラムを異なる方向に進化させ、発現するであろう能力を書き換えた。

回復系なのは、まるでゼロの身を案じているかのようだ。と束は感じた。

「私が思うに、文字化けアドレスは何かの目印で、自動的にコアネットワークに開いたサイバー空間に繋がるゲートを操作して、エックス君たちの世界からエネルギーを送ってきてるんじゃないかと思うんだけど……」

『でも、今のあの世界に、エネルギーの余裕はージュールたりとも存在しないよ』

そもそも、理不尽なレプリロイド弾圧が始まったのも、ひとえにエネルギー不足が原因なのだ。

「だから、死んだと思われてるクロワールちゃんが、エネルギーを作って送ってるんじゃないかってね」

束の話の聞いたエックスは一瞬の沈黙ののち、言葉を発した。

『……さすがは『天才』と呼ばれるだけのことはあるね。このことはゼロに伝えるかはすごく迷って、結局伝えなかつただけど大体あつてる。けど一つだけ間違つてることがあるよ……』

『……ボクはゼロに嘘はついていない。クロワールは死んだ。ゼロの知ってる彼女はもう戻らない』

「それってどういう……？」

『ボクは、ゼロにはゆつくり休んで欲しいから、あの世界の新しい問題なんて話すつもりはないけど、君には話しておくよ……本当のことを』

君ならゼロに余計な情報を与えたりはしないだろうから。

とエックスは念押ししてから語り始めた。

.....

一方、ドイツ軍施設

「で？ あのバカと同じ声でしゃべる貴様の正体はなんなんだ？」

ゼロは、織斑千冬によって尋問を受けていた。

「タバネの指示で、オリムラチフユの身辺警護に派遣された。ゼロ・シノノノという」

「織斑千冬は私だが……そんな連絡は受けていない。それに、篠ノ之家は四人家族でお

前のような金髪の親戚はいなかったと記憶しているが？」

千冬は、あのシャトルのデザインといい、登場の仕方といい、束の仕業であることに微塵の疑念も無かったが、目の前に座るどこか無機質な印象を受ける金長髪の女性が、篠ノ野家の一員だとはどうしても思えなかった。

「オレのパーソナルデータ……『コセキ』というようだが、それはタバネがなんとかしてくれたい。それに、ドイツ政府にも許可は取ったと言っていた」

「わかった。今確認する」

千冬はそういって、脇に控えている軍関係者に目配せ、確認を取ってくるように促す。千冬ににらまれた、マジックミラーの奥の関係者達があわてて退室していくのが手に取るようにわかった。

数分後、数枚の書類をもった伝令兵が現れ、千冬に書類の束を渡し、退室した。

千冬は、その書類をばらばらとめくり、ゼロの言ったことの真偽を確かめる。

どうやら、ゼロは遠い親戚筋に当たる人間で、数が月前に両親が急逝、行くあてのない彼女が篠ノ野家の養子に入った。ということになっているらしい。

連絡が遅れた理由としては、束に言い負かされた政府高官が腹いせに通達を目いっぱい遅らせていた。というのが真相だった。

「よし、お前が嘘を言っていないことは確認できた。また、この書類には、お前の滞在目

的が『織斑千冬の警護および被IS教導』とあるが、ISは持っているのか？」  
「ああ」

といって、中指にはめられた紅いリングを見せるゼロ。

もちろん、ISコアはゼロの左胸に収納されているため、リングはごまかしのための偽者なのだが、千冬に知る由は無い。

「なら、第二演習場に来い。まず腕前を見る」

「了解」

ゼロはマジックミラーの向こうに一瞥をくれた後、千冬と連れ立って退室した。

・  
・  
・

### 軍施設・第一演習場

程なくして、演習場にたどり着いたゼロと千冬、演習場には既に、千冬が教官をしている黒ウサギ隊（シユヴァルツェア・ハーゼ）のメンバーが集合していた

「今日から共に私の教導を受けることになった……」

「ゼロ・シノノノだ」

眼帯をつけた少女達の視線は冷ややかだ。なぜなら彼女達は遺伝子強化試験体（アド

ヴァンスト)であり、同族意識が強い。異分子であるゼロを、そうホイホイと許容することは出来なかった。

「参考までに聞くが、ISの搭乗時間は何時間だ？」

「30分弱だ」

それを聞いた千冬は、自分が相手をするまでも無い。と思った。

だが、同時に言い知れぬ不安も覚えた。

もし、ゼロがIS初心者者の動きしか出来ないのなら、あのバカ(東)が気に入るわけが無い。

迷った千冬は、折衷案をとる。

「話にならないな。クラリツサ、相手をしてやれ」

現時点でのこの隊のエースを当てることにしたのだ。

「ですが教官。ここはラウラに任せて、『奴は我がシユヴァルツエア・ハーゼの中でも最弱ツ……!!』ってなるところだと思いまs……」

スパアン!!

千冬の手にあつた書類束から小気味良い音が鳴る。

「口答えするな。さっさと始めろ」

「申し訳ありません。教官」

叩かれたクラリツサは、涙目になりながらISを展開、演習場の中央部に飛んだ。彼女が纏っているISは、ドイツ第三世代IS『シュヴァルツエア・ツヴァイク』第三世代と銘打ちながら、まだ武装のほとんどが開発途上であり、第二世代型の後付装備（イコライザ）を使って戦っている状態である。

対するゼロも、『クロワール』を展開し演習場中央部へ行き、構える。

千冬は「ずいぶん」と小柄なISだな、と感じた。

通常、ISを纏うと目線の高さが通常の1.5倍ほどになる。だが、ゼロのISはほとんど身長に変化が無い。

当然、ゼロがクラリツサを見上げる形になる。

普通の人間なら、自分よりも大きい対象に幾分かの恐怖心を覚える物だが、ゼロにはそれは無い。

千冬にはゼロがまるで、自分より大きい物と戦うのが日常であったかのように見えた。

「では、始め!!」

だんだんと大きくなる不安を尻目に、千冬は試合開始の号令を発した。

## 圧倒／暗闇を斬る幻影

試合開始直後、先に動いたのはクラリツサだった。

「先手必勝!!」

威勢よく叫んで、両腕、両肩に大きな砲身をそれぞれ二門ずつ展開、いつせいにゼロに向かって発射した。

『○○○ミリ砲8門（アハト・アハト・アハト）』

型落ちになった野戦高射砲の砲身をIS用の武装に無理矢理変更したもので、ISを砲台として運用するという、軍部の巨砲主義の暴走の賜物であったが、意表をつくにはこれ以上の装備はなかった。

「ッ!!!」

ゼロは迫り来る砲弾から逃げるようにリコイルロッドのチャージ攻撃を地面にあて、高く飛び上がる。

「対空砲火!!」

八つの砲身が上空を向き、発射タイミングをばらけさせて弾幕を張る。

ゼロは空中でジャンプするような仕草で高度を維持、『クロワール』がゼロの戦闘デー

タを元に生み出したP I C運用術「空円舞（エアジャンプ）」と「飛燕脚（エアダッシュ）」による空中機動で巧みに避ける。

普通のI Sなら、直線に飛ぶところを、ゼロは跳ねるように放物線を描いて飛ぶ。

「ええい……ちよこまかと!!」

ゼロの特異な機動に、当たらないと確信したクラリツサは砲身をすべてパーズ、両手にサブマシンガン、膝にブレードという出で立ちで空に向かう。

「……………」

それに気付いたゼロはシールドブーメランを投げて牽制、勢いをそごうとする。

「当たらなければ、どうということはない!!」

クラリツサはバレルロールしてブーメランの軌道上から逃れ、サブマシンガンを打ちながらさらに加速した。

ゼロも、バスターショットで迎撃する。

「そんな豆鉄砲!!」

クラリツサの言葉の通り、いかんせんチャージしていない射撃は威力が乏しく、クラリツサの接近を許してしまった。

だが、接近戦こそゼロの得意分野である。

クラリツサのブレード付き膝蹴りをリコイルロッドで受け止め、弾いた。

すかさず反対側の膝がゼロに向かうが、こちらは弾かず、鏑迫り合いのようにする。弾かれなかったことをいいことに、クラリツサは目いっぱい力を込め、ゼロをその場に釘付けにした。

「落ちろ。蚊トンボ!!」

そういつて、クラリツサが両手のサブマシンガンからフルオートで弾丸をばら撒く。いくら集弾率の低いサブマシンガンといっても、この距離でははずしやうがない。

ゼロは、生身なら一瞬で人間をミンチに出来る弾雨を涼しい顔で受けていた。

本来なら、シユヴァルツエア・ツヴァイクの膝部ブレードは、A I Cで停止している相手に対して近接攻撃するための武装であったが、A I Cが未実装の今、異なる運用をされていた。

「なっ!?!」

ゼロと鏑迫り合いをしながら弾幕を張ることの夢中になっていたクラリツサだったが、突然、背後からの攻撃を受けた。

「……ハアツ!!」

シールドブーメランが戻ってきたのである。

クラリツサが仰け反った一瞬の隙に、ゼロはリコイルロッドのチャージ攻撃を当て、真下に向かってぶつ飛ばした。

——ズドオオンツ!!!

地面にクレーターが出来、周囲に土煙がもうもうと立ちこめて千冬たちの視界をさえぎる。

その土煙の中にゼロが光剣を構えて突っ込んでいき、程なくクラリツサのシールドエネルギーがなくなったことを伝えるブザーが鳴った。

——勝者、ゼロ

ゼロが瞬殺されるだろうと踏んでいた千冬とシユヴァルツエア・ハーゼの隊員たちは、半ば一方的な試合運びと、ゼロの驚異的な戦闘能力に戦慄を覚えた。

土煙が晴れ、クレーターの中の二人が現れる。目を回して伸びてしまっているクラリツサに向けて、油断無く光剣を構えているゼロ。

「おい。試合は終わった、武装を解除しろ」

「……なるほど、シールドエネルギーがなくなると負けなのか」

千冬の注意に、ゼロは一瞬『?』を浮かべたが、すぐにISを解除する。

東アイランドではシールドエネルギーがなくなっても無人ISたちは止まらなかつたために、ゼロはISとはそういう競技だと勘違いしていた節があった。

「ところで、お前のＩＳ教導の話だが……」

「……何かまずいところでもあったのか？」

千冬が言い淀み、ゼロが聞き返す。

千冬は、意を決して言った。

「教導は必要ない。お前には教官をやってもらう」

ブリュンヒルデ（世界最強）が彼を認めた瞬間だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

伏線編くアフターファントムく

ゼロがこの世界に来る十数年前

その日、とある日本家屋の一室にて一つの産声が上がった。

だが、その子を産んだであろう母親、助産師はあまり喜んではいられなかった。

産声一つしか（・・・）上がらなかつたからである。

——オギヤー!!オギヤー!……

産声を上げたほうの赤ん坊が、助産師の一人に抱えられ、産湯につかるために部屋からいなくなる。

残されたのは、祈るように手をすり合わせる両親と、未だ産声を上げぬ赤子を懸命に治療する医師と助産師だった。

「……………」

医師の懸命の治療もむなしく、どんどん体が冷たくなる赤子、隣の部屋から漏れ聞こえるもう一人の赤子の声が、むなしく響いた。

時間は無常にも過ぎ、医師は赤子の治療をやめ、

「残念ですが……………」

と切り出した。

母親はボロボロと涙をこぼし、父親は血が出るほど口を固く結び、手のひらから血が出るほど拳を握りこみ涙をこらえようとしていたが、涙が彼のほほを伝うのをとめるこ

とは出来なかった。

「……せめて、一度抱かせていただけませんか？」

泣きながら懇願する母、それを一体誰が断れようか。

「どうぞ」

医師が息をしていない赤子を母の胸に抱かせる。

母は赤子の顔を撫で、「ちゃんと産んで上げられなくてごめんね……」とやさしく声をかけて、赤子を胸に抱く。

父親は、見ていられなくなったのか、無言で席を立ち部屋を後にしようとして

——ゲホ……オギャー!!!!

できなかった。

奇跡が起きた。

「おおおっ!!」

医師も助産師も声に喜色を交えて言う。

それが父や母になろうものなら、喜ばないわけが無かった。

母はうれしさのあまりまた涙し、父も今回ばかりはみつともなく男泣きした。

男子と女子の双子。何を隠そう、彼らにとって待ち焦がれた、初のややこだったのである。

その後、すっかりお祝いムードに突入した親戚一同に、父親が代表して名前を告げる。

——女の子は、折れず、曲がらず、良く切れる（頭が回る）女性になって欲しい。という願いをこめて

『刀奈（かたな）』

——男の子は、二度と、その命のともし火が、幻と消えないように

『玄影（げんえい）』

と名づけられた。

・  
・  
そして十年ほど月日は流れ……

玄影は当主から、つまりは父親から、重大な通達があるとのことで学校を早退し、更識家の門をくぐった。

今でこそ、普通の人間（更識玄影）として生活できているファントムだったが、当時の本人の感覚としては、サイバー空間でゼロとの戦いに敗れ、二度目の死を覚悟した途

端に人間の赤子になっていたのだから驚きである。

幸い、更識家は暗部の家柄、レプリロイド時代に培った技術を披露しても気味悪がられることが無かったのは僥倖といえた。

今、裏の世界での彼は「現代に生きる最後にして最高の忍」と敵からは恐れられ、味方からは一目置かれる、そんな立場になっていた。

次期当主に、との声が厚い彼であったが、当主の座になど毛ほどの執着も無く、長男であるために仕方なくといった具合であった。

大広間に向かう廊下の途中で、声をかけられる。

「兄さん」

「……刀奈か、簪はまだか？」

双子の妹の刀奈である。彼女は双子であるにもかかわらず、玄影のことを兄と呼ぶ。「もう広間にいるんじゃないかしら……ほら」

広間には、刀奈と似た顔立ちをした少女と、既に集合していた更識家の者がいた。

「玄影、刀奈、ただいま参上いたしました」

「ご苦労、では、皆に通達がある。今後のことだ」

玄影達が最後だったらしく、すぐに報告が始まる。

今後のこと……要するに跡目関係の話だと匂わせたために、更識の部下達は静まり

返った。

それだけデリケートな問題なのである。

「次期当主（楯無）は……刀奈にする。玄影ではなく、刀奈だ」

それから当主は、異論のあるものはいるか？ と尋ね。数多くの手が上がる。

曰く、

長男がいるのになぜ継がせないのか

長男の方が暗部として優秀なのになぜだ

長男は既に独自の指揮系統を持った忍び衆もいて、指揮能力に問題はないのになぜだ

など、玄影を推すものばかりだった。

当主は辟易し、種明かしをした。

「お前ら、I Sという言葉を知らないわけではないだろう？ あの兵器が台頭すれば、女性

中心の世になってしまう。『長男が跡目を継ぐべし』なんて古いしきたりは、これを期に

変えたほうが更識のためだ。それに、刀奈のI S適正が高く、どうやらロシアのお偉方

から専用機をあつらえてもらえるそうだ。いくら『最高の忍』とその軍団『斬影（ざん

えい）』とて、I Sには勝てまい……連絡は以上だ。解散!!」

当主の決定は絶対、これは裏の世界で『更識』が存続するためにはならない掟だった。暗部の世界では、巧遅よりも拙速が尊ばれる。実行までのプロセスが早ければ

早いほど良いのだ。

玄影を推していた者たちは、苦虫を噛み潰したような顔をして退室し、それを皮切りに皆退室し始める。

最後に残ったのは刀奈、玄影、簪の更識三兄妹だった。

「刀奈、本当によいのか？ 当主などになって」

「兄さんこそどうなの？ 私なんかに当主の座を掠め取られて」

「拙者は一向に構わん。人の問答は、苦手だ」

玄影は即答する。

どちらかというと、玄影は根っからの暗部、人の前に立つのは向いていない。

その点、後に『人たらし』とよばれる刀奈は、暗部としての能力よりも人心掌握術に長けていた。

「拙者がこの家を継がない、ということ、お前を亡き者にしようと刺客を送り込んで来る可能性がある。護衛を手配しよう……」

「いい加減にして!!」

刀奈の身を案じて、護衛をつけようとした玄影だったが、刀奈本人が声を荒げたことで中断された。

いきなりどうしたのかと不思議がる玄影と、いきなりの姉の怒声に縮み上がった簪

「私はもう兄さんに守られるだけのお荷物じゃない!! 正式な更識家17代目『楯無』よ! 自分の身くらい自分で守れる……バカにしないで」

「……ほう、護衛はいらないと、そう申すか」

普段めつたに怒らない姉の激情に、簪はタジタジだったが、玄影はむしろ面白そうに刀奈を見る。

「そうよ。『楯無』なんだからそれぐらい当然でしょ?」

「ならば……羽沼（ハヌマ）、倉建（クラタテ）はいるか!!」

「……ハハッ」

「何なりとご命令を」

片方は忍装束を纏った少女、もう片方も同じく忍装束の壮年の男性がどこからともなく現れる。

「ここにおわす『楯無』殿が慢心せぬように、月に数回、折を見て襲撃してやれ。ただし、誰にも見つかつてはならぬぞ」

「……ハッ」

「御意に」

「え!! 子音（シイン）ちゃんに鉄駆（テツク）おじさん!? 『斬影』の精鋭中の精鋭じゃない!!」

「どうした。『楯無』殿？」

嗜虐を含んだ、悪い（イイ）笑顔の玄影、

17代目更識楯無こと刀奈は、「……努力します」としか返せなかった。

だが、彼女は後にこう思う。

これは当時未熟だった楯無のために、護衛をつけつつ特訓をさせる。という兄の愛の鞭だったのではないか、と……

## 紅蓮に燃える

伏線編くアフターフアーブニル

病室の中には、数多くの人間が右往左往していた。

その中心には、まだ年端も行かぬ少女。

彼女の赤みがかつた茶髪は汗濡れ、乱れていた。

彼女は、病に犯されていた。

始めは何てことない風邪だったのだが、いつの間にか肺炎を起こすほど深刻化していた。

少女が咳き込み、何度目かの血の混じった痰を吐く。

病室の外では、医者から、今夜が山だと言われていた少女の母親が、祈るように病室を見る。

娘の一大事だというのに、父親は来ていなかった。連絡がつかないのである。

これは後に判明することなのだが、父親は、愛人とその不貞の子供のところに行っていたようだった。

父親は、紳士らしく、一人の女性と会っている最中に別の女性からの連絡を確認することにはしなかった。

……浮気が仏国紳士の嗜みかと問われれば、はなはだ疑問ではあるが。

話は病室へと戻る。

少女はがんばった。

だが、無常にも彼女の心臓の拍動は弱まり、停止した。

・  
・  
・

数日後

結局、医師達 노력により少女の心臓は再び動き出し、なんとか一命を取り留めることが出来た。

だが、少女は肺炎による長期間の酸欠状態の後遺症か、記憶を失ってしまったようだった。

少女はベッドから起き上がるなり自分の手をまじまじと見つめ、顔を触り、ひとしきり驚いたあと「俺は一体どうしちゃったんだ？」とつぶやいたからである。

そして時は過ぎ、ファーニールと名付けられていたその少女も愛人の子も、いい年頃の娘となったころ。

その愛人が流行り病で亡くなったというところで、いく当てのなかったその娘が父親を頼ってファーニールの住む家（の別邸）に引き取られたのだが、

——この！ 泥棒猫の娘が!!

開口一番、ファーニールの母親はそういつて彼女の頬を張ろうとした。

「おいおいお袋、叩く相手が違うだろ」

だが、その手は、寸でのところで第三者によって止められていた。

この昼ドラのような愛憎劇に待ったをかけたのは、ファーニールその人だった。

いくら注意しても直らなかつた男言葉は、記憶障害の一種として、医師もさじを投げていた。

「離しなさい！ あの女さえないなければ、あなただつて……」

「……俺のことでお袋がどう思つてんのかはしらねーが、お袋が殴つていいのは、その浮気相手本人か、今もその辺で女漁つてる親父だけだ。こいつが殴られる謂れはねえ」

正論だったが、それだけに溜飲の下がらない母親を見かねて、ファーニールは少女に

話しかけた。

「お袋が迷惑かけたようでありな、俺はファーニール。たしか……シャルロットとか言ったか？ なにか用があるのかはわからねーが、今日はもう別邸に戻った方がいいぞ」

「あ、ありがとうございます……」

「見たところ同じ年ぐらいだろ？ 同じ年に敬語使われるとなんかムズムズするからやめようぜ？」

「うん、わかった」

シャルロットはニコリと笑い、本邸を後にした。

数日後

シャルロットは、毎週彼女の住む別邸に遊びに来る腹違いの姉をとて楽しんでしていた。

デュノア社の公式テストパイロットをしている姉は、いつも週末をこの別邸で過ごしている。

そのときは大抵、姉の仕事の愚痴や、新装備の調子など、ガールズトークとは程遠い

が、他愛ないおしやべりをするだけだったが、普段家で一人のシャルロットにとつてはうれしかった。

だが、今日はいつもと違っていた。

「シャルロット、命令だ。男装して日本へ行け」

来たのは姉ではなく、父。

父とその部下達は、有無を言わせずシャルロットを拘束、デュノア社の極秘施設で男としての立ち居振る舞いを叩き込んだ。

これに、ファーニールは激怒しないわけがなかった。

「よお、親父。こりゃ一体どういうつもりだ？ 一応、言い訳は聞いといてやる」

めちやくちやに荒らされたデュノア社社長室の中で、一枚の書類を手に、ファーニールは父親に詰め寄った。

「お前こそどういうつもりだ？ ファーニール。一介のテストパイロットごときが社長室に無理矢理侵入し、あまつさえこんなにめちやくちやにしておつて……育ててやった恩を忘れたのか？」

「ああ、恩なんか感じてねーな、俺を育ててくれたのはお袋だけだ。親父は金を出してくれたかも知れねーが、そんなもん、俺が開発した全距離対応型兵装の特許料でどうとでもなるはずだぜ……もう一度聞く、この書類は、どういうつもりだ？」

ファーニールとして生まれ変わったファーブニルは、シャルロットに暴力こそ振るおうとしたものの、自分の母親のことは嫌いではなかった。

妬みやひがみといった人間としての感情にあふれている彼女は、ネオ・アルカディアに住んでいたどの人間よりも、はるかに生き生きとファーブニルの目に写ったからである。

ネオ・アルカディアの人間は、何不自由ない生活のなかで、惰性、怠惰が染み付いてしまい、濁ったうつろな目をして、刹那的な快楽に興じるのみであった。

「IS学園に男として入学させたのだ。オリムライチカの情報を盗み取るためにな」

だからこそファーブニルは、ネオアルカディアの人間と同じ怠惰の目をして自分やらむ父親を許すことは出来なかった。

「バイルといい親父といい……人間つてのは、力（権力）を持つとホントろくなことしねーな……企業努力を怠った結果を、実の娘に尻拭いさせてんじゃねーよ。このくそ親父!!」

苛立ちのあまり、社長室の豪華な机を蹴り飛ばしたファーニール。何事かと、社長室のドアの向こうに人が集まりだす。

「つち。時間切れか、じゃあなくそ親父！ わりーがこの『ラファールリヴァイブカスタムI』は俺様が死ぬまで借りさせてもらうぜ!!」

そういつて、ファーニールは社長室の壁を抉り、外に飛び出した。

既に通報を受けていたのか、パトカーはもちろん、軍用ヘリや軍用ISに包囲されていた。

「はっ!! 上等だぜ……少しは楽しませろよ! お前ら!!」

生前、ゼロほどではないが、ファーブニルもかなりの年月を戦いに費やしていたため、数の不利など、むしろ「誤射がなくていいじゃねーか」と不利のうちにも入らなかった。

この一方的な戦いは、面目丸つぶれの軍部と、デュノア社の手によってもみ消されることになり、ファーニールの存在は公式に行方不明とされ、それを知ったシャルロットの心にしこりを残すことになるのだが、それは、今語られるべきことではない。

# 訓練

## 軍施設・通路

千冬の鶴の一声により、教官に抜擢されたゼロ。

今、彼は大いに困っていた。

「どうだ。軍服の具合は」

「……動きづらいな」

「気にするな、どうせすぐに慣れる」

「そういうものか」

ゼロはそう返答するが、生まれてこの方、全身タイトのような（ISスーツと勘違いされた）ボディスーツとアーマーのみで過ごしていた彼にとつて、服という物はどうしても鬱陶しく感じてしまうのだった。

「そして、お前の教導の話だが……仮想敵機をやってもらう」

千冬曰く、教導とは言っても今やっているのは大体の機動や武器の呼び出し、初歩の戦術など、基礎的なことが多く、それらがおおむね完璧であるゼロには必要ないらしい。「シユヴァルツェア・ハーゼの隊員共には、私の訓練で習ったことを実戦に近い模擬戦で

慣らす必要がある。その敵役をやって欲しい。お前にとっても、手っ取り早くISの搭乗時間が稼げるから、先ほどのようになめられる事もなくなる……悪い話ではないと思うが?」

「……オレは、束からの任務（ミッション）が遂行できるのなら何でもいい」

「安心しろ。監視もかねて基本は私と共に行動してもらおう」

「なら、問題は無い」

ゼロの快諾を聞いて、安心する千冬、彼女にはゼロが模擬戦の敵役をやることに對して、前述の物とはもう一つ別の意味を見出していた。

——慢心の予防

どんな強者であっても、慢心すれば格下に負ける。勝負の世界での常道だ。

仮に、ゼロではなく千冬が模擬戦をしたとしよう。それでいくら隊員たちをボコボコにしたところで、「あの人は世界最強だから、勝てるはずがない」と思われてしまつては模擬戦の意味がない。

IS初心者 of ゼロに負けるからこそ、彼女達は勝とうと研鑽を積み、また無残に敗れる。それを繰り返していった先に本当の強者の姿があるのだ。

……そうはいっても母国でもない国にそこまでしてやる義理はないが、任された以上は手を抜くなど論外だ。

などと何とはなしに思っていた千冬だったが、いつの間にか今日の訓練場にたどり着いていることに気付き、教官の顔を作る。

「喜べ貴様ら。今日から臨時の教官殿が模擬戦形式で指導をしてくださる。訓練後、余力のあるものは模擬戦を挑め。報告は以上だ。訓練を始める」

千冬は早口で流れるように言い、本日の訓練へと移行した。

・  
・  
・

千冬は一列に並んだ隊員たちの前をゆつくりと練り歩きながら言う。

「右から順に答えろ。今日の訓練内容は？」

「掴み技（ホールドアーツ）であります！ 教官（ママ）」

「そうだ。では掴み技（ホールドアーツ）とは何だ？」

「フランスの企業のテストパイロットが開発した新しい近接格闘手段であります！ 教官（ママ）」

「では、今までの近接格闘術と何が違う？」

「武器が違います！ 教官（ママ）」

「そうだ。今までのものとは違い、専用の武器を装備する。掴み技（ホールドアーツ）とは読んで字のごとく相手を掴む技だが、何故特殊な装備がある？」

「分かりません！ 教官（ママ）」

「全員腕立て三十回だ。すぐ始めろ」

『了解です教官!!』

一列に並んだ隊員たちがいつせいに腕立て伏せに励む。この光景を見ながら、はじめに比べたら大分ましになった物だ。と感慨にふける千冬だったが、時間も無いので説明を続ける。

「後は私が説明する。本来、ISの腕は非常にデリケートに作ってあり、徒手空拳などすれば一瞬で指関節が使い物にならなくなる。そこでフランスのデュノア社が開発したのが、格闘専用マニピレーターユニット『烈火の腕（インフェルノ・アーム）』だ。格闘専用とはいっても、徒手空拳ではなく相手を掴むことに特化している。腕立てが終わった者から装備しろ」

既に腕立てを終えていた数名が駐機状態のISに搭乗し、演習場においてあつた万力とペンチとレンチが合わさったような形状を持つグローブ型の装備を着用する。

「このグローブには、『セラミカルタン』という特殊な金属を配合した合金が使われているため、生半可な衝撃で破壊することは出来ない。このグローブを使って、相手を拘束し、空いている方の腕で銃撃、剣撃なりでタコ殴りにするもよし、そのまま地面に叩きつけてもいい。この装備の一番の目的は、近接攻撃主体のIS操縦者にプレッシャー

を与えることが出来るということだ」

下手に接近して、きき腕や武器を掴まれてもしたらジエンドだからである。

ちなみに、セラミカルチタンの製造法は、ファーニールによってもたらされた物であり、彼女の失踪と共に失われ、この『烈火の腕』も半ば伝説的な装備になるのだが、それはまた別のお話である。

「大事なものは、相手のどこを掴むか。ということにかかっている、ただ胴体だけ掴んだとしても、反撃されて返り討ちだ」

「こちらも掴むために腕を一本使っているため、相手の武器を一つでも封じねば割に合わないのだ。」

「では、二人組みに分かれて模擬戦、余った者はゼロと組め、分からないことがあれば質問しろ」

説明は終わり、とうとうゼロの順番となった。

「ゼロ教官♪ 組んでください♪」

「クラリツサか、てつきり恨まれているものと思っていたが……」

ゼロの元に現れたのは、先ほどコテンパンにされたクラリツサだった。

「私は、敗北を糧に強くなる女なんです」

「……そうか」

ふっふーん。とドヤ顔で胸を張るクラリツサのテンションに半ばついていけないゼロであった。

「ささ、教官殿。模擬戦を始めましょう。教官もこの装備使いますよね？」

クラリツサは自らのＩＳに装着されたごついマニピレータを指差して言う。

「そうだな」

ゼロには掴むことのできる装備としてゼロナツクルが既にあつたが、あまりひけらかすこともないと思い、『烈火の腕』をゼロナツクルで掴み取つた。

運用方法や、使用制限回数などがゼロの記憶領域に流れ込む。幸い、使用回数に制限はなかつた。

しかし、ゼロはこの装備の造形に少なからず思うところがあつた。

なぜなら、色と大きさは違えど——ファープニルの腕についてたヤツとそっくりだからである。

当時、ゼロは何度も掴まれ、望まぬ大ジャンプを強いられた。

まさか自分がこれを使う羽目になるとは、とゼロは少し運命のようなものを感じたが、さして気にするでもなく模擬戦に集中した。

「じゃあ始めるぞ」

ゼロの掛け声で、二人の模擬戦は始まつた。

「やった。腕を掴みましたよ」

「……甘い」

「んなっ!?! 逆に掴まれたことを逆手にとつて関節技を決められた……なるほど、これは面白いですね」

「……」

「ちよっ……無言アイアンクロー状態のまま壁際に行つてどうするつもりですか!?! もみじおろしとか絶対にやめてくださいよ!?!」

「……」

「え、なんですかそのチャージ済みのリコイルロツ……ぎやあああー!?!」

「クラリツサだけなんか楽しそうよね」

隊員の一人が天高く飛んでいったクラリツサを見ながらもう一人に聞く。

「掴み技自体、A I Cが出来れば無用の長物だからね。皆あまり乗り気じゃないんだと思おうよ?」

「でも、ゼロ教官の強さは興味深いわよね。自主模擬戦出ようかな?」

「仮にも遺伝子強化試験体の一人であるクラリツサが一方的だったもんね」

境界の瞳（ヴォーダン・オージエ）持ちをIS暦三十分の素人が負かすのは、本来ありえないのだ。

故に、彼女達のゼロへの興味は募る。

「もしかして、シノノの研究所の強化人間とか? ほら、名前とかそれっぽい!」

「ガノタ乙、テレビの見過ぎとしか言えないわね」

「……訓練中にサボって無駄話とは……よほど走らされたいようだな?」

——ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

模擬戦を見るのに夢中になっていた彼女達は、背後からの阿修羅に気付かなかった。

訓練終了後、ゼロは隊員たちに取り囲まれていた。

「ゼロ教官、模擬戦お願いします!!」

せいぜい物好きが数人来れば御の字だと思っていた千冬は慌てた。人数が多すぎるのである。

一人ひとり戦っている日は暮れてしまう。明日も訓練はあるため、それは避けなければならぬ。

千冬が助け舟を出そうとゼロに歩み寄ったとき、信じられない一言が発せられた。

「……わかった。全員でかかって来い」

『え?』

隊員たちが驚いてゼロを見る。

「軍隊なのだろうか? 連携が出来なくてどうする」

対するゼロはなんでもないように言い放ち、ISを展開して戦闘態勢に入る。

そこへ千冬がやってくる。

「ISの数が足りないから数試合に分ける必要があるな」

といって即席の三人一組を作らせていった。

模擬戦が開始される段階になってふと、千冬の視界にあるものが映る。

ラウラ・ボーデヴィツヒ、彼女は訓練には参加せず、一人さびしく隊舎へと戻っていった。

「まったく、手のかかるガキ共だ」

千冬は独り言のように言い、ラウラの後を追った。

## 資金繰り、思慕、憧憬

（伏線編）

風雲!! 束城の一日

無数のディスプレイの瞬きと、HDDの回転音やロボットアームの動作音に支配された空間で、束はあるものを作っていた。

『タバネ。一体何を作っているんだい?』

突然、彼女の携帯がしゃべり始め、束はそれに答える。

「……暇そうだねエックス君、あんまり連絡できないんじゃないのかなかったの?」

『一日五分ぐらいは平気さ。最初の質問に戻るけど、それは何?』

話半分にエックスの言葉を聞きながら、束は作業に没頭する。

作業台の上には、何か白い発炎筒のようなサイズの棒状の物体から、幾本ものコードが延び、周囲にはロボットアームが絶えず蠢いていた。

「ちよつと小遣い稼ぎしようかな、って思つてゼロくんの武器の劣化版をセット販売しようとしてるんだ」

販売といつても、束が表に出るわけではない。

東は、株式会社『世界名作劇場』（通称WMT社）というIS専門の、グローバル（国際的）かつニッチ（小規模）であれ、という良く分からない標榜を掲げる会社を裏から経営し、この機械島の改造費用や、研究費用を捻出していた。

「だって、エネルギー系の銃のマガジン（弾倉）代わりになるエネルギーブレードなんて、良く考えるとすごく便利なんだよ」

スナイパーライフルなどの長物を使っている場合、接近戦のためにわざわざ武装を展開する必要がなくなる、ただ弾倉を取って振り回せばよいからだ。

『エネルギー系の武装ってだけでこの世界では最先端だよ。特許とか大丈夫？』

「試験採用してるのは今のところイギリスとドイツしかないね。イギリスはレーザー、ドイツはプラズマだったかな？ 一応両国の研究所に特許料払ってるから、プラズマ版とレーザー版両方作ろうと思ってる」

今では、両国はそれぞれビット兵器とAICの研究にいそしんでいるため、エネルギー兵器関連の特許は極秘、というわけではなくお金さえ払えば、技術として使用できるのであった。

ほかに実用レベルに達している最新技術と言ったら、ロシアのナノマシン、中国の空気砲（空間圧兵器）ぐらいである。

『そ、そうなんだ……』

エネルギー系の武器であふれていた世界の出身であるエックスはプラズマとレーザーの区別など分からないため、曖昧にうなずくだけだった。

程なくして、件の新商品が完成する。

「出来た。商品名は、Zシリーズ第一弾『ゼットセイバー・レプリカ』」

『シリーズ物?! セット販売じゃなかったのか?!』

「いやあ。これ作ってるうちに、急に思いついたからさあ……よくあるじゃん? 創刊号だけ安い、景品つきの雑誌。あれと同じ感じにしようと思って」

『いや、僕にいわれてもわかんないんだけど……』

東は異世界人相手ゆえのネタの通じなさに歯噛みした。

「だから、第一弾の剣だけ安くして、後から販売する銃とか槍とかに、剣を装填しないと使えないようにして、結局全部買ってもらおう。って言うシステム」

『あこぎな商売だね』

「否定はしないよ。でも、こっちも特許料払ってるから、儲けを出すには少し割高にせざるを得ないんだ。だからそれを『あこぎ』というか『商業戦略』というかは人それぞれなんだよ」

東にそういわれ、エックスは納得した。

## 本編

私を追いかけてきたであろう教官が私を呼びとめ、話しかけてくる。

「何故自主模擬戦にでない？ 実力を試すチャンスだぞ？」

「……私は落ちこぼれですから」

「こんな私がかんばったとて、高が知れている。

「それはその目の事か？ それとも軍での評価のことか？」

「どっちもです！ 他の隊員は自主的にオンオフできるのに、私だけ……それにISも

……」

戦闘機戦なら、戦車戦なら、歩兵戦なら

圧倒的に私が勝っていた。

でも、この眼（越界の瞳）の不適合が起こった時から、私は落ちこぼれて行った。

ISの操縦には感覚的な部分が多く、搭乗者の才能や適正も重要な要素になっていたためだ。

「……最近の成績は振るわないようだが、なに心配するな。一ヶ月で部隊内最強の地位へと戻れるだろう。なにせ、私が教えるのだからな」

私の諦めたような表情に対し、教官は笑顔で言い放った。

その力強い笑顔が、私には救いの光のように見えた。

ラウラと話をした日から数日後、千冬は訓練の進捗具合を報告するためにどうしても軍施設を離れる必要があった。

訓練は休み、ということにして朝早くからスモークガラスを張った護送車に乗り込む。

もちろん、ゼロも一緒だ。千冬の隣の席に座っている。

千冬はドイツ政府から国賓待遇で扱われているため、ドイツ政府曰く『万全の警護体制』のもと軍施設を出た。

車でたった数分間の移動、だが、そこで事件は起きた。

「どうした。何か問題か？」

千冬は、不意に停止した護送車の窓から周囲を眺め、運転手に尋ねる。

運転手は千冬に「ちよつと待て」と片手でゼスチャーし無線を耳にあててドイツ語で状況の確認をしている。

運転手の対応に千冬は嫌な予感を感じつつも。男の報告を待った。

だが突然、運転席の男が声を荒げ、無線機を放り出して車から飛び出した。

「……ッ!! チフユ!!」

前方から何かが飛来するのを見たゼロが叫び、千冬の上に覆いかぶさった。

直後、護送車を襲った衝撃から、千冬は何が飛来したのかを悟る。

— R P G だ。

ロケットランチャーの直撃を受けた護送車は跡形もなく吹っ飛び、千冬はゼロに覆いかぶされたまま道路に放り出される。

ゼロが吹っ飛ばされている間に I S を展開したおかげで、千冬はゼロに抱えられるようにして軟着陸する。

「チフユ、ケガはないか?」

抱きかかえられた状態のまま、息がかかる距離でゼロの顔を見てしまった千冬は、ゼロの機械のように整った顔立ちに、同姓であるにもかかわらず、どきりとした。

「大丈夫だから早く降ろせ!」

ブリュンヒルデともあろう自分が助けられてしまったという気恥ずかしさどあい

まって、千冬は顔が赤くなるのが分かり、それを見られたくなくて、急いでゼロの腕を振りほどき距離をとった。

そこまでして、ようやく千冬は周囲の状況を理解する。

護衛車両軍は約半数がタイヤなどに大口径の銃弾を喰らい走行不能、四分の一がRP Gによって大破させられていた。

そして今も生き残った者達と襲撃者達が車をバリケード代わりに絶え間ない銃撃戦を繰り広げている。

そんな中、ゼロはどこかとISの機能で通話しているようだ。

「タバネ、状況を」

『呼ばれて飛び出て括弧略う。みんなのアイドル★ミ束さんだよ♪』

「……タバネ、状況を」

千冬も知っている彼女の声が漏れ聞こえ、飛びぬけたテンションとそれに対応しきれず頑スルーを決め込んだゼロをみて少し落ち着いた千冬だった。

『ちーちゃんも聞いてるだろうから話しちゃうけど、あの武装集団の目的はちーちゃん抹殺だよ。多分、ドイツが干渉してるところかの紛争地帯が出どころで、ドイツのIS部隊が強くなる困る人たちがじゃないかな?』

「で、オレは何をすればいい?」

『指示待ち族とは感心しないね。……見敵必殺（サーチアンドデストロイ）、と言いたるところだけど、とりあえずちーちゃん避難が最優先、ルート出すからそれに沿って進んで、阻む敵はなぎ払っていいから。あ、でも人間は事後処理が面倒だからなるべく殺さない方向で』

「……了解した」

ゼロが通話を終え、千冬に向き直った。

「聞いていたと思うが、オレはお前を連れてここから軍施設まで退避する。飛ぶからしっかりと捕まっている」

「おい！ 待つ……」

ゼロは千冬の返事も聞かず、着地した時と同じ体制になるように千冬を抱きかかえ飛翔する。

『ターゲットが逃走したぞ!!』

『地対空ミサイルを使え！ 逃がすな!!』

襲撃者達が数人、筒のようなものを肩に担いだ。

「フリーガーファウストだ?!」

振り返った千冬が驚く、地対空ミサイルとは言っても、なにせ50年近くも前の兵器だからだ。

だが、古いのは見てくれだけで、中身はきちんと赤外線誘導とVT信管を備えた近代型で、放たれたすべての弾頭がゼロに向かって飛んでくる。

「……バーニングショット」

ミサイルに気付いたゼロはバスターショットを構え、チャージして発射する。

炎属性を纏った弾丸がフレアー（赤外線欺瞞装置）の代わりを果たしミサイルを誘引、空中で大爆発を起こした。

襲撃者側もこれは予想していなかったのか、次弾の装填に手間取っていて、その隙にゼロは十分な距離をとり、無事に軍施設まで退避することができた。

千冬はゼロが奮戦している間、ずっとゼロの横顔を見ていた。

彼女から言わせれば、見ているのではなく、抱きかかえられているせいで、どうやっても視界に入ってしまうだけなのだが、ゼロの強い意志の光の灯った瞳に見とれていたというのもあながち嘘ではなかった。

このときから、もしゼロが男だったら自分は惚れていたかもしれない。と千冬は思い始めるのである。

．．．．  
I Sの操縦とは、自転車と似ている。

いっばしに動けるようになるまでは個人差——それこそ感覚や要領のよさがモノをいうからだ。

だが、それなりに操縦できるようになれば、感覚や要領よりも、勝つための戦略や戦術、立ち回りといった論理的な部分が重要視される。

ゼロが教官に就任してから数ヶ月、ラウラはこの日、部隊最強に返り咲いた。

「フン。かつてのエースとて、この程度か」

「……むう。ちよつとA I Cがうまいからって……」

お互いのI Sの武装がすべて完成した状態での模擬戦はラウラの圧勝だった。

開始早々、クラリツサがA I Cに捕まり、肩部カノン砲で一方的にやられた。

どちらのI SにもA I Cは積んであったのだが、クラリツサはA I C操作がヘタクソだったのである。

A I C——つまりアクティブイナークリッシャー（なぜかドイツ開発なのに英

語表記」とは、相手に向けて意識を集中させる必要があり、相手の動きを見ると反射的に行動する必要のある近接主体のクラリツサとは相性が悪く、逆に砲撃や遠・中距離攻撃に長けるラウラのほうが、相手そのものに意識を集中し、慣性停止結界を発動させるには都合が良いのだ。

「どうでしたか！ 教官！」

「見事だ。だが、あくまで個人戦だ。競技者としては優れているのであろうが、軍属である以上、仲間との連携、旧世代の兵器との連携が出来なければ話にならない」

千冬に褒めて欲しかったラウラだったが、千冬はあえて突き放すように言う。

ラウラは個人戦では最強だったが、タッグマッチ、3on3といった団体戦になるととたんに振るわなくなるのだった。

「それは……私についてこれるヤツがないだけで……」

「本当にそう思って言ってるのか？ 失望したぞ。ラウラ・ボーデヴィツヒ」

ラウラの言い訳を突っぱねる千冬、ラウラにはわけが分からない、と目を白黒させた。「そんな！ 何がいけなかったのですか教官！」

「……訓練後の自主模擬戦に出ればおのずと分かるだろう」

ラウラは隊の中で唯一、ゼロの模擬戦には一度も参加しなかった。

なぜなら彼女は、教官（千冬）以外の有象無象共の教えなど、聞きたくもないと思っ

たからだった。

——教官のように強くなる。

その目標に、他人は不要だった。

ラウラの苦虫を噛み潰したような表情を読み取った千冬。

「そんなに嫌か？　なら、訓練を見て私がアドバイスを出そう。これなら文句はないだろう」

今、ラウラの原動力ともなっている『織斑教官』への憧れを知っている千冬は、仕方なく妥協することにした。

それを聞いたラウラの表情が先ほどとは打って変わって明るい物になる。効果観面だったようだ。

そして、訓練は終了し、自主模擬戦が始まる。

隊員達の人垣が出来る前に、千冬はゼロに尋ねた。

「ゼロ、ちよつといいか？」

「……なんだ」

「今日の模擬戦、ラウラも参加させてもらいたいのだが」

「問題はないが、組わけはどうする」

通常、ゼロの模擬戦は三人一組で行なわれる。ここに彼女が加わると、人数のキリが悪くなる。

「ラウラの試合だけ、一対四の変則マッチを組んでもらってもいいか？」

ゼロVSラウラ+隊員三名の組み合わせだ。

詳細を千冬から聞き、別にかまわない。といったゼロがさっそく試合の組み分けを行なう。

千冬はそれを見ながら、この数ヶ月でずいぶん手馴れたものだ。と素直に感心した。

そして、ラウラ所属のチームは一番最初にゼロと戦うことになった。

ラウラのチームメイトにはクラリツサもおり、まわりで観戦する隊員たちは、エース二人がどこまでゼロに喰らいつけるのか、と固唾を吞んで見ている。

「双方準備はいいな？　では、試合開始!!」

## 思い知る

従来のクラリツサチームの作戦はこうだった。

まずクラリツサが前衛でゼロの攻撃をひきつけ、他の二人が誤射に注意しつつ、アサルトライフルの三点射でゼロのシールドエネルギーを徐々に削っていき、クラリツサが疲れると、役割をローテーション、というものである。

「ラウラのISは砲戦仕様だから、後衛の方がいいのかな？」

戦いが始まる少し前に、ラウラ、クラリツサ、ほか2名は作戦会議を行っていた。

「いや、相手は一人だ。AICで捕まえば終いだろう。だから私は前衛で良い」

「分かった。じゃあラウラは私と前衛、エルザとウルスラは、いつもと同じ援護射撃よろ

しく」

「合点」

「承知の助」

もともとクラリツサのチームメイトであった二人が声をそろえて返事をした。

ちなみに、二人は一卵性の双子である。

「貴様ら、足手まといはなるなよ？」

「大丈夫、皆が与えられた役割をきちんとかなせば、今度こそ勝てるはず!!」

ラウラの微発とも取れる激励に対し、暗に、足手まといなど発生する余地はない。とほのめかすクラリツサ。

そもそも、足手まといという言葉は、足手まといになっている人間側が発する言葉、感情である。

なぜなら、自分が味方を足手まといだと感じたなら、その味方を見捨て、個人戦をすればよいからだ。

だが個人戦で勝てるほど、ゼロは弱くない。

「……ラウラ、一応カノン砲に対空榴散弾かフレシエツト弾かキャニスター弾を装填しといてくれる?」

「なぜだ。徹甲弾の方がシールドエネルギーを削るのに適している。それに弾が散れば誤射の危険性もあるぞ?」

「……あの人は、ただの砲弾なんか、見てから避ける(……)んだよ。だから面で攻撃するか、接近戦で戦ってる間ぐらいしか、まず射撃は通らないと思つたほうが良い」

説得もむなしく、結局ラウラは「AICで捕まえば関係ない」と徹甲弾を選択した。

ラウラがゼロの異常な強さを理解していないことに、クラリツサは不安を覚えずには

いられなかった。

・  
・  
・

クラリツサの不安をよそに、試合は開始される。

「じゃあ、作戦通りに!!」

後衛のの二人が左右に散開し、90度の角度を保ち油断無くライフ十字砲火でゼロを牽制、その隙にクラリツサとラウラは二人の射線を遮らないように両サイドから切り込む。

「……」

ゼロは無言のまま、リコイルロッドを両手に構え、ラウラのプラズマ手刀とクラリツサのプラズマ膝刃を受け止めると、同時に体を駒のように回転させ器用に受け流した。

この超人じみた動きを見て、クラリツサはすぐに体勢を立て直しゼロに接近戦を挑む。

ゼロは、視界の外から飛んでくる援護射撃を、軽くジャンプすることでかわし、今度はトリプルロッドを持って応戦する。

クラリツサとほぼ同時に体制を立て直していたラウラはゼロをAICに捉えようと必死になっていた。

だが、ゼロはクラリツサと交戦してうまく捉えることが出来ない。

「クラリツサ!! 邪魔だ。どけ!!」

「こうでもしないとっ! 後衛がつ、やられちゃうんだよ! ……うおおい!!」

ゼロの槍捌きに圧倒されながら途切れ途切れに答えるクラリツサ。

しかし、その隙を見逃すゼロではない。

もとより千冬から「コテンパンにしてくれ」とGOサインが出ているのだ。

ゼロはトリプルロッドの石突でクラリツサを文字通り突き飛ばす。

「……」

そして、すばやくチェーンロッドに持ち替え、吹き飛ばされるクラリツサに巻きつけ、引き戻した。

「ぐえっ!?!」

無理矢理引き戻されたことにより、クラリツサが素っ頓狂なうめき声を上げる。

「……まずは一人、サウザンドスラッシュユ」

再度、ゼロとクラリツサが接近し、二人の間がキラリと光った瞬間

——クラリツサのシールドエネルギーが無くなった。

「……きゅー……」

気絶し、その場でばた、と倒れるクラリツサを尻目に、ゼロはラウラに向き直り、どこか呆れたような口調で言う。

「……………仲間が連撃を受けている時に中断させるのは、連携の基本だ」  
 「弱いやつ of 失態を、私が一々庇い立てしろというのか？」

「……………さあな。自分で考えろ」

ゼロは素晴らしい捨ててラウラに背を向け、双子の十字砲火に向かって直進、多少は被弾したものの、双子と接近戦にもつれ込んだ。

『ラウラ、ワイヤーブレードで援護射撃、カノンは使っちゃダメ』

双子のうちの一人からプライベートチャンネルで指示が入る。

『何故だ！ 当たらなくても牽制にはなる』

拡散しない弾種なのだから、狙いさえつけておけば誤射は起こらない。

そう考えたラウラは六本のワイヤーブレードをゼロに向けて発射しながら双子にいきり立って反駁した。

ゼロは間近に迫ったワイヤーブレードをトリプルロッドを弁慶のように振り回すことで弾き、一瞬足が止まる。

カノン砲を撃つ絶好の機会が訪れたところで、双子からの通信。

『……………ダメ、あなたの腕前では、絶対誤射になる（・・・）』

——ラウラは、激怒した。

「私を、バカにするなああ—————っ

!!!!!!!」

容赦の無いカノン砲の連射、放たれた徹甲弾は狙い過たずゼロへと向かう。着弾の瞬間、ラウラはゼロと目が合い、その眼光に、まるで冷や水を浴びせられたかのようにぞつとした。

砲弾は、轟音を撒き散らし、周囲にもうもうと砂煙を巻き上げる。

……確かに、当たった。

だが、着弾前に見たゼロの表情からは、とてもあれで終わったとは思えないからだ。ラウラは焦燥ばかりを募らせ、数分のように感じられた数秒が過ぎ去り、砂煙が晴れ、彼女は祈るようにそこを見た。

そこに立っているのが、あの双子であつたらどんなに良かっただろう。だがそこには――

――ゼロが無傷で立っていた。

「あ、ああ……」

ゼロの足元には、双子が倒れていた。

思わず声を上げ、恐怖するラウラ。

ゼロは死神のように、光る剣を構えゆつくりと、しかし確実にラウラに近づいてゆく。

「う、うわあああああああああああ————！！！！」

ラウラはパニックになりプラズマ手刀で切りかかったが、ゼロに難なくかわされ、無防備な体制をさらす。

——薙ぎ

——袈裟懸け

——大上段

ゼロの光剣が三度閃き、ラウラのシールドエネルギーは底をついた。

## 絶技

## 本編

ラウラ、クラリツサ、双子が気絶している間に、模擬戦は滞り無く進み、彼女達は演習場の隅っこで目覚めた。

辺りを見回した四人は、他の隊員たちが例外なくのされ、何かやり遂げたような達成感に満ちた表情で、この演習場の隅っこに打ち捨てられて死屍累々の惨状を形成しているのを目の当たりにした。

演習場中央部では、ゼロが千冬から「やりすぎだ。馬鹿者」と説教を喰らっている。

「……」

ふと、四人とも目が合い、ラウラがぶいとそっぽを向く。

「……あのさあ。私言ったよね。徹甲弾は当たらないって」

「真っ先に落とされたヤツが何を言っているんだ。寝言は寝て言え」

「ぐぬぬ」

ラウラに言い負けたクラリツサがorzの体制になる。

「……二人とも」

「喧嘩やめ……」

双子が仲裁に入り、誤射をしてしまったらしいラウラはばつが悪そう下を向く。

「ねえ、いまだんな気持ち？　誤射しないとか豪語してたのに誤射しちゃって、ねえ今どんな気持ち？」

ぐぬぬから立ち直った『敗北を糧に強くなる女（笑）』がお返しとばかりに煽り立て、今度はラウラが渋面を作る。

——スパアン!!

「ぐほあ!!!」

「煽ってどうする。喧嘩でもするつもりか？　馬鹿者」

説教を終えた千冬が、いつの間にかやってきてクラリツサの脳天に出席簿のような固いあれを振り下ろした。

「織斑教官!!」

ラウラの表情が劇的に変化して、ピシリと敬礼をするが、堅苦しい挨拶はいらん、と千冬が手で制す。

「ラウラ、さつき誤射がどうか言っていたようだが、ゼロがなにをしたのか見ていなかったのか？」

教官の質問に、首をかしげるクラリツサとラウラ、双子はなぜか訳知り顔だ。

「あれは誤射ではない。ゼロに意図的に誤射にさせられたんだ。双子はそれを警戒していた。ラウラへの指示は、そのためだ」

「……捕まってる」

「盾にされた……」

——あなたの腕前では、絶対誤射になる

ラウラは唐突に理解した。

双子は誤射を『する』のではなく誤射に『なる』と言ったのだ。

「カノンの狙いは正確だった。だが正確ゆえに、読まれてしまった」

千冬は詳しく何が起こっていたのかを説明し始めた。

「ゼロは一発目を切り払って地面に着弾。砂煙を巻き上げ視界をさえぎり、チェーンロッドとホールドアーツで双子を同時に拘束、カノンの射線上に放り投げた、と口で言うのは簡単だが……」

こんなことを一瞬で行える人物は人間ではない。

状況判断から行動までが早すぎるのだ。

しかも、機械のような正確さというおまけつき。

このことを安易にこいつらに言って良いものかと千冬はためらって言いよどむ。

そこに、クラリツサが手を上げて質問する。

「では、織斑教官がゼロ教官の立場ならばどう切り抜けますか？」

「私か？ 私なら………かわすか全弾斬り伏せるかどちらかな」

「どっちも人外じゃないですかーやだー」

——スパアン!!

「みぎやあああああ————!!」

「何か言ったか？ 馬鹿者」

クラリツサの何気ない突っ込みに千冬の出席簿らしき書類束が火を噴き、クラリツサのたんこぶが二段になったところで、今日の訓練はお開きとなった。

・・・伏線編・・・

く日常と黒ウサギとレプリロイドく

ある日の訓練終了後、半ば隊のムードメーカーと化しているクラリツサが隊員たちを集めた。

「ねえ、皆どう思う？」

ゼロがここに来てから早数ヶ月が過ぎ、黒ウサギ隊の隊員達の間ではある噂が広まっ

ていた。

曰く

・ゼロ教官は霞を食べて生きている。

・ゼロ教官はトイレに行かない。

・汗とかかいたところ見た事ないし、いつ触ってもひんやりしててきもちいいといった類のものである。

ツツコミ役（弟）が聞いたのなら「どこの仙人と昭和アイドルだよ！ 上二つ

！」などと間髪いれずにツツコミであらう胡散臭さを持っていた。

「でたらめでしょ？ ゼロ教官だって人間なのだからトイレぐらい……」

「チツチツチ。甘い、甘いよエトヴァス少尉！ この類の行き過ぎた根も葉もない噂は織斑教官のときには一切発生しなかった。だがゼロ教官の時には発生した……後は分かるな？」

キリリと格好をつけて皆を見回し、反応に困った隊員たちを代弁して双子が口を開く。

「……なるほど」

「分からん……」

「ええい、察しの悪い双子めい！！ ならばこのクラリツサ様が直々に……」

「つまり、『火の無いところに煙は立たない?』」

「さすがだよエトヴァス少尉……出来れば私の見せ場を取らないで欲しかったが」

クラリツサが喜び勇んで説明するより、一足速くエトヴァス少尉が正解してしまったため、話はスムーズに進んだ。

「……要するに」

「ストーリーキング……」

「こら、その双子!! ひらったく言うんじゃない! これは……訓練、そう! 自主訓練の一環だ。ゼロ教官に気付かれずにどれだけ行動を監視できるのか、というやつ!!!」

クラリツサの言い訳は破れかぶれな理論もはなはだしくはあるが、ゼロ教官なら仮にばれたところで「……そうか」程度で済みそうだな、と隊員の全員が思っていた。

そして、作戦は実行される。

その日は、軍施設のすべてのトイレ入り口に小型カメラが取り付けられ、トイレに入るものをモニターに出していた。

肝心のゼロ教官には常にメンバー一人が尾行して近況を報告、不審な行動を取ったのなら逐一報告が出来るようになっていた。

『双子、首尾は?』

「……ばっちし」

『もーまんたい……』

双子は外見の類似性を利用し、一人はモニターの監視、もう一人がアリバイ工作という大役だった。

『本当に決行するんですか？ もし織斑教官にでもばれた日には……（ガクブル）』

『な、なんてことをいうんだエトヴァス少尉……その発想はなかった！ 無かったことにしないと我々の精神が持たない（震え声）』

『あ、ラウラ気絶した』

『捨て置き、この程度(!?)のリスクに耐えられんようではこの先ついてはいけまい（失禁一步手前）』

『了解なり〜』

・  
・  
・

夜になつても、ゼロ教官は本当にトイレにも仕官食堂にも行かなかった。

ということとは、朝から今まで、食事も排泄もしていないことになる。

その日一日、たまたま体の調子が悪かった、またはラマダーンだったということは断

じて無かった。(ラマダーンとは、イスラムの断食文化のことである)

数日にわたって監視したわけではないので、結局噂の真偽は分からないが、少なくとも、人の見ているところでは、食事も排泄もしないらしい。

と、クラリツサは報告書風にまとめた反省文に綴った。

「……何故ばれたし。しかも織斑教官(鬼)に」

——スパアン!!

「何か言ったか?」

「キリキリ書きます。といいました」

「そうか」

大部屋に集められた隊員たちは、なれない正座で反省文を書かされていた。

早く書き上げなければならぬのに、足の痺れが集中力を猛烈に削いでいく、書き上げなければ、正座を解くことも許されないので、さらに足が痺れるという悪循環に陥っていた。

作戦はうまく行っていたのだ。

だが夜になって、なぜかモニタールーム(双子の部屋)が織斑教官(鬼)によつて強襲された。

双子妹(エルザ)は果敢に闘った。だが相手が悪すぎた。

一瞬で昏倒させられ、モニタールームを占拠されたらあとは流れだ。

嘘の指示を教官（鬼）が出し、集合したところを一網打尽。

ねっ。簡単でしょ？

——訓練は順調か？ 大馬鹿者共

誘い込まれた大部屋で凄みのある声でこういわれたときに、一体何人が失禁しかけただろうか。

私？ これは汗だよ（震え声）

織斑教官が離れたことで、隣のエトヴァス少尉の恨みの声が聞こえてきた。

「何でラウラだけ処罰されないの……ッ!!」

これは他の隊員も少なからず思っていた。

早々に気絶してしまったラウラは、そもそも関与を疑われていない。

このことで、後にラウラは他の隊員と一時的に疎遠になるのだが、今は語るべきではないだろう。今は、反省文を書くことが先決だ。

——数時間後、足の痺れのせいで、生まれたての子鹿のような足取りで隊舎へと戻る隊員たちが確認された。

ちなみに、ゼロは最後までこのことを知らなかった。

この報告書風の反省文を読んだ千冬は驚いた。

ゼロは外で食事をしない。

反省文には『部屋でそれらのことをしているのだろう。難儀な性分だなあゼロ教官は』と推測されていた。が

「ゼロは一体どこで食事をしているんだ……？」

ゼロと相部屋の千冬が見た限りでは、部屋の中で食事やトイレに行ったことなどなかった。

千冬の疑問は深まったが、彼女は社会人故、一日使って尾行、などという選択肢は取れず、数日のうちに、疑問自体を忘れてしまった。

## 能動的慣性相殺兵装

私一人ならば勝てた。

A I Cで捉えさえすれば、あとは一方的な展開になる。

あのI Sの射撃武器は、拳銃もどきしかないのだから。

メインウエポンが近接武器のI SにとってA I Cとは天敵だ。

一方的に狩られる存在となるだろう。

あの時は少し動揺してしまったが、足手まといさえいなければ、ゼロ教官など、恐れるに足りない。

訓練が終わり、皆が隊舎に戻る中、私はその旨を教官に報告した。

「つまり、自分が負けたのは、誤射の動揺とその足手まといの仕業だど？」

「はい」

何ということだ。と千冬は心の中で悪態を付く。

当初の千冬は、ゼロの圧倒的な強さを見せ付けることで、ラウラの伸びきった鼻っ柱をへし折り、なおかつ仲間との連携の大切さを学ばせようとしていたのだ。

結果は、真逆。

ラウラは、個人戦なら勝てる。あいつらは足手まといだといった。

ゼロのあの超人的な戦闘技巧を見て、ラウラ個人の一体どこに勝算があるというのか。

百歩譲ってAICが勝算だというのなら、あまりにも浅慮が過ぎるというものだ。

「……わかった。それだけ言うのであれば、ゼロと個人戦が出来るよう手配しよう」

「ありがとうございます!! 教官」

ゼロには申し訳ないが、もう一度完膚なきまでに叩きのめしてもらおう。

花が咲いたような笑顔で礼を言ってくるラウラを適当にあしらひ、千冬は部屋へと戻った。

次の日の早朝、千冬はいそいそと起きだして久々に朝の自主鍛錬に行こうとしていた。

「チフユ、こんな早くにどこへ行くつもりだ?」

ゼロが突然ベッドから起き上がった。ゼロはレプリロイド故、明確な睡眠という概念は存在しない。

「起こしてしまったか、すまない。……少し、走りに行こうと思ってな」

「オレも同行しよう」

千冬は、そういえばこいつ（ゼロ）は私の護衛でここに来ているんだっとな、と思いで出して、二つ返事で了承した。

千冬は規則的なペースで（といっても、かなりの速さで）軍施設の敷地内を走り、少し開けたところで木刀を使った素振りを始めた。

「……（じーっ）」

彼女と寸分違わぬ速さで追従していたゼロは、その場で千冬を見ながら手持ち無沙汰気味に佇む。

千冬は思った。

「……気まずい。と

そして、千冬は、この状況を打開するべく行動を開始し、以前より気になっていたことを尋ねた。

「そういえば、お前のISは剣も使っていたらどう？」

ゼロの流れるような三連撃、千冬が見たどの流派にも属していなかった。

木刀を一本しか持ってきていないため、手合わせが出来ないことを、千冬は悔やんだ。

「……それがどうした？」

「その……素振りをしてみないか？ お前の剣が見たい」

「ああ、わかった」

ゼロは千冬から木刀を受け取り、片手で握った。

踏み込み、姿勢を低くしながらの切り下ろし。

そこから、三段斬りををし、飛び上がりながらの切り上げ、落下の力を利用した唐竹割り

素振り、というより、剣術の演舞のようだった。

だが少し、違和感を覚える。

三段斬りの二から三段目、三段目から切り上げへの連携が心なしか鈍いように思えた。

千冬は、覚えた違和感を素直にゼロに尋ねた。

前者の違和感は、木刀の光剣とは異なる重心によるもの。

後者は、本来繋がらない技を無理矢理組み合わせたことによるものであった。

流派を尋ねると、ゼロは我流だと答える。

「我流といつても……敵を叩き斬るためだけの、真正正銘の殺しの剣だが」

木刀を千冬に返ししながら、付け加えてそういった。

「敵？ お前は戦争の経験があるのか」

「……チフユの言っている『戦争』がハイワでない状態のことをいうのなら、そうなんだろう、確かにオレは戦っていたからな……結局ハイワが訪れたのかは、わからずじまいだが」

「どうして」

「オレを庇って死んだ戦友には、『平和を知れ』と言われたが……」

——オレには、「ハイワ」が、わからない。

無感情な声で言った言葉に、千冬は絶句した。

恐ろしいまでの戦闘技能、

常に隙の無い所作、

食事等の過度な秘匿

そして、この言動

ゼロが生まれてからほとんどの時間を戦い続けているという証明でもあった。

「……オレがここに来た日のことは覚えてるな?」

千冬は声を出さずに首肯する。

「あの日、クラリッサに『敗北を糧に強くなる』とか、そんなことを言われたが、理解できなかった。オレのいたところでは、敗北は死にしかならなかった。勝ち続けなければ

生き残れなかった」

弱者は蹂躪され、強者の掲げる歪んだセイギや理想が当然の物とされていた世界。

千冬がふとゼロのほうを見る。

ゼロの精悍な印象の横顔は、かつて抱きかかえられながら見たときよりも数段もろく、危ういものに感じられた。

——こいつ（ゼロ）をこのまま放っておいてはいけない。

「……？ チフユ、何故そんな顔をする」

千冬の、哀れむような、今にも泣き出しそうな悲しみを湛える瞳に気付いたゼロは途中で話をやめた。

「っ！ な、なんでもない、ばかもの!!」

千冬は、情けない顔を見られた恥ずかしさに思わず顔をそむけ、その行動に怪訝そうな表情を向けてくるゼロに、そっぽを向いたまま続けた。

「わ、私で良ければ……」

「？」

「……お前に『平和』を教える手伝いをさせてもらえないだろうか？ ゼロには……その、教導や家事で世話になっている。恩返し、というわけではないが、私も、ゼロが困っ

ていることに対して協力したいと思っっているんだ」

千冬は顔が赤くなるのを感じた。

かつて、何かを言うのにここまで緊張したことはあつただろうか。

そして、ゼロの「……よろしく頼む」という言葉に、ここまで胸が暖かくなったことがあるか。

この気持ちの正体を、千冬は、まだ知らない。

・ ・ ・

翌日・訓練終了後

他の隊員たちに、自主訓練の中止を告げ、先に宿舎に戻し、訓練場にはラウラとゼロ、審判の千冬しかいなかった。

開始と同時に、ラウラは六本のワイヤーブレードを伸ばして、ゼロを囲い込むように攻撃する。

「……」

対するゼロは、接近したブレードをリコイルロッドで弾き飛ばしながら、ブレードが来ない前方に進み、ラウラとの距離を一気に詰める。

「かかったな！ 食らえ!!」

そのままリコイルロッドを叩きつけようとしたゼロの手が止まる。

A I Cに捕まったのだ。

だが、ゼロは、A I Cによる拘束が全身に及ぶ前に、反対の手にチャージ済みのバスターショットを持ち替えていた。

「……遅い」

——発砲

「ぐあッ!!」

特大サイズのエネルギー弾がヒットし、ラウラは溜まらず吹っ飛ばされる。

「……クロウラーシールド」

追い討ちとばかりに、ゼロはシールドブーメランを投げた。

「なめるなあ!!」

飛ばされた際に外れた眼帯から、虹彩異常の左目が覗く。

『越界の瞳』

I Sと対応した擬似ハイパーセンサーによって、A I Cの精度が飛躍的に上昇し、高

速で地を這うシールドブーメランを固定する。

「……」

ゼロは持っていたバスターショットを四連射。

エネルギー兵器は、A I Cでは捉えられないため、ラウラは回避を選択、シールドにかかったA I Cが解けてゼロの手元に戻った。

平然とたたずむゼロに対して、『越界の瞳』と無理矢理な回避で疲労の見えるラウラ。既に、勝敗は決していた。

数分後

ラウラのシールドエネルギーが尽きた。

ゼロがI Sを解除し、ラウラに背を向けて宿舎に戻ろうと歩き出す。

「お前は……何故そんなに強い!! 教官のように何か実績があるわけでもなく、私よりもI Sに乗っていないお前が!!」

ラウラは地べたに這い蹲るようにして上体を起こし、ゼロの背中に問いかけた。

ゼロは、迷い無く答える。

「……オレは、自分の信じるモノのために戦ってきた。

目の前に敵が現れたなら……叩き斬る。戦う理由があれば『強い』か否かは関係が無い」

戦闘用レプリロイドとして作られたゼロにとっては『強い』理由など、それこそどうでも良かった。

だが、それがラウラの逆鱗に触れた。

何のために強くなったのか。

何故、強くなることが出来たのか。

『強い』とは何なのか。

ずっと悩んでいたことを、ゼロは瑣末なこととして切り捨てたようにラウラは感じた。

まるで、そんなことは知らん。といわんばかりに

当たり前である。なぜなら彼（ゼロ）は悩まないのだから。

「私は、お前を認めない!! その『信じるモノ』とやらの言いなりになって戦っているお前など、機械となら変わらない!! 機械の『強さ』など、私は絶対に認めない!!」

「……………好きにしろ」

千冬から見ればとんでもない暴言だったが、ゼロは眉一つ動かさずに返答した。

——ドゴオオオン!!  
直後、遠方で爆発が起こった。

## 200℃の戦い／形見の男

無敵の生徒会長、更識楯無。

「生徒会長は誰の挑戦でも受ける」という彼女の言葉が表しているように、生徒会長とは全学年でもっとも強いものが就任する。

彼女を下すことが出来れば、生徒会長になることが出来るのだ。

——では、彼女は今まで一度も黒星を付けられたことがないのか？

答えは否である。

「生徒会長権限で、あなたと戦えるようにお膳立てをしたの。私と戦いなさい、レヴィ」  
「嫌よ。生徒会長なんかになりたくないし、私の不戦敗でいいわよ……サラシキさん？」

イギリス代表候補生、レヴィア・オルコット

数年前、イギリスで起こった爆破テロで両親をなくし、自身も瀕死の重傷を負う。そして偶然、名門オルコット家の当主（セシリアパパ&ママ）の目に留まり養女となり、以来オルコット姓を名乗る。

IS学園の二年生の中で、更識楯無と人気を二分する群青色の髪を持つ美少女である。

楯無が、男女問わず、周りの人の好感度を上げて行き味方に取り込む『秀吉型』の人気者に対し、彼女は馴れ合うことをせず、信賞必罰を徹底、彼女の生き様そのものに惚れる人間を作る『信長型』の人気者であった。

それはさておき、

彼女こそ、このIS学園で唯一、現無敵の生徒会長更識楯無に黒星をつけた人間なのだ。

——それは、彼女達が一年生の三学期のクラス対抗戦決勝でのこと。

・ ・ ・ ・ ・

「知っているとは思うけど、一組のクラス代表、更識楯無よ。よろしくね」

「えーと、三組のクラス代表代理、レヴィア・オルコット。こちらこそよろしく」

お互いにISを纏い、アリーナへと進み、挨拶を交わす。

彼女達は試合開始直前に、互いのことを知り合った。

楯無は慢心していた……わけではないが、今まですべてのクラス対抗戦で優勝している彼女にとって、もはや作業でしかなかった。

いかにも、戦いを楽しんでいるかのように見せ、接戦に見せかけつつ相手を倒す。

接待となんら変わらなかった。

「フフ……その目、彼と出会う前の私にそっくり……」

「……？」

何か言った？」

自己紹介を終え、楯無を見た彼女がぼそりと呟く。ISで強化された聴覚でも聞き取れないほどの声だった。

「気が変わったの……本気で行くわ。気をつけてねサラシキさん？」

言い終わると同時に、開始のブザーがなった。

——ガギン!!

十メートルは離れていた距離が一瞬で詰まり、レヴィアの槍と楯無のランスがぶつかった。

そのまま柄同士の鏝迫り合いに持ち込む。

「瞬時加速（イグニッションブースト）……やるわね。オルコットさん」

「あら、まだまだこれからなのにな」

罅迫り合いから、突き、払いを駆使して数合打ち合う。

楯無のランスは、騎士槍（ランス）の名のとおり、突くことに特化した円錐形の形だが、レヴィアの槍は、切る、突く両方の出来る形状をしたエネルギー刃を持っていた。

楯無のIS『霧纏の淑女（ミステリアス・レイディ）』には、水を使った装甲がある。ナノマシンを混ぜ込んだ水を、『アクアクリストル』と呼ばれる武装で操っている。

楯無は疲れてきた振りをして、その身にエネルギー刃を受け始めた。

エネルギー刃に触れられた水装甲は、じゅうと音を立てて蒸発してゆくが、すぐに補給されるため、見かけではダメージはない。

空気中に拡散する水分、これが楯無の狙いだった。

「ねえ……なんか暑くないかしら？」

この不快感こそが、必殺技の準備が整った証。

打ち合いをやめて、距離をとりレヴィアに話しかけた。

「そりゃ、あなた発の水分が、湿度を底上げしてるからじゃないの……それとも、何かの作戦？」

「鋭いわね……でも、もう遅いわ」

一瞬でレヴィアに濃霧が纏わりつき、爆発した。

『清き情熱（クリア・パッション）』と呼ばれる水蒸気爆発を利用した必殺技。

もうもうと立ち込める湯気が楯無の視界を覆い、彼女は落胆したように肩を落とした。

「もう少し楽しませてもらえない物だと思ってたけど……拍子抜けね」

「……それはどうかしら？」

湯気がトンネル状に晴れ、そこを通過してレヴィアが槍を構えて一直線に突き進んだ。

「くうっ!？」

楯無はとっさにランスで防げず直撃、シールドエネルギーに大ダメージを負う。

追撃を防ぐためにランスでなぎ払うようにして牽制し、最初の距離に戻った。

……何かがおかしい

楯無はあることに気付いた。

本来、ミステリアス・レイディは、水による装甲で守られていて、仮に直撃を受けたとしても、水が蒸発するだけで、特にダメージはないはずなのだ。

なのに、直撃。

答えは、貫かれた水の盾と、レヴィアのISが雄弁に語っていた。

「……凍、つてる?」

「そう、水を使えるのは、あなただけじゃないの……といっても私は氷限定だけれど」

レヴィアの纏うI Sに、氷の意匠が追加されて、ドレスのようになっていた。彼女のI Sデータには、こんな能力はなかったはずだ。

「私のI S『蒼海の海神（リヴァイアサン）』は、ドイツとイギリスの共同開発だね。A I Cが積んであるのよ」

知っていた。それに彼女のA I C適正があまり高くないことも

「そして、私がA I Cで止めることが出来たのが、熱運動だったの」

でも、固体の熱運動はさすがに無理だから絶対零度は作れないんだけどね。とレヴィアは苦笑交じりに言った。

.....

熱運動とは

物質を構成する分子や原子の乱雑な運動のことであり、熱の正体である。

.....

この単一能力（ワンオフアビリティ）っぽいものの名前は『近似零度（ニア・アブリュート・ゼロ）』と名付けられ、両国の間で秘匿されていたのだという。

『清き情熱（クリアパッション）』も、それで無力化したのね」

「そうよ。私に水は通用しないわ、たとえナノマシン入りでも、凍ってしまったら水は動かないもの。それに……」

——ねえ、なんか寒くないかしら？

レヴィアはそういつて妖艶な笑みを浮かべた。

「!?」

楯無は驚愕する。なにせ、自分のISに霜が降りていたからだ。そして、霜を振り落とそうと足を動かしたが、凍り付いていて動かない。

「さっきの攻撃のときに液体窒素を使ってあなたのISと周囲の気温を下げたの」

窒素は空気中にくらでも存在する。

レヴィアはそれらの熱運動を抑制、液化し—196℃の液体窒素として使用したのだった。

「……まったく、でたらめね。秘匿されるのも納得だわ。完全に私のメタISじゃない、それ」

文字通り、少し頭が冷えた楯無は、アクアクリスタルの中の水を限界まで温めて流すことで氷の拘束を解いた。

「でも、負けない」

更識楯無は、負けるわけには行かないのだから

「やつと本気の目になったわね。少しは楽しませてくれるといいんだけど……タイクツ、させないでね？」

「言われなくても!!」

——そこから先は、激闘と呼ぶにふさわしい戦いだった。

決着がついた。

楯無が体制を崩したところに、レヴィアが槍を突きつけた。

だが、彼女のシールドエネルギーはゼロになっていた。

「……私の負け、ね。サラシキさん……だったかしら。また戦いましょう」

驚くほどあっさりとは敗北を認めたレヴィア、ISを解除し、アリーナから去ろうとしている。

「手加減したって言うの!?!」

楯無は、レヴィアが槍を突きつける瞬間、能力を無駄に発動してシールドエネルギーを空にしたのを見ていた。

それをプライベートトチャンネルで追求した。

「何のことかしらね? そんなに不満なら、もっと強くなって私を楽しませて欲しいわ」  
優勝おめでとう。とだけ告げて、レヴィアは振り返らずにアリーナの奥に消えた。

——アリーナ、控え室

「ねえ……ファントム、いるんでしょ？ あの子が負けかけたところの映像、削除してもらえない？ 次期生徒会長さまと互角に戦うと、私も候補にされそうだから」

——私は、彼（・）が来るまでに、出来るだけ強くなっておく必要があるの。

誰もいない空間に向かって語りかけるレヴィア。

だが、数日後、映像は修正されていたので、意志は伝わっていたようであった。

話しは現在に戻る。

「あなたが負けると、必然的に生徒会メンバーに組み込まれることになるんだけど、それでもいいのかしら？」

「……私は、生徒会なんかにははいらない。それに、サラシキさんに勝つても、どのみち生徒会長にされちゃうじゃない。『また戦いましょう』とはいったけど、面倒ごとは好き

じゃないの」

「あら残念」

楯無は『無念』と書かれた扇子を開いて微笑む。目は笑っていないが。

「それに今は、ちよつと気になる人がいるのよ」

「織斑一夏くんのこと……」

「ちがうわ。私が興味のある男は、彼（・）一人」

『氷の女王』も恋をするのね」

レヴィアのあだ名でからかいながら、楯無は扇子を裏返し『青春？』と書かれた面を見せる。

「さあ、どうかしらね？」

少なくとも、皆が織斑一夏に抱いているような爽やかなものではない。

——もっと、どす黒くて、こびりつくような歪んだ愛。

レヴィアは、自らの内面の感情を悟られぬように、妖艶に微笑んだ。

………彼女の待ち人が、彼女の前に現れるのは、もう少し先の話である。

く形見の男く

IS学園には現在、生徒を含めて四人の男性が所属している。

織斑 一夏（おりむらいちか）

世界で唯一、ISを動かせる男子。イケメン。難聴気味。

轡木 十三（くつわぎじゅうぞう）

学園長の夫。齢70にして、未だ現役、用務員長をしている。僕の上司だ。

更矢識 玄影（さらやしきげんえい）

同じくIS学園の用務員。僕とは一度も顔を合わせたことがない。上司曰く、まじめに働いているらしい。僕の先輩だ。

そして、最後が僕、

ミラン・レジスタン

詳しい説明は省くけど、前世は文字通り『雑兵A』つてのをやってた。

雑兵らしく生き、雑兵らしく死んだ。

まあ、今僕は生きているわけだけど……

それはさておき

この世界に生まれ変わって、紆余曲折あつて、いざ就職!! つてなったときに、面接会場を間違えて、ここの面接を受けてしまったんだ。

そしてなぜか轡木さんに気に入られて（別に変な意味ではない）、今に至る。

「ここは生徒相談室じゃないんだけどなあ……」

「そんなこと言わないで聞いてくださいよミランさん」

僕の目の前にいるイケメンは、言わずと知れた織斑くん。

最近、用務員室に来て、いろいろなことを相談してくるんだ。

曰く、幼馴染に無視された。

曰く、女友達から謂れのない暴力を受ける。

曰く、姉の愛が痛い。

等（エトセトラ）々（エトセトラ）

初めのうちは、最近流行のいじめかとも思ったけど、詳しく聞けばほとんどの問題が『痴情のもつれ』で片付いた。

彼の周りにいる女子は七人。

大和さん

イギリスさん

中国さん

フランスさん

ドイツさん

ロシアさん

日本人

生徒の個人情報なので、彼は偽名を使って話した。

すべてに共通して言えることは……

「うん。リア充爆ぜろ」

「なんで弾とおんなじこと言うんですか!? ミランさんだって、既婚者じゃないですか」

「かわいい女子に囲まれるのと、結婚していることはまったく違う」

前者が砂糖菓子なら、後者は酢昆布だ。それくらいの隔たりがある。

「いいじゃないですか酢昆布。俺は好きですよ」

「確かに、酢昆布はうまいけどさ……そういう話じゃないでしょ」

僕が「あの子達は君に好意をもっているんだよ」というのは簡単だ。だが、大人の横

槍ほど、ろくな結果を生まない、と思っっているの、言わないことにする。

「ですよー。そういえば、ミランさんって、この学園の女子に告白とかされたことありますっ?」

あるよ。そりゃ何回も

「レジスタンさん。私と付き合ってください!」

「いや、僕既婚者だから、娘もいるから」

「不倫関係でいいです!」

「いや、ダメだから。離婚とか親権とかややこしいことになるから」

「私があなたを養います! 良いママになります。家事は得意です! ……さあ、さあ

さあさあ!!!」

「ひいつ!? た、助けてえ! 犯される!!」

——アッー!!!

「ないね。悲しいことに」

言える訳がない。こんな恥ずかしい思い出。

結局、僕の悲鳴に駆けつけてくれた織斑先生のおかげで事なきを得ただけだね。

「ですよね!! そう簡単にもてるわけがないですよね!! いやあ、仲間がいて助かりま

した。共に彼女が出来るようがんばりましょう!!」

僕、もう結婚してるんだけどなあ……。という返事も聞かずに去っていった織斑君、罪深い男だよ。

いつか刺されないか心配になってきた……。ヤンデレにはお気をつけて

・  
・  
・

ミラン・レジスタン

IS学園用務員。既婚者、パツシイという娘がいる。

愚直に仕事に励む姿は女生徒に好感を持たせるには十分な物がある。

特にイケメンではないが、それゆえに「私でも勇気を出せば……。 (寝取れるかも)」と思わせてしまう罪作りな外見だが、彼は妻一筋なため、ナイスボートには至っていない。

## 対峙

——ドゴオオオン!!

遠方で爆発が起こった。

『緊急事態発生、各員、第一種戦闘配備、基地内にて侵入者、繰り返す……』

侵入者、というあたりでいぶかしげな表情の千冬。

「おかしい、ここに戦略的価値など……」

「……ところがどっこい、あるんだよ。ISつつう核よりも割りのいい戦略兵器がな!!!」

演習場の入り口付近、思わぬところから返答があった。

そこにいたのは、IS（シユヴァルツエア・ツヴァイク）姿の妙齡の女。

「……何者だ」

ゼロがクロワールを展開しながら問うた。

「巻紙礼子、って偽名だ。所属と本名（コードネーム）は……素直に聞かれて教えるわけ

ねえだろ？」

女は荒々しい口調で返答、獰猛な笑みを浮かべる。

「……は、虎の子部隊の訓練施設だけあって、数多くのISが配備されてる。そのくせに

ISに乗るのは素人に毛が生えたレベルのひよっこ共と来た。これは襲われても仕方ねーと私は思うんだが……」

「IS強奪……そうか、亡国企業の連中か」

「ほお。かの有名なブリュンヒルデ様に覚えられるたあ、光栄だね」

千冬の推測は襲撃者本人によって肯定された。

「467機しかない兵器をぶんどるなどというイカれた発想を持つ輩はそういういなからな」

「ははっ。違いねえ」

巻紙礼子と名乗った女はにやりと笑った後、ゼロをまじまじと見る。

「一応、駐機状態で放置されてたこいつを持ち帰れば任務達成なんだが……気が変わった」

——その紅いIS、くれよ

「……断る」

問答無用、といわんばかりに斬りかかろうと殺気を強めたゼロ。

「いいのか？ そんなこと言ってお前はともかく、その白いガキと生身のブリュンヒルデさまは、流れ弾にでも当たったらおっ死んじまうつてのによお」

だが、巻紙礼子の一言と、千冬たちに向けられた武装を見て踏み止まらざるを得なく

なった。

「それに、スナイパーに狙わせてっから、おかしな真似しやがったら……わかるだろ？  
大人しくしろよ」

そう言いながら、彼女はゆっくりとゼロに近づき、40センチほどの装置を取り付けた。

『剥離剤（リムーバー）』ってんだ。聞いたことぐらいあるだろ？」

「……知らんな」

「なら、身をもって知るといいぜ」

装置が展開し、四本の脚がゼロに取り付いた。

そして、そこから特殊な電流が流される。

「……………」

ただの人間だったのなら、自らの身を焼く電流に悶絶していただろう。

だが、ゼロは戦闘レプリロイド。この程度の電圧では、ゼロにそこまでの苦痛を与えられることは出来なかった。

しかし、剥離剤（リムーバー）の目的はそこではない。

ゼロの真紅の装甲が消え失せたのである。

「な、ISが解けた!？」

一部始終を見ていたラウラが驚き、千冬は『存在しない兵器』の存在とゼロの窮地に顔をしかめた。

だが、驚いているのは、彼女達だけではなかった。

「おりよ？ 本当ならコアだけになるはずなんだが……なんかミスったか？」  
それもそのはず。

ゼロのISは、たとえ解除されていても待機形態をとらず、ゼロの左胸に格納されているため、外に出てくることはないのだった。

「ま、でもその指輪が待機形態ってんなら、それをもって返りや、あとはどうとでもならあな」

そういつて、巻紙はゼロの指からリングを抜き取る。

その間、ゼロは不気味なほどに沈黙を保っていた。

巻紙は、指輪をしまうと、ゼロに背を向けて歩き出し、こういつて手を上げた。

——じゃあな、死ね!!

ゼロの左肩が吹き飛んだ。

「……?!」

オイルと金属の破片を撒き散らしながら宙を舞う自らの腕にはゼロは驚きで目を見開く。

「おいおい……冗談だろ!? 対戦車ライフルだぜ?」

だが、先に言葉を発したのは、巻紙。

スナイパーに心臓を狙って撃たせたのだ。普通の人間ならばミンチになってもおかしくはなかった。

たかが腕の一本で済む筈がないのだ。

「義手……?」

ラウラが、飛散する機械然とした破片を見て思わず呟いたが、別の角度から見ている千冬は、もっと恐ろしいものを見ることがなった。

——ゼロの肩口からありえないモノが露出している

心臓の位置に覗く、手のひらサイズで球形のソレは世間一般に『ISCコア』と呼ばれている代物に酷似していた。

スコープから覗いていたスナイパーも含め、誰もが一瞬呆ける中、ゼロが真っ先に我に帰って、行動を開始した。

「……」

ボディにくっついていたりリムーバーを素手（ゼロナックル）で剥がし、

「……………これは、返す」

巻紙に取り付けた。

「ぐあああああああああああああああああああ!!!!!!」

これが本来の反応、電流が流れ、彼女の纏っていたISがコアとして出現した。

これこそが、本来の使用用途。

「……………まだ続けるか?」

ゼロは片腕のまま、ハアハアと息の荒い巻紙に、いつでも掌底を放てる構えで問いかけた。

「……………チッ。食べねえ女だぜ」

対戦車ライフルを食らってもほとんど動揺しない胆力。出自不明のIS。巻紙、いやオータムにとってゼロの存在は謎だらけだった。

「結局、坊主（収穫がない）のまま撤退かよ。情けねえぜ」

「逃げられるとも思っているのか?」

悪態をつくオータムに、狙撃手の射線上から非難した千冬が問うた。

返答は、最初と同じ獰猛な笑み。

「ああ、俺たち亡国企業（ファントムタスク）の根は、お前らが思ってるよりずっと深い。

あばよ」

そして、どこからともなく投げ込まれた催涙スモークグレネードが炸裂し、ラウラと千冬を襲った。

煙が晴れたとき、そこに彼女はいなかった。

そして、顔と目を覆うラウラと千冬に対し平然と佇むゼロが告げる。

「……手傷は負わせた。追跡は難しいが、しばらくはまともに動けないだろう。コアの奪取も阻止出来た」

防ぐのが遅れたラウラは、未だ目も開けられずに咳き込んでいるが、千冬はすぐに立ち直り、ゼロを見た。

「お前は……何だ？」

「オレは……」

『人間と同じように考え、行動するロボット。レプリロイドだよ♪ ちーちゃん』

千冬の質問には、彼女の幼馴染であり、ゼロの雇い主である束が答えた。

## 結末

時は、オータム撤退の少し前。

エムは、スコープ越しに金髪の女の後姿を眺めていた。

この襲撃で唯一、殺しても良い存在だった。

なぜなら本来、この女は施設には在籍していない。あるお方の強い希望により、滞在を強引にねじ込んだ存在なのだ。仮に殺しても、テロリストの仕業では先方も追及の仕様がないただろう。と内通者から報告を受けていた。

滞在目的も、「織斑千冬の護衛」であり、任務を全うして死んだ。とでも言うっておけばごまかしも効く。

オータムが手を上げた。

それを合図に、エムは引き金を引く。

女の身には重過ぎる反動を無理矢理抑えて、徹甲弾を撃ち出した。

「おい、エム。何で肩なんか狙いやがった？ 返答次第ではただじゃおかねえ!!」  
「……化け物じみた反射でとつきに回避されたのかもしれない。少なくとも、私は肩なんぞ狙っていない」

オータムとの合流ポイントで落ち合うや否や、胸倉を掴まれ追求される。

——この剣幕では、真実を話しても信用されないだろう。

そう思い、嘘をついた。

それぐらい荒唐無稽な話だったのだ。

一度心臓に入った（・・・）弾が肩から直角に抜ける（・・・）なんて

さらに、心臓と思しき部分が奇妙な光を放つ球体だったなど、笑い話にもならない。だが、

もしかするならば、

あれ（・・・）が見間違いではなかったのならば……

……あれはISコアであり、弾丸はそこで兆弾した。と考えると、辻褄が合う。

辻褄は合う、が……

「奴は……一体何なんだ？」

エムは奇しくも、織斑千冬と同じ類の疑問を口にしていた。

## — 演習場

いきなり現れた幼馴染（東）は爆弾発現をしたかと思えば、こんなことを言い出した。  
『ちーちゃんへの説明はあと！』

とりあえずゼロくんの今の姿をドイツの人間に見られるのはマズいから、先に転送するよ。四十秒で支度しな!!』

ゼロは私物を一切持つてきていないため支度など必要ない。あのバカ（東）は言外に四十秒で別れの挨拶を済ませろ。と言っているようだ。

なんともまあ、急な話だ。

私は、このような場面で、何か粹な言葉が吐けるわけでもないの、ゼロの言うに任せることにし、無言で待った。

「……」

五秒……

「……」

十秒……

「……」

十五びよ……

「……ええい、馬鹿馬鹿しい!!」

くそ、失念していた。コイツは私をはるかに超える口下手な奴だった。寡黙だ。といえば聞こえはいいが、こんなときまで無言なのはいかなものかと思う。

「ゼロ！ お前がいて助かった。感謝している」

私が沈黙に痺れを切らして、ゼロに話しかける。

「……チフユ、こちらも世話になった。礼を言う」

「ああ。……そういえば、『平和』の何たるかを教えそびれてしまったな。許せ」

「……問題ない」

「最後に一つだけ聞かせろ。お前は何だ？ お前の答えが知りたい」

「俺は……ゼロだ」

「……そうか、お前らしい」

奴には、人間だろうと何だろうと、関係ないのだな。

その言葉を最後に、ゼロは光に包まれ、跡形もなく消えた。

電話が鳴る。あのバカ（東）からだ。

『さあ……ゼロくんの昔話を始めようか』

『といっても僕らにとつては昔話でも、君たちにとつては……未来の話かもしれない』  
東とは別の、男の声がある。

だが、私は気にも留めずに二人の話を聞いた。

…

内容は、おおむね、ゼロとエックスが東に語ったものと変わらなかった

…

話を聞くうちに、千冬は、驚きとは別の感情がこみ上げてきた。

後悔だった。

私は、名目上ゼロの教官だったが、なにも教えてやることが出来なかった。

武器を取らず、誰かを殺さずに生きてゆける世界こそが、平和だというものに

もし、『次』があつたのなら……

……私は、全身全霊で、ヤツに『平和』の何たるかを教えてやろうと思う。

『具体的には、積極的にデートに連れて行ったり、とかく?』

「バカッ、何を言っているんだバカ!」

私に、春など……そういう方面において、人並みの幸せなど訪れるはずがない。

……第一人、守れなかったのだ。これ以上、背負うものは増やしては、取りこぼしてしまいかもしれない。

それが、怖い。

『ま、ゼロくんはあつちの世界でも想われてる（……）から、ライバルは多いよね』  
どちらにしろがんばってくれたまへ、オッズは八一（8・1）でシエルだから。と突っ込みどころ満載の台詞を漏らし、束は電話を切った。

私は、ゼロが抜けたことによる自分の仕事量の増加に辟易しながら、ドイツ軍が駆けつける軍靴の音を遠くに聞いていた。

・  
・  
・

「ねえ、ゼロくん、何か言い残すことはあるかな?」

笑顔の束の手にはドリル（天元突破式）があり、こめかみには青筋、今にもゼロを鉄

クズにしたいお（ω、＃）という意志に満ち満ちている。

「……待て、話せばわかる」

「私の故郷で、その言葉ををこの状況で言った人は皆、帰らぬ人になったよ」

——問答無用、つてね？

ドリルが回転し、整備台に縛り付けられたゼロは、視界いっぱい広がる螺旋を見ながら、意識を手放した。

『……タバネ、財布は大丈夫？』

スリープモードにしたゼロを黙々と修理する束に、もはや東アイランドの常連と化したエックスが聞く。

何せ離島だ。レアメタルなどが海底にしこたま眠っている海域だったため、内部回路を直すことは出来たのだが、今回は根本的な部分を損傷しているため、チタン、鉄、アルミなどといった基本的なマテリアルが必要になった。

当然、どこからか運んでくる必要があるのだが……

「なんとかね。………あんにやろー!! こつちが下手に出れば付け上がりやがつて!!

全修理代の九割が輸送費だなんてふざけるのも大概にして欲しいよ。あいつらの情報、警察にリークしようかなあ!？」

足がつかないよう非合法の輸送業者をいくつも経由しているため、価格が数十倍に

なっているのである。

東は思い出し怒り、とも言うべき憤りを、ゼロの修理作業に没頭することでぶつける。ドリルは脅しであり、『修理代は高いからあんま壊すな』というのを伝えたかったらしい東だが、効果は薄そうだった。

『ははは……』

東の剣幕に若干引き気味のエックスだった。

「でも、今回の損傷は、装甲をケチった私のせいだからね。あまり強くは言えないんだ」  
そもそも、もとの世界では、ゼロはアーマーをはずすことがなかったために、オリジナルならあつたはずのアーマーの下の装甲が廉価版（コピー）の設計図ではオミットされている。

アーマーをつけてさえいれば、見かけ上の装甲値は変わらないからである。

東がそのアーマーをISとして格納してしまったため、問題点が浮き彫りになった。「今度は、体表の数ミリ下に常にエネルギーバリアを張って見てもいいかもしれない」  
『そうだね。時に、稼ぐアテはあるのかい？』

「実はね……ごによごによ」

そんな話をしながら、ゼロの修理は着々と進んでいた。

## I S 学園

## 試験勉強

## S 学園の第一アリーナ

開けた天井に、広大な空間、そこには三人の人間が対峙していた。

一人は、緑の髪の乙女。

「ええつと……I S 学園教師、山田真耶です。搭乗機体は『Rーリヴァイヴ』」

一人は武人然とした少女。

「堂々と名乗れるほど立派な名前はない……しいていうなら中華人民共和国代表候補生

兼I S 学園三年生、搭乗機体は『丙龍（ピンロン）』……いざ、参る」

最後は紅いI S の女。

「……ゼロだ。機体は——」

——三人が名乗りを上げたところで、試合開始のブザーが鳴った。

.....時は遡り、数ヶ月前。

「ゼロくんには、IS学園に行ってもらおうと思うんだ」

「ああ」

「.....ねえ、IS学園がどういう場所か知ってるの？」

「知らん」

束は額に手を当ててうなだれた。

ゼロは基本、頼まれたことを断らない。断れない。というのが正しい。

彼がレジスタンスにいたときは、彼の任務はどれも組織の存続がかかっているものであったために、そう身についてしまっている。

「あのさあ.....そんなに簡単にはいはい安請合いしてると、体がいくつあっても足りないよ。」

「.....そうだな。次から気をつける」

素直過ぎるゼロの返事に、言い知れぬ徒労感を感じた束はふう、とため息をつき、話

題をI S学園に変える。

I S学園とは、一口に言えばI Sを学ぶための学校といえよ。

だが、いかんせん、I Sも学園も作られてまだ数年しか経っていない為、I Sのことを詳しく教えられる人材などが不足していた。

「ぶつちやけ、高校と一緒くたにする必要はないと思うんだけどね。日本政府は何がしたいのかわからないよ」

I Sは宇宙工学、ロボット工学、機械・情報工学といった分野の技術がふんだんに使用されている。

本来、それらは大学で習う分野だ。

なぜなら上記の学問を理解するには、高校物理学・数学・化学・生物学等の理解が前提となる。

いくら、競争率激高の受験戦争を勝ち抜いたとはいえ、新入生の基本的な知識は中学生レベルだ。三年間で、一般的な高校のカリキュラムとI Sの仕組みや扱い方などを叩き込まねばならない。

……この場に一夏がいれば「それなんて無理ゲー？」とツツコミを入れていただろう。だが、考えてみて欲しい。

真に絶望すべきは、生徒ではなく教師なのだ。

「やることが多いから、授業は駆け足になるし。高校だから、あんまり落第者は出せないんだ。ま、東さんには関係ないけど?」

東は、他人事のように言い放ち、ゼロも、他人事のように聞いていた。

「……で、オレはそこで何をすればいい?」

「I Sで生徒を叩きのめすだけの簡単なお仕事だよ。」

「……なるほど、襲撃すればいいのか」

ゼロの発言に、東が面食らう。

エックスはというと、驚きもそこそこに、東の驚いた顔に大爆笑をはじめ、事態は一気にカオスになった。

「ばかやろー!! そんなわけないでしょー!! 教師だよ、きよ・う・し!!」

立ち直った東が、ぶんすかと擬音でも出そうな雰囲気です訂正した。

『一般教養を学び、戦技を教える。だから、教師とは少し違うけどね』

株式会社『世界名作劇場(World Masterpeace company)』のテストパイロット兼、I S学園戦闘講師っていうところに強引にねじ込んだんだ。給料は出るし、授業も受けられる、まあ、席はないけど……あと、新商品を試したりもしてもらおう。そろそろZシリーズの新作出す予定だし、宣伝もかねてるんだ」

これが、東の金策だった。

この計画の通りにことが運べば、

IS 学園教師の収入＋テストパイロットの収入＋宣伝効果で会社の売上増

といった形で東に金銭が転がり込む。

「ゼロくんの修理代もそうだけど、箒ちゃんのための IS 作りたいから、そのための費用集めも兼ねてるんだよね〜」

東の脳内では、

箒「ふええ〜ん。私も専用機欲しいよお。お姉ちゃん」

←

東「はっはっは。こんなこともあろうかと!!」

←

即日配送（東付き）

←

箒「キャー。お姉ちゃん素敵!! 抱いて!!」

という、鮮やか(?)な仲直り計画が始動していた。

そのために、お金がある東であつた。

「うえひひひ……箒ちゃん。やさしくしてあげるねえ……」

『というわけでゼロ、君には採用試験を受けるために、数カ月後に二ホンに行く必要があ

るらしいよ』

妄想の世界に入って使い物にならなくなった束に代わってエックスが説明した。

「なら、その数ヶ月の間は何をすればいいんだ？」

ゼロの疑問はもつともだったが、エックスと束の二人にとっては愚問だった。

『……勉強だよ』

とりあえず、常識から学びなおそうか。と束が付け加えた。

・  
・  
・

……結論から言おう。一般常識の勉強はすぐに終わった。

人間つぼく振舞う訓練も一応（・・・）終了した。

ゼロはレプリロイド故、人間で言うところの『暗記』に相当するプロセスに時間がかからないからである。

「よし。じゃあ次はISについて学んでもらおうか」

「……？ 『クロワール』は問題なく扱えているが？」

疑問のこもった視線で、束を見返すゼロ。

束は得意げになって、「ちっちちちち」と指を振って返答する。

「甘いよゼロくん。あれ（クロワール）は君専用の I S だ。問題なく扱えてくれなければこつちが困るんだよ。技術者としてね」

「……」

「私が言ってるのはさ。量産型の I S にも問題なく乗れるように、つてことなんだ」

I S 学園の授業では、教員も、量産型の I S に乗ることがままある。むしろ専用機など持っているほうがおかしい。

「それで……」

「ジャジャーン!! とセルフで効果音を鳴らして、束の後ろにあったカーテンを取り払った。

そこには、駐機状態の一機の I S。

それは、日本の国産第二世代型 I S 『打鉄（うちがね）』に似ているが、ガード型本来の追加装甲はなく、全体的にスマートなフォルムをしていた。

「ちよつと古いけど、今はこれしか無かったんだよね。ちよつと乗ってみてよ」

「……ああ」

第 1. 5 世代型 I S 『玉鋼（たまはがね）』

当時の日本政府が威信をかけて開発した第一世代 I S 『鉄（くろがね）』から『打鉄（うちがね）』を製作するに当たって、データ収集のために作られたワンオフの量産型であつ

た。

このISが役目を終えた際に、コア以外の外装が競売にかけられたのを、密かに束が回収して未登録コアを使ってこのISを作り上げた。

「量産型だから、自己学習プログラムはロックされてる。普通なら、適正Cあれば感覚で乗り回せるんだけど……どうかな？」

第一世代型ISのコンセプトは「とにかくISとして動くものを作ろう」というもので、武装などは少なく外付け式で、対する第二世代は、「豊富な『後付武装（イコライザ）』を使用し兵器として高い汎用性の実現する」であった。

その中間である1・5世代は、後付武装（イコライザ）は貧弱だが、各所に武器を装備できるハードポイントが儲けられていた。

「普通の動作は問題ないが、飛び方がわからん」

IS操作における飛翔、というのはほぼ感覚に頼るしかない。だが、ゼロにはそれが難しかった。

クローワールの場合は、ジャンプすれば勝手に空中ジャンプしてくれるように、プログラムされていたからである。

「うーん、じゃあ発想を変えよう。飛んでる敵と戦ったことはあるよね。そいつらはどうんな感じで飛んでた？　そこを思い浮かべながら、ゼロくんも同じように飛ぼうとして

みて。そうすればあとはISが勝手に飛んでくれる。なんなら、ISの飛行訓練のデモンストレーションの映像でも見るかい？」

腐ってもIS開発者である束の的確なアドバイスにより、ゼロは一般IS操縦をマスタ―していった。

・

・

・

そして、時は動き出す。

「……………ゼロだ。機体は——『玉鋼』」

採用試験開始である。

## 丙龍

ゼロが受けた試験は、I S 学園教師と三年生のタッグとの二対一、型落ち I S の使用とかなりゼロに不利な内容である。

だが――

「この人……強い！」

戦い始めてすぐに、真耶は驚いた。

地力が違いすぎるのだ。

今は、慣れない量産型 I S のせいなのかどこかあらの残る操縦と数の利で真耶達が押しているように見えるが、それも時間の問題かもしれない。

なぜなら、ゼロは、銃口の向きと目線から射線を読み、真耶の弾丸が撃たれる前に避けている。しかも、丙龍の猛攻を裁きながら、だ。

真耶の知る限り、そんな達人じみたことが出来そうなのは織斑千冬ぐらいのものである。

陣形は丙龍が前衛で、真耶のラファールが後衛。

『第2. 5世代（なりそこない）』ISの丙龍は、搭載された特殊装備の都合上、遠距離攻撃用の武器は、アサルトリピストル一丁しか装備されていなかったが故に、この配置は必然だった。

ゼロは、玉鋼のハードポイントにつけられていた一般的な近接ブレードと、一般的なIS用大口径拳銃で戦っていた。

『山田教諭、最近接距離（クロスレンジ）に持ち込むために呐喊するので、アシストお願いします』

距離をとって仕切り直していた丙龍の生徒からの合図があった。

真耶は了解の返事をし、武器を代える。

アサルトリピフルとショットガン、本当はスナイパーライフルの方が誤射が少なくなくて良かったのだが、ゼロ相手に狙い澄ました一撃は相性が悪いため、弾幕を張ることにした。

面制圧を意識した射撃でゼロの行動範囲を狭め、その隙に丙龍が突っ込む。

ゼロは近接ブレードを構え、徒手空拳で突撃してきた丙龍の進路上を風ぐように斬り付けた。

吸い込まれるようにして斬撃がヒットするが、丙龍はそれを多大なシールドエネルギーを消費ながら肩で受け、刃の動きが一瞬止まった隙に、反対の手で剣の腹に掌打を当ててブレードを弾き飛ばした。

「龍、功、掌ッ!!」

そして、彼女はゼロの懐にもぐりこみ、無防備なゼロの腹部に掌底を叩き込んだ。

「……ッ!?!」

ゼロは彼女の手のひらから放たれた衝撃波（・・・）をもろに受けて吹っ飛んだ。

この掌底の衝撃波こそが、丙龍の特殊装備にして真骨頂、そして第2・5世代（なりそこない）たるゆえんだった。

.....

本来なら、丙龍の特殊装備は、『龍砲』になるはずだった。

だが、悲しいかな当時の中国には空気で砲身を作成し、空間圧で遠距離を攻撃するこ  
とが出来なかったため、急遽『龍功』という零距离で空気の衝撃波を放つのを前提とし  
た腕部武装に路線変更し、これを『第三世代』と言い張ったのだ。

（その後、散々各国に馬鹿にされた中国政府が、大枚をはたいて技術革新をし、『龍砲』が  
完成、『甲龍（シエンロン）』に搭載されるのだが、これは、もう少し後の話だ。）

.....

彼女は、追撃の手を止めない。

「龍功、双掌!!」

瞬時加速（イグニツション・ブースト）で吹っ飛ばされているゼロとの距離を詰め、両手を使った掌底を浴びせる。

とつさに腕でガードしたが、衝撃波まで殺しきれぬわけはなく、ゼロはさらに吹き飛ばされ、アリーナの壁に激突した。

「山田教諭。後は頼みます」

「了解です。任せました!!」

牽制に徹していた真耶は一転、両手にIS用ショットガンを持ち、壁に激突していき身動きの取れなかったゼロに接近しショットガンの弾雨を浴びせる。

ショットガンの弾が切れると同時に、グレネードランチャーに持ち替え、トドメとばかりに発射した。

——爆発

閃光と衝撃波がゼロを巻き込んで拡散し、あたりに爆風と砂煙を撒き散らした。

「これだけ攻撃すれば……」

絶対防御が発動して、シールドエネルギーを使い切ってもおかしくない。だが、試合終了の合図は出ない。

「——さん。油断は禁物ですよ」

そのことに不信感を覚えた真耶が嗜め、二人は砂煙が晴れるのを待った。

——一陣の風が吹き、砂煙を散らす。

現れたのは、傷だらけの戦士。

試合開始時に600あったシールドエネルギーは、残り62。

玉鋼のアーマーはそのほとんどが破壊され、もはやISの体をなしていなかったが、ゼロの瞳には、依然として静かな闘志が湛えられ、その手には、光る剣が握られていた。

「……そんな!？」

それを目にした真耶は呆然と立ちすくんでしまった。

当初、彼女は拡張領域（バススロット）に盾でも隠していて、それで防いだのだと思っていたがそうではなかった。

ISを嫌というほど学んだ彼女は、この光景を受け入れられなかった。

……おそらく、直撃にもかかわらず絶対防御はただの一度も（……）発動し

ていない。

そもそも絶対防御というものは、ISのスキンバリアを貫通し、なおかつ命に関わるような攻撃の場合に限り、発動するものだ。

玉鋼のスキンバリアは、打鉄のものと同程度か、ガード型ではない分それよりももっと薄い。

にもかかわらず、シールドエネルギーを半分近く削り、外装をすべて破壊してしまうような爆発や銃弾をノーガードで受けても、絶対防御は発動しない。

つまり、ゼロの命には全く別状がないということなのだ。

——この人は、本当に人間なのか？

真耶の脳裏に浮かんだ疑問は、至極当然なものだった。

「玉鋼の拡張領域（バススロット）になにを隠してるのかと思つたら……ただのエネルギーブレードか」

「……何か、問題でもあるのか？」

「いや、ない。むしろ都合だ!!」

牽制の銃撃が来ないとわかつた丙龍が、未だ固まっている真耶を尻目に、アサルtpi

ストルを乱射しながら再突撃し、ゼロとの距離を詰めた。

玉鋼の外装が剥がれたことよって一回り小さくなったゼロは、銃撃の隙間を縫うように回避、かわせない銃弾はゼットセイバーで切り伏せていった。

そして、拳と剣が交錯する。

だが、先ほどよりも得物が軽くなったゼロの方が丙龍より早かった。

——神速の三段

実体剣のときとは違い、『受け止める』ということが出来ないエネルギー刃が一瞬で丙龍のシールドエネルギーを削った。

そして、チャージされていたゼロナックルで、なおも向かってくる丙龍を半ばクロスカウンター気味に殴り飛ばし、そこで丙龍のシールドエネルギーが尽きた。

「む、無念……………きゅ〜」

絶対防御が発動し、丙龍の搭乗者は目を回して気絶した。

丙龍が落とされ、真耶は我に返る。

そして、油断無く銃器を構え、遠距離攻撃の手段を失ったゼロを追い詰めていく、残りシールドエネルギーの少ないゼロは、回避せざるを得ない。

このまま押し切れると思った矢先、何を血迷ったのかゼロは急に真耶に向かって方向転換した。

「自棄（やけ）でも起こしたんですか?!」 そんなことをしても無駄ですよ！」

鉛弾のカーテンに自ら突っ込む形になったゼロだったが、彼はいたって冷静だった。

「……シャドウダツシュ」

ゼロの姿がぶれ、弾幕をすり抜け、真耶に接近した。

踏み込みながら一閃、真耶のライフルが真つ二つになる。

足を止めて横薙ぎの一閃、それを一度見ていた真耶は姿勢を低くして避け、次の袈裟懸けも体を反らしてかわし、三段目は飛び退って避けた。

一度見ていたとは言え、三段ともかわしきった真耶は一瞬気が緩んだ。

そこを、ゼロは見逃さない。

——武雷突

剣を水平に構えた、ダツシュしながらの強烈な突きが真耶に直撃した。かくして、ゼロはIS学園の採用試験に合格する。

翠緑の髪の鳥

ここは教室、俺こと、織斑一夏は今、針の筵にいた。

なぜなら売り言葉に買い言葉で、明らかに格上の、英国代表候補生とクラス代表の座をかけてI Sで戦うことになってしまったのである。

だが、この筵に挑むものももう一人現れた。

「私も、僭越ながら立候補させていただく」

まっすぐ手を挙げて言ったのは、緑の髪の少女。

鋭い目つきと切れ長の瞳は、どこか猛禽類を思わせる。

「ほう？ お前は……山田 春（ヤマダハル）か、いいだろう」

千冬姉が一瞬驚いたような顔をし、すぐに平静に戻る。

にわかにおかしくなったのは、山田真耶先生の方だった

「ちよつと、ハルちゃん、どうして急に!？」

髪の色以外は似ても似つかないが、この二人は姉妹なのだ。

「私も『日本の代表候補生』の身分をいただく身、ここで尻尾を巻いて逃げたとあつては、簪（もう一人）に申し訳が立たない……それに、姉上に私の『強さ』を知っておいて頂

きたい。もはや守られるばかりの私ではないのです」

「山田、学校では『山田先生』と呼べ」

「失礼いたしました。織斑教諭」

千冬姉が注意するも、彼女に悪びれる様子はなく、形ばかりの謝罪をした。

そのことを声から感じ取った千冬姉は、いい度胸だなといわんばかりに額に青筋を浮かべながら不敵に微笑んで山田（生徒）をにらみつけた。

彼女はそんな野獣の眼光に全く動じずに千冬姉と目をあわせる。

その光景は、さながら鷹と虎、いや熊か？

あわあわするのは山田先生ばかり、

そして千冬姉の出席簿が動き――

――スパアン!!

俺に振り下ろされた。

「何でだよ！ 千冬ね……」

――スパアン!!

「何度も言わせるな。人の振り見て我が振り直せ、馬鹿者」

「じゃあ一回目は!?!」

「ぼそつと『野獣の眼光』といったのが聞こえたからな」

ちくせう。声に出していたか。

「……まあいい。試合の日程は、追って連絡する。以上でHRは終了だ。」

俺の反省する気の毛頭ない態度を察したのか、こちらをぎろりとにらんで、千冬姉は教室を出て行った。

「ハルちゃん。お話があります」

ここは山田邸の真耶の書斎、ハルは今、針の筵にいた。

ハルは、姉に頭が上がらない。なぜなら、彼女にハルピユイアとしての記憶と人格が宿ったのが産まれた直後であり、乳児期の、自分のことがままならない期間の面倒を、すべて姉である真耶が見ていたからである。（母親は、ハルを産んだ直後に体調を崩し、入院を繰り返していた）

「なんでしよう？ 姉上」

「なんでしよう……じゃないよっ！ 代表候補生の時もそうだけど、なんで私に一言相談してくれないの!?!」

真耶は怒っていた。だが、悲しいことに全く迫力がなかった。

「その必要性を感じなかったので」

織斑千冬と眉一つ動かさずににらみ合いができるハルは、動じることなく淡々と理由を述べた。

「……昔はあんなに可愛かったのになあ」

「姉上！ 昔の話は無しだと言ったでしよう」

賢将と呼ばれた彼（彼女）にとって、人間の乳幼児期の記憶があるというのはとても恥ずかしいものであった。

「……それに、姉上に相談などしたら、姉上の手を煩わせるだけだと思えます」

家族とは助け合うものだというけれど、姉上の負担にだけはなりたくないのです。と彼女はそっぽを向き、小声で続けた。

「もう。素直じゃないんだから」

そういつて、ハルを抱きしめる真耶。

ハルは口ではやめてくださいというものの、目立った抵抗はせず、されるがままになつていた。

ハルは思う。

エックス様を守りたいと思つたのは、おそらくこの姉のような純粋でやさしい人間だつたのではないかと。

そして、こうも思う。

ネオアルカディアには、こんな人間は果たして一人でもいたのだろうか？ と――

――いや、いなかった（……）。

姉のように優しい人間ならば、罪のないレプリロイドを処分して、人間が何不自由ない生活を営むあそこの体制に耐えられないだろう。

現に、エックス様を模（創）造したあの女も、それに耐えられずに出て行ったのだから。

――あの女は姉ほど、優しい人間ではなかったが……

「ハルちゃん？ どうしたの？」

「……少し、考え事を」

「最近、よくそういう目をしてるよね」

――懐かしいものを見るような、

――まるで、渡り鳥が海の向こうの生まれ故郷を望んでいるような、遠い目。

真耶は、ハルがいつかなくなってしまうのではないかと、漠然とした不安に駆られ、一層ハルを強く抱きしめた。

そのとき、ハルは見つけてしまう。

姉の机の上にあつた「Z s a b e r R」と書かれたマニュアルを……

試合当日

一夏の専用機の準備が遅れる。との通達があり、先にセシリアとハルが戦うこととなつた。

「ハルちゃん、後付武装（イコライザ）はほんとにあれでいいの？ 私もマニュアルを斜め読みしただけだから、何が起こるかわからないんだよ？」

「心配御無用です。行つてきます。姉上」

ハルは、ピットからアリーナへと飛び立ち、先に待つていたセシリアを見る。

両者、向かい合つて改めての自己紹介をしたあと、セシリアはこんなことを言い出した。

「貴女、代表候補生としての名はあまり聞きませんけれど……」

「おや、英国貴族淑女（ブリティッシュ・ノーブル・レディ）というものは、出身国と評判でしか人を判断できないのか？」

ハルが挑発にも似た返答で突つかかった。

彼女自身は、日本なぞどうでもよかったが、姉の出身国を悪し様に言われたことを根に持っていたのだ。

「……貴女は少しは話がわかる方だと思っていたのですけれど、とんだ見込み違いでしたわね」

「貴殿のやり方を真似しただけなのだが……気に障ったのなら謝ろう？」

「その、慇懃無礼な態度！ これだから日本人は……」

「そうやって面と向かって罵声を浴びせてはばかりもしないイギリス式の方が、私はよほど無礼だと思いがな？」

「………もう、堪忍袋の緒が切れましたわ。覚悟なさい!!」

試合開始のブザーは、既に鳴っていた。

セシリアは、一瞬にして試作型レーザーライフル『スターライトmkⅢC』を呼び出し、構えて、撃った。

しかし、そこには既にハルの姿はない。

ハルのISは頭部の羽飾りのような特徴的なセンサーユニットと、翼のようなU字型の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）の武装を展開して上空に舞い上がっていた。

.....

2. 5世代IS『打鉄隼式』

ハルの乗っているISであり、通常の第三代IS『打鉄式』よりも、さらに高機動型にチューンナップされており、腰部の独立ウイングスカートも、肩部の増設スラストも取り外され、空気抵抗を減じ、推力は脚部と背部の大出力スラストのみによって賄われており。姿勢制御、方向転換はすべて搭乗者の操縦技術と体裁きにゆだねられるというピーキーな仕様であった。

.....

セシリアは上昇したハルに追いつくように上昇、BTライフルで背後から正確に狙い打つ。

移動先予測射撃を行っているはずなのに、ハルは空中でひらり、ひらりと光条をかわり、ダメージを最小限に抑えていた。

十分な高度が取れたところで、ハルの非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が起動、追いかけるセシリアめがけ光弾を発射した。

「この初速……さすがは電磁加速砲（レールカノン）といったところですね」  
空中でステップを踏むように射線上から外れたセシリアが、追撃しながら言う。

「光線兵器持ちに言われても皮肉にしか聞こえない」

ハルのこの装備は電磁加速砲『秋雨（あきさめ）』といい、U字の部分に電流を通して、それによって発生するローレンツ力によって飛翔体を投射する最新装備だった。

だが、光線兵器や荷電粒子兵器の台頭で、数年と経たないうちにIS武装としては若干時代遅れになっており、そこが2・5世代と呼ばれることになった原因であった。

ハルの二基のレールカノンが放つ曳光弾と、セシリアのレーザーライフルの青色光が幾重に交錯し、二人は芸術的とも言える空中戦を繰り広げた。

「埒が開きませんわね。この武装は使いたくなかったのですが……」

業を煮やしたセシリアが、腰部のビットを切り離す。

「……お行きなさい。ブルーティアーズ!!」

切り離された四基のビットが、多角的な三次元機動を描いてハルを取り囲み、一斉に光条を放った。

「奥の手があるのが、自分だけだと思わないでいただきたい」

ハルは、無傷だった。

その両手に持っているのは、二振りの緑に光る剣。

全方位から来るエネルギー兵器を、同じくエネルギー兵器のゼットセイバーレプリカで回転しながら切り払ったのだ。

「くっ……まだまだ!」

セシリアは再びビットを操縦、まとめて弾かれないように時間差でレーザーを発射する。

だが、それは悪手だった。

ハルは、ハルピユイアとしてネオアルカディアに仇なすものと戦って来た経験がある。

その彼(彼女)にとつて、一対多の戦闘こそ、本来の力を発揮できる戦場なのである。時間差で放たれる光条をかわし、切り伏せ、『秋雨』でビットにカウンタースナイプを叩き込んで瞬く間に二基を落とした。

「行くぞ! セシリア・オルコット!!」

二基を落としたことよつて四基のビットの方囲陣が崩れ、その隙を突いてセシリアに肉薄し、突進の勢いを付けてXの字に二刀で切り上げた。

セシリアはとつさにスターライトmkⅢCを盾にして防いだが、肝心のライフルは根元から深く断ち切られ、使い物にならなくなった。

ハルは、さらに接近、刀を返してXの字に振り下ろした。

「はあっ!!」

「真の奥の手は………取っておくものですわ!!」

ハルの光剣は、セシリアの持つ『スターライトmkⅢC』の弾倉部分から出る光刃によつて受け止められていた。

『Zシリーズ』のセイバーマガジンシステムの試験的運用。

これこそが、『スターライトmkⅢC』のC(custom)たるゆえんである。

そのため、本来の後付武装(イコライザ)であるインターセプターは搭載されていない。

セシリアはその空き容量で搭載された、別の後付武装(イコライザ)を空いているほうの手に展開する。

それは、セイバーマガジンシステム利用の試作型レーザーピストル『メテオライト』だった。

「乱れ撃ち、ですわ」

「っ!!」

ハルは至近距離で放たれたレーザーピストルの弾幕をもろに食らってしまった。

短銃身のため、出力は低かったが、至近だったため、たいした減衰もなかったため、一気に半分近くシールドエネルギーを削られ、ハルは罅迫り合いをやめて空に逃げる。

「逃がしませんわ!!」

セシリアは両手にレーザーピストルを展開、ハルの接近を警戒しながら、残った二基

のブルーティアーズと実弾式のブルーティアーズの二基で追い詰める。  
セシリアの勝利は、揺るがないように思えた。

「くっ、このままでは……」

レーザーを切り払い、ミサイルビットを『秋雨』で迎撃しながらも、じわじわと削れてゆくシールドエネルギーを見て悪態を付く。

このままじわじわと鬨り殺されては、自分や日本だけでなく、姉にも恥を掻かせてしまう。

姉はきつと、気にすることは無いと言ってくれるだろうが、そんなことは関係ない。

——絶対に、負けたくない。

そう強く思ったとき、ハルのISから一つのメッセージウインドウが出現した。

『武装（・・・）のパーソナライズが完了いたしました』

ハルがテキストを読み終えると同時に、二振りのゼットセイバーが変容を始める。

光刃は、ライトグリーンから、かつての愛刀と同じ赤紫（マゼンタ）に。

名前はゼットセイバーから『轟雷』という初期装備（プリセット）に。

持ち手も、かつての愛刀、ソニックセイバーとまったく変わらず、手に馴染んだ。一度たりとも振っていないのに、それ（・・・）が出来ると感じる。

ハルは、虚空で『轟雷』を振るった。

攻性のエネルギー刃が三日月型の弧を描いて発射され、ミサイルビット二基をまとめて切り裂く。

反対の刀も一閃。

エネルギービットの放ったレーザーを弾き飛ばしながら直進し、真つ二つに切り裂いて爆散した。

刃を返して今度は両手を使ってXの字のエネルギー刃をセシリアに向かって飛ばした。

ビットの操作に気を取られていた彼女は、メテオライトごと直撃を受ける。

これで、あのピストルも使えまい。

ハルは再度突撃する。

「……一気に押し込むぞ。隼式（ファルコン）!!」

そして、風を切る音の中に、

——仰せのままに、我が将。

という声を聞いたような気がした。

「勝者、山田春（ハル）」

射撃武器をすべて失ったセシリアは、慣れない近接レーザーブレード二刀流で奮戦したが、ハルに敵うはずもなく、敗れた。

「……」

「お笑いですわね。あんなに大口を叩いたくせに、結局貴女みたいな新参者に敗れるなんて……」

膝を付いたセシリアが自嘲するように吐き捨てた。

「……生憎、勝者が敗者にかける言葉を持ち合わせていない」

ハルはそういって、彼女に背を向ける。

「だが、一つだけ言っておく」

「……？」

「俺は、クラス代表を辞退する。織斑一夏との決勝戦、頑張れよ」

「なぜですか!? 試合は私の完敗のはず……」

「勘違いするな。これは別に同情やお情けじゃない。他にやることが出来ただけだ」

ハルは、観客席のある一点を凝視していた。いや、睨み付けていた。

彼女の視線の先には、セシリアもよく知っている人物がいた。

『どうして貴様がここにいる!! レヴィアタン!!!』

ハルはプライベートチャンネルで、レヴィイを怒鳴りつけた。

## ウーマン・リユナイト・ロボット

凰 鈴音（ファン リンイン）は苛立っていた。

久しぶりに帰ってきた日本だったが、彼女は『中国代表候補生』という肩書き上政府要人という括りになっており、安全面の不安からロクに外出も出来ないままにIS学園に直行し、なおかつ迷宮もかくやという校舎の複雑さに辟易していたからである。

が、ついさつき起こった出来事に比べれば……

……思いを寄せる幼馴染が、自分の知らない女二人と楽しそうに目の前を通り過ぎていったことに比べれば、もはや些細なことではしかなかった。

「（一夏のバカ一夏のバカ一夏のバカ……）」

彼女は自らの心情を表すかのようにわずかずかと廊下を歩く、目指すは総合事務受付、もう看板は見つかり道なりに進むだけだ。

——ドンッ!!

突然わき道から飛び出してきた人にぶつかり、鈴は尻餅をついた。

「ちよっと！……どこ見て歩いてんのよ!!」

「すまない。前を見ていなかった」

どんな鍛え方をしていたのか、結構な勢いでぶつかったにもかかわらず相手方はけりとしていた。

腰まで届く金長髪に、精悍で中性的な顔立ち、その眉間にはしわが寄り、この学園の地図と思しき紙切れとにらめっこしていた。

「前を見ていなかった、って……」

「事前に手に入れていた地図が間違っていて、最新のものを参照していた」

「そりゃ迷うわよ」

前を見ずに進んでいるのだから、ある意味当然の結果である。

「……右壁伝いに進んでいけば、少なくとも迷うことはなかったはずだが」

「どこのダンジョンよ……」

鈴は肩透かしを食らったような気分になり、先ほどの苛立ちはどこかへ消えてしまった。そして、この世間知らずの美人に、「日本の常識」というものを教えんと、続けて言った。

「あのねえ。この国では、道がわからなかったら人に聞くのが普通なのよ……それに、基本的にこういう建物には『総合受付』みたいに案内してくれるところがあるのよ」

「ふむ、あれがそうか」

総合事務受付、と書かれた一角に目を向けた美人。

鈴はうなずき、二人で目的地に向かって歩き出した。

程なくして、鈴たちは総合事務受付に到着した。

「じゃあ、あたしは窓口が違うからここで別れるわね」

「……ああ、世話になった」

金髪の美人は事務員に二、三言しゃべった後、どこかへ連れられて行ってしまった。

「生徒じゃないみたいだし、変なところで常識知らずだし、一体何者だったのよ……」  
鈴の疑問は、数週間後に解決することになる。

・ ・ ・ ・

クラスリーグマッチが謎の無人IS乱入で中止となり、一週間が経過した。

「今日は、皆さんに新しい先生を紹介します」

そんな時。山田先生が朝のSHRで唐突に言い出した。

五月下旬に赴任とは、珍しいこともあるもんだ。まあ、鈴の転入と似たような感じだが。

クラスの女子達がさまざまな質問を投げかける中、その人は入ってきた。

千冬姉よりも鋭い目つきに『凜』……というか『斬』とした雰囲気纏う男物のスーツを着た金髪黒目の女性だった。

皆が新しい先生に注目する中、なぜか俺はふと視線を戻し、千冬姉のほうを見た。

千冬姉は目を見開き、「なん……だと……」とでもふきだしが付きそうな顔をして驚いていた。

千冬姉が取り乱すなんて珍しいこともあるもんだ。と思い、張本人である目の前の新任教師に視線を戻した。

「ゼロ・シノノだ。主にISの戦闘を教える。よろしく頼む」

俺は衝撃に備えて、対ショック体勢（耳をふさぐ）を取った。

——キャア——！！！！

「イケメンよイケメン!! 男と見紛うばかりのイケメンだわ!!」

「男装の麗人って本当にいるのね!! 織斑先生とは似て非なるタイプよ!!」

「あえて言おう。貧乳であるとツ!!」

ちよつと待て、『イケメン』つて男に使われる形容詞じゃなかったか？　そもそも活用しないのに形容詞と言つていいのか？

確かに、目測でA A以下のバストに男物のスーツは大変似合っている。

千冬姉とはタイプが違うと言うのもうなずける。

千冬姉が『立てば軍人、座れば侍、歩く姿は装甲戦車』ならば、彼女は銃や剣、滑空砲といった『武器』そのもののような無機質で浮き世離れした印象を覚えた。

千冬姉は、ゼロ先生への黄色い歓声で我に帰ったのか、驚きを潜めて生徒達を怒鳴りつけて黙らせた。

その後、山田先生の説明で、ゼロ先生は教育実習も兼ねた補助講師として、いろいろなクラスの授業を聴講するということがわかった。

そして、S H Rは滞りなく進む……………ん？　シノノノ？

忘れもしない。自身の第一幼馴染と同じ苗字だったことに今さら気付いた。

斜め後ろの方面に座っているであろう箒を盗み見ようとしたら、千冬姉に叩かれた。解せぬ。

ついでに斜め後ろの山田も、なぜか山田先生から注意されていた。

ゼロが一年の他のクラスにも挨拶に行くために足早に立ち去り、S H Rを終えた私は職員室への道すがら山田先生に詰め寄った。

「どういうことですか。山田先生、新しい先生が来るなんて聞いていませんよ?」

「いやだなあ織斑先生。通達があつたじゃないですか今朝と二週間前に」

「……そうだった。だが私が聞いていたのはそんなことではない。」

何故『新しい先生』とやらがよりにもよってコイツ(……)なのか、ということだった。

そのことを尋ねると、彼女は『良くぞ聞いてくれました』と言わんばかりに大きな胸をさらに張って説明を始めた。

「……完結に言おう、全部あのバカ(東)のせいだった。」

山田先生の説明からは「東」とは一言も出なかつたが、私には手に取るようにわかつ

た。

東は、戦いに関してはプロフェッショナルと言っているいいゼロの戦闘力を、IS学園に売り込んだのだ。

ゼロは、未登録ISを持っているために各国に把握されることがない。

故に、いざと言うときのピンチヒッターとしてはうつつけなのであった。

「でも、採用自体が決まったのは、織斑先生が赴任する前のことなんですよ」

「……どういふことですか？」

「さあ？ 私が彼女の試験官をやった関係で、合格通知を送ったのが一年半ほど前、つて知ってるだけですからね」

話をしているうちに、千冬と真耶は教員室に到着した。

教員室前には、他クラスへの紹介を終えたゼロが手持ち無沙汰気味に立っていた。

「どうしたんだ。ゼロ」

「……チフユか、実は先ほど、リジチョウシツというところで指示を受けたんだが……」

理事長曰く、ゼロの住居と処遇に関して、先方（東）から指示があったらしく、「織斑千冬と寝食を共にし、教師研修に関しても彼女に一任させる!!」とのことであった。

「あのバカ、また面倒を増やしおって……」

「何か言ったか？」

「いや、こつちの話だ。ゼロが気にすることじゃない」

「お二人は、一体どういったお知り合いなんですか？」

「ここで、真耶が満を持してと千冬たちに聞いた。」

聞かずにはいられなかった。なぜなら真耶は、千冬が弟のことを話すとき以外でこんななうれしそうにしているのを見るのは初めてだからだ。

「……ドイツで少し、な」

「ああ……」

彼女達は詳しく語ろうとはしなかったが、真耶には二人がただの友人以上の関係であることが容易に察することが出来た。

「幸い、今日は私はこれで上がりだ。教員寮で、お前の引越しの準備をしよう」

「……恩に着る」

「山田先生、後は頼みます」

千冬がゼロを伴って、教員寮へ帰ってしまい、教員室前には真耶一人が残される。

真耶は教員室にの自分の机に戻り、『もう一つの考えごと』をしながら、次の授業の準備を着々と進めていた。

## 感謝

私と相部屋ということなので、私とゼロは教員寮の私の部屋にもどった。

正直、ゼロの私物に興味があった。人の所有物というのは、多かれ少なかれその人を表しているものだ。

ゼロに『平和を教える』などと大言壮語をのたまった手前、まずはゼロ本人のことに  
ついて知る必要があるだろう。

だが――

「……………ゼロ。一つ言っていていいか」

「なんだ。チフユ」

「なんで荷物が一つもない（……………）んだ」

期待した私が馬鹿みたいじゃないか。

そういえば、前回のドイツのときも身一つで他の私物は一切持っていなかったことを  
思えば、この結末は用意に導けたはずだ。

私はゼロとの再会に存外に浮かれてしまっていたことを恥じた。いつもの私ならこ  
んな単純なミスはしない。

「……すまない。気に障ったのなら謝る」

私為自己嫌悪に陥っていた様子を、怒っていると勘違いしたのかゼロが謝罪する。  
なんとも愚直な男だ。

『自分、不器用ですから』を地で行くゼロをみて、私は一つ閃いた。

「生活必需品……とりあえず服を今から買いに行くぞ」

「……この一着で足りているが？」

「部屋着にスーツでくつろぐ人間がどこに居る」

「……そういうものか」

「そういうものだ」

ゼロ曰く、元居た世界ではフォーマル、カジュアルといった概念は重要ではなく、どこまでも機能的な服があり、人は同じものを何着も持っているらしい……のだそうだ。

疑問形なのは、彼の周囲にあまり人間がいなかったのと、服のことなど気にしたこと  
もなかった。といった具合だった。

束から「正体バレとかマジでやめてよねめんどくさいから」と厳命されているゼロは  
人間に扮するため、千冬に言われるがままに買出しを了承した。

程なくして、近隣の大型ショッピングモールにたどり着いたゼロと私は、あらかたの呉服店のコーナーを一周すると、迷わず男性洋服の売り場に直行した。

「おい、女物はいいのか？」

「……余計な装飾は要らない」

「そうか」

ゼロ曰く、ISを操縦できる男は一人しかいない。よって、ゼロがいくら男物の服を着ようと、疑われることはないらしかった。

そして、ゼロが一番安くて地味な灰色のジャージのような服を手を取った。

「これでいいか？」

「問題はないが……理由は」

「……灰色は、『洗濯したときに色も出ないし、色物に染められにくい』と東が言っていた。一番機能的だ」

心なしか、満足げな表情のゼロを見て、私はがっくりとうなだれた。

そして、今頃どこかで見ているであろうあのバカに無性にアイアンクローをしてやりたくなった。

「……服は、機能的かどうかも重要だが、ほかにも考慮すべき要素がある。どれ、私が選んでやろう」

私は、すぐそこにあつた服を手に取り、ゼロに当ててみる。

服を当てがう、という行為に多少いぶかしげな表情をしたゼロを見て、だいぶ、コイツの無表情を読むのも慣れたな、と妙な感慨に少し浸った。

「ほらな。同じ型の服でも、やっぱりお前は赤が似合う」

「だが、赤は色が出……」

「ごちやごちやとうるさいな、お前は私の弟か？」

「……すまない」

私は、しゅん、としてしまったゼロに背を向け、

「私がすべて選んでやる。お前は黙って付いて来い」

そういつて、振り返らずに歩き出した。

「……………世話をかける」

……………まったく、本当に、世話の焼ける奴だ。

だが、ゼロに頼られるというのは、存外悪い気分ではなかった。

その後、調子に乗ってたくさん選んでしまった私は、ゼロが金を持っていないことに気付き、結局最初を選んで数着を（私のポケットマネーで）購入するにとどまり、学園に帰る頃には、すっかり夕暮れ時になってしまっていた。

「私はこれから食堂に行くが、ゼロはどうする?」

「……荷物を置いた後、校舎内を見て回ろうかと思う。地図だけではいささか不安だ」  
「わかった。また後でな」

ゼロは食事が必要としない、動力は一体なんなんだと疑問に思うが、そんな知的好奇心よりも腹の虫の声を優先してしまった。

「……チフユ!!」

「なんだ」

だが、食堂に向かおうとしたところをゼロに呼び止められた。

「今日、チフユにはいろいろと世話になった……今日だけじゃない、ドイツでも、オレが到らないばかりに迷惑をかけてしまった………本当にすまない」

「気にするな。お前の境遇を考えれば、世話も焼きたくなる……あと、こういうときは『すまない』ではなく『ありがとう』だ」

「……………ありがとう」

「……………それで良い」

私は振り返らずに歩き出す。

夕日のせいで熱くなってしまうた赤ら顔を隠すように……

——それ故に気付かなかった。

ちらほらと帰宅する生徒に混じって、群青色の髪の子がこちらを射抜くように凝視していたことに——

・  
・  
・

食事を終え、私は部屋に戻った。

部屋にゼロはいなかったが、共用机の上には置手紙が置いてあった。

部屋にはカギがかかっていたため、この手紙はおそらくゼロが私に宛てたものだと思う、何の気なしに開封した。

『伝説の紅いレプリロイド』ゼロへ

至急第三アリーナまで来られたし  
理想郷の妖将より

---

戦慄した。

ゼロの正体を知る何者かが、このI S学園に紛れ込んでいる。

そして、ゼロと会って何かをしようとしている。

——私は、手紙を握りつぶして部屋を飛び出した。

## 殺陣（たて）

千冬は第三アリーナに走っていた。

部屋にあったゼロ宛ての手紙の封は切られていなかったため、ゼロがこの手紙を見た可能性は極端に低い。

「……!?!」

アリーナまであと少し、といったところで彼女は強烈な殺気を感じ、反射的に横に跳ぶ。

先ほどまで千冬がいた位置に忍者刀のようなものを逆手に持った時代錯誤もはなはだしい忍装束でどくろのような仮面をつけた男がいた。

「貴様、何者だ!」

「忍びに、名乗る名は在らじ……故在って、ここは通せん」

低く、よく通る声が返ってくる。

「貴様もゼロの関係者か、理想郷の妖将とはいったい何者だ?」

「答える義理も無し……時に、おぬしは『世界最強』織斑千冬殿とお見受けするが、何故そのことを知っている?」

このやり取りで、この忍び装束の男は千冬とゼロが相部屋であることを知らず、かつ理想郷の妖将の関係者であることを理解した。だが、彼は『妖将』とは程遠い（『妖しい』というより『怪しい』といったほうがしっくり来る）外見であるため、おそらく妖将本人はこの先にいるのだろう、と千冬は考えた。

「言葉を返すが、答える義理はない。これ以上私の邪魔をするというのなら……押し通る!!」

彼女はここに来る途中にIS武器庫から失敬した打鉄用のブレードをしゃらりと抜き放ち、正眼に構える。

「ほう……その闘気、相手にとって不足無し。いざ、参る!!」

——そして、両者は激突す——

「(ハハ)は(ゴゴ)だ……」

ゼロは学園内で二度目の遭難をしていた。ふと、近くの案内板を見る。そこには前に進めば「第二アリーナ」「更衣室」、引き返せば「学生食堂」「教員寮」「学生寮」とあった。

一本道のため、行けるところまで行つて引き返そうと思い、第二アリーナの方角へ歩き出した。

第二アリーナの方角へ少し歩くと、「更衣室」への分かれ道であろう道で一人の女生徒とすれ違った。

直後、待機状態のクロワールからロックオンアラートが反応し、ゼロに危険を知らせた。

「ここであつたが百年目だ。ゼロ、少し付き合え。聞きたいことがある」

ゼロが振り返ると、先ほどすれ違ったはずの女生徒がレールカノンを部分展開しゼロの頭部に突きつけ、猛禽のような殺気のこもった眼差しを向けていた。

——ゼロはこの眼（・）をするモノを知っている。

かつて、幾度も相対し、体制（ネオアルカディア）とそれに抗うもの（レジスタンス）として何度も刃を交えた。『翠緑の斬撃』『賢将』の異名を持つ、ネオアルカディア四天王が一人——

「ハルピユイア……なのか？」

「そうだ。その驚きようを見るに、あいつとはまだ会っていないのだな。言いたいことは山ほどあるが……まず第二アリーナに行け、今の時間のあそこなら人に聞かれる心配はない」

そういつて、彼女はレールカノンでゼロの頭を小突いた。

電灯の照明も落とされ、雲に隠された月の薄明かりのみが支配する暗がりの中で、幾  
条もの剣戟による火花が、戦い続ける彼らを照らす。

千冬は苦戦していた。

忍び装束の男は、忍者刀で切りかかってきたと思えば、すぐに間合いを離し、暗がり  
から苦無や手裏剣といったこれまた時代錯誤もはなはだしい暗器を投擲して千冬に弾  
かせたかと思えば、背後から忍者刀で奇襲、と絶対に間合いを掴ませない立ち回りで、千  
冬のIS用ブレードとの絶望的なナリーチの差を帳消しにしていた。

千冬も、伊達に世界最強を名乗っているわけではなく、ほぼ視界ゼロの暗闇から放た  
れる暗器を、殺気を読んで弾く、という離れ業をやつてのけてはいるのだが、弾くとき  
に出る火花や音で、自分の居場所を敵に晒しているようなものだった。

一瞬の油断も許されないが、油断さえしなければ、単調な攻撃。

一撃必殺の暗殺を良しとする忍びが、こんな回りくどいことをするということは――

――舐められている。時間を稼がれている。

ということに他ならない。

せめてこの暗闇さえ何とかなれば、この人間版『砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）』も、どうにかできるといふのに。

そう考えていた千冬に、転機が訪れる。雲の切れ間から月光が降り注ぎ、辺りを煌煌と照らした。

闇にまぎれるように移動していた忍び装束の男と目が合う。

「……行くぞオ!!」

千冬はブレードを大上段に構え、そのまま空気抵抗に任せるように刀身を水平に寝かせ、恐るべき速度で踏み込んで忍び装束の男との間合いを詰めた。

そして唐竹割り一閃。

忍び装束の男はとっさに、持っていた忍者刀と苦無をクロスさせるようにガードしたが、ISブレードと千冬の怪力には敵わず、たちまち両方とも叩き折られ、どくろを横にした奇怪な仮面を叩き割ったところで止まった。というより千冬が止めた。

……

本来、千冬が修めた流派篠ノ之流は、手数重視の二刀流を主とする剣術だったが、千冬の剣（雪片）は一刀流、しかも莫大なエネルギー消費と引き換えのバリア無効化攻撃（零落白夜）とくれば、示現流やタイ捨流といった初撃に重きを置く剣術を学ばない道理

はなかった。

.....

「正に『一の太刀要らず』、美事也。人の身で良くぞここまで……惚れ申した!!」

聞こえた声は、背後から。

振り返ると、今しがた斬つたはずの忍が手で素顔を隠すようにして立っていて、視線を元に戻すと、先ほどまで忍がいた千冬のブレードの下には、ちよこんとひび割れたどくろの仮面を乗せた薪割り用の丸太が鎮座していた。

「——ツツツ?!?!」

——忍法「変わり身」

口で言うのは簡単だが、実際何がどうしてこうなったのか千冬には皆目見当もつかなかった。

「惚れた」発言もあいまって、狐につままれたような、という表現がもつとも適切な状況に彼女は一瞬呆け、すぐに立ち直ったように表面上取り繕った。

「構えずとも良い。もはや織斑殿の邪魔はせぬ。本来ならばあの憎き「エイユウ」と間見えるはずであったのだ。奴が来ない以上、レヴィアタンの計略は不発である。誰が行つても一緒にござる」

忍び装束の男は、今までの忍然とした寡黙さが嘘のように、かつかつかと老人のよう

に笑い、歩き去る。

「待て！ ゼロのことを知るお前は一体何者だ」

「……ネオアルカディア四天王が一人、隠将・ファントム。かつて彼奴と戦い、敗れた敗軍の将よ」

千冬に背を向けたままぼそりといい、そのまま闇に溶けるようにして消えていった。

どうやら、彼がレヴィアタンと呼んだ『妖将』はこの先にいて、果たし状ともラブレターともつかない簡素な手紙の真意は本人に聞かねばならないらしい。

千冬は、第三アリーナへ向かった。

## 英雄の役目

——何でここに来た。

第二アリーナに到着したゼロはハルピユイアの開口一番の疑問の真意が理解できなかった。

「そんなものは俺が知りたい。バイルを倒して、落下するラグナロクで死を覚悟したらここにいた。クロワールが助けてくれたらしい」

「待て、向こうで私が死んでから何があった?」

ハルピユイアはオメガの爆発からゼロを守り、他の四天王共々戦死している。ゆえに、マザーエルフの呪いが解けたこと、バイルが生きていてネオアルカディアで専横を振るっていたこと、バイルがこれまでネオアルカディアから逃げ出した人間のオアシスであった「エリア・ゼロ」を衛星砲「ラグナロク」で消滅させようとしていたことを知らなかった。

「……ならばなおさら、何故ここに来た!!」

それらのことをゼロから聞き出したハルピユイアは激昂のあまり、ISを展開しゼロに切りかかった。

「!?」

反射的にゼロはゼットセイバーを呼び出して罅迫り合いに持ち込む。

「何故、死んだのかと聞いている!! ネオアルカディアかエリアゼロ、どちらか見捨てれば、キサマが死ぬことはなかっただろう!」

何のことだか分からない。という顔をするゼロに、ハルピユイアはさらに語気を強めた。

「キサマは人を救うだけ救っておいて、導くことを放棄した! キサマ(ゼロ)というエイユウを失った人間たちがどうするのか考えなかったのか!？」

.....

ネオアルカディア発足時からずっと、その統治は機械(レプリロイド)の独裁に委ねられていた。

オリジナルエックス

コピーエックス

四天王

と、この次にバイルと来て、初めて人間に統治権が戻る。(彼がやったのは恐怖政治だったため、統治者としては最悪だったが)

そして、その統治者達は例外なく暗殺や事故死といった突発的な原因で死んだ。

.....

つまり、次に統治を任せられる人間がいないのだ。

現状維持だけならば、これまでの偉大な統治者が作ったマニユアルやメカニロイド、レプリロイドがいれば十分足りた。だが、衛星砲ラグナロクの直撃によって生産施設や居住区を含めたネオアルカディア全てが崩壊してしまった後では、その限りではない。

今までネオアルカディアでしか生活してこなかった人間が、いきなり草も生えない荒地に身一つで放り出されて自分の力だけで生活していくのは不可能に近い。なぜなら人はレプリロイドと違ってエネルギーだけで生きては行けないからだ。

かといってエリアゼロにも、避難民をすべて受け入れるだけの余裕はない。

ゆえに、彼らは廃墟となったネオアルカディア跡地に戻らざるを得なくなり、焼け残った食料や生き残った施設を上手にやりくりして生活しなければならぬ。

そこに指導者がいなければ、無政府状態となり、暴力の横行や略奪といった、万人の万人に対する闘争状態となってしまう。

それらが起きないように指揮する立場に、ゼロがなるべきであった。とハルピユイアは考えていた。

ゼロの恐ろしい強さと、「エックス様と並ぶ伝説の英雄」としての知名度は人々の象徴

として相応しかった。シエルでは、いささか荷が勝ちすぎている。

「キサマは……死ぬべきじゃなかった。エックス様との約束を守り、生き残って世界を見守るべきだったのだ!!」

——ゼロ……キミに……この世界を任せたい……

脳裏にフラッシュバックした光景に、ゼロは眉をしかめる。

ゼロに世界を託し消えたエックスはまだ生きていたが、だからといって約束が無くなる訳ではない。

「……オレは……ッ!!」

「!？」

ゼロは鏝迫り合いの状態から、力任せにハルピユアの剣を弾き、チャージしていたゼロナツクルでハルピユアの頬を殴り飛ばした。

「……オレは、自分のことをエイユウなどと思ったこともないし、自分の信じるものために戦った結果を、お前にとやかく言われる筋合いもない」

「……」

ゼロの燠火のような静かな怒りに、ハルピユアは殴られた頬を押さえて呆然としていた。

「……エックスは人間の可能性を信じていた。それに比べてお前はどうか？ オレ（レ

プリロイド）に見張られなければ人間は生存すら出来ないだと？ 人間不信もいいところだなハルピユイア」

——人間は、オレたち（レプリロイド）に守られるだけの存在ではない。オレたち（レプリロイド）と共に歩むべき存在だ。

「……今、あの世界はやつと昔のしがらみから解放されて、新しくやり直すところだ。オレやお前のような存在は、いない方がいい」

さきほどから一転、ゼロは諭すように言った。

ダークエルフにオメガ、バイル……どれもこれも、ヨウセイ戦争のせいで生み出された歪みだった。

それらの歪みが正され、世界が新しく生まれ変わろうというときに、ハルピユイアのような人間至上の旧態依然としたレプリロイドや、ゼロのような強大な力を持った存在は、新たな争いの引き金になりかねない。

「人間とレプリロイドが……手を取り合って生きる世界……か」  
「……シエル達なら、うまくやるだろう」

ハルピユイアとゼロは部分展開したI Sを待機状態にさせ、双方剣を納めた。

「なら……ゼロ、お前は元の世界には帰らないのか？」

ハルピユイアの疑問に、ゼロは急に表情を曇らせた。

「……………よく、分からなくなつた。シエルとの約束もあるが、向こうの世界で必要とされていなければ、俺には帰る意味はない……………」

そういつたゼロを見て、ハルピユイアはあることに気付く。

ゼロは、自分がどうしたいのか、を全く考えていない。

『シエルとの約束』や『必要とされている』という外的要因ばかりで、自分の気持ちというものが考慮されていなかった。

——お前自身（・・）はどうしたいんだ？

と重ねて問おうとしたハルピユイアより先に、ゼロが言葉が続けた。

「……………だが、この世界で『ヘイワ』を知ることが出来れば、帰る意味もおのずと見つかるのではないか……………」と、思っている。何故かは、分からないが……………」

「フフ……………んっ！ そんな不確かな予感をアテにするなんて、でっ、伝説の英雄も落ちたものだなっ！」

返ってきた答えのあまりの人間臭さに、ハルピユイアは驚きながらも一瞬可笑しくなつてしまい、笑いかけたのを無理矢理咳払いと罵倒でごまかした。が、破れかぶれだった。

かつての宿敵だった男に、動揺しすぎてツンデレ発言にしか聞こえないという醜態を

見られてしまったことで、かあつと顔を真っ赤にするハルピユイアだったが、そんなことは全く意に介さずにゼロは話題を変えた。

「……そういえば、お前の体は人間になつてているな？」

そしてそれは、こんなトンチンカン野郎に赤面した自分が愚かしい、とハルピユイアは一気に冷静さを取り戻すきっかけになった。

「ああ、理由は分からないが……そういうお前は——」

——ガチャン

ここで、今までアリーナを申し訳程度に照らしていた照明が落ち、本格的に消灯時間が過ぎたことを二人に知らせる。

「ッ!? そろそろ察に戻らなければ……ルームメイトが心配する」

少し待ち、暗闇に目を慣れさせたハルピユイアが焦って出口に走つていこうとして……ずっこけた。

「……」

人間の目で、この暗さで走ればそうなるのは当たり前だった。

……ここでゼロが「賢将ハルピユイアも、落ちたものだな」とでも言おうものなら、逆上したハルピユイアと朝まで死闘を繰り返すことになるが、ゼロはそんな地雷は踏まない。

「……こうすれば、転ばずに済むだろう」

と行って、助け起こした後、こともあろうに俵を持つように、ハルピユイアを肩に担いで歩き出した。

「おいっ！ 降ろせっ！」

とわめき散らすハルピユイアを無視して、ダツシユで学生寮まで送り届けた。

ちなみに、この「賢将ハルピユイアも、落ちたものだな」という台詞であるが、これは後に、偶然この光景を見ていたファントムの口から飛び出したものであった。

## 狂気と恋心

フアントムを退け、やっとこさ第三アリーナに到着した千冬は、夜間照明の落とされたアリーナの中央にIS姿で立っている女生徒を見つけた。

「こんばんわ……………織斑先生」

女生徒は千冬を一瞥し、目的の人物ではないことを確認、明らかに落胆したように千冬の名を呼んだ。

「お前なのか……………オルコット二年生」

——レヴィア・オルコット

札付きの悪、というほどではないにしろ、授業中の素行不良が目立つ生徒であった。そのくせ成績だけは一流で、暇さえあればアリーナにこもってIS操縦の自主練をしている。常に模擬戦の相手を探しており、クラス学年問わずいろいろな生徒に対して模擬戦を申し込み、コテンパンに伸ばした後、一言的確なアドバイスを与える。というとても「よく分からない」生徒なのであった。

「その通り、愚妹がお世話になっております」

形ばかりの社交辞令、その後、彼女は最初に千冬を見てからの落胆を隠す気もなく深

くため息をついた。

「……手紙を見たぞ」

そういつて千冬は懐から先ほどの手紙をとりだしてレヴィアに見せた。

「ハア……他人宛の手紙を先に見るなんて、あまり褒められたものではありませんよ？」

彼女は深いため息をもう一つつき、落胆の色をさらに強めた。

「宛名ぐらい書いておけ、馬鹿者。それに、部屋には鍵がかかってたはずだが？」

アナログとデジタルの二重施錠だったはずだ。そう簡単に破れるものではないし、第一ピッキングなどしたら鍵が壊れて二度と掛からなくなってしまう。

「乙女には、秘密は付き物ですよ。織斑先生……それに、私はしつかり彼（・）の部屋に届けたはずなのに、なんで織斑先生が先にそれを読んでなおかつ持って来ちゃうんです？」

世界最高峰といわれるIS学園のセキュリティを、一部とはいえ突破しておいて、『乙女の秘密』で済ませようという魂胆に若干呆れると共に、千冬は、彼女がある事実を知らないことに気付いた。

「それは私とゼロは相部屋だからだ」

彼女の知らなかった事実を伝えながら、千冬は考えをめぐらせる。

レヴィアは千冬とゼロが相部屋であるという事実を知らなかった。ということとはつ

まり、あそこがゼロの部屋であることしか知りえなかったということでもあった。

そもそも、ゼロの部屋自体、まだ生徒達には公表されておらず、本人達を尾行でもしない限り……

「そうかお前、夕方に私とゼロが別れたときにゼロを尾行（つけ）たな？」

「ご名答、ま、つけたのは私じゃなくてファントムだけだ」

私だったらあの人にばれちゃうし、といってレヴィアは勝気な笑みを浮かべる。

「ファントム……さっきのエセ忍者か」

「そう、それで織斑せんせはどこまで知ってるのかしら？」

さっき聞いたばかりの名前に、千冬は複雑な表情を浮かべ、それを見たレヴィアは最初の敬語から、大分砕けた話し方で問うた。

「そういうお前はどうかんだ。『理想郷の妖将』と名乗っておいて、ただのゼロのファン、という訳ではないだろう」

おそらくそれは、ゼロの世界のものが見れば一発で分かる『通り名』のようなものであると千冬は考えていた。それを知っているということは、ゼロの世界の人間である可能性が高い。

「私？ フッフ、知ってるわ……全部、全部」

——死ぬほどタイクツだけど、それだけでは死ぬことを許されない世界

「あの世界のことも」

——その中で見つけた。唯一の愉しみ

「あの人のことも」

——けれどそれ（彼）は、既に自分のものではなくて

「あの忌々しい女科学者のことも」

——交わされる刃のみが、彼との逢瀬だった。

彼女は、猟奇的に笑った。

.....

.....手に入らぬのなら、壊してしまえ。そうすれば、永久に誰のものにも出来ない。

.....そんなことをしてしまえば、二度と彼とは戦えなくなる。彼との戦い（逢瀬）は、

嬉しい。

二律背反した思考は、彼の圧倒的な強さによつて絶妙なバランスを保ち、次第に彼女を狂わせていった。

.....

「たとえ世界が滅びても、貴方さえ倒すことが出来れば、私、幸せなの……」

.....

「……私は、どんどん愚かな女になっていく……貴方と戦うこと以外、考えられなくなつ

ていく、でも……………幸せよ」

義務よりも世界よりも、何よりも彼を壊す（戦う）ことに傾倒してしまうほどに……

彼女の狂人めいた笑みに千冬は気圧された。

当初、千冬は彼女が件（くだん）の「シエル」なのではないかと思っていた。

だが、そんな思考は彼女の笑みを見たときに吹っ飛んでしまった。

千冬は思わず問う。

「お前は……………一体「何」だ？」

「ネオアルカディア四天王、蒼海の海神・妖将レヴィアタン。彼の敵だった女よ」

「!!」

ゼロの敵、と聞きとつさに抜刀しようとしたが、刀がなぜか鞘から抜けなかった。

手元を見ると、鯉口の部分が氷塊によって接着されていた。

「残念、細工をさせてもらったわ。でもISに生身で挑むって……………貴女ほんとに人間なの？」

レヴィアは、ISを纏った存在に平然と刀を抜こうとしていた千冬の豪胆さに驚いた。

刀一本で勝つつもりでいたらしい、この世界最強の兵器に。

「でも安心して、今すぐに彼をどうこうするわけではないの……私はただ、本気の彼に勝ちたいだけ。今のところは……ね？」

もう用はないとばかりにレヴィアはISを解除してISスーツ姿になり、寒っ！  
やっぱり人間って不便ね。といって立ち去ろうとした。

「おい待て！ お前……レプリロイドなのか？」

聞き捨てならないことを聞いた、といった様子の千冬が呼び止める。

「……質問の多い女は嫌われるわよ織斑先生。それに、私はれつきとした人間。昔と違ってね」

うんざりしたように肩をすくめながら放った彼女の言葉はつまり、昔はレプリロイドであった。と肯定したようなものだった。

「どうしてかは聞かないでよね。そんなの私にだって分からないもの」  
「……」

レヴィアに次の言葉を見透かされるようにして出鼻をくじかれ、千冬は押し黙った。  
「それに……それを聞くことは、彼はレプリロイドのままなのね……面白くなってきたじゃない」

彼女の声に喜色が満ちた。

「あと、言い忘れてたけど」

——ゼロの味方を気取るのも結構、でも……今度私の邪魔をするなら、命を捨てる覚悟をしてからになさい。

友人同士のような気軽な調子から一転、発されたのは氷点下の恫喝だった。

「その刀みたいになりたくなかったら、二度と邪魔をしないことね」

そういわれて、千冬は腰に佩いた刀を見る。

鯉口の部分にしかなかった氷が、刀全体に広がって奇怪なオブジェと化していた。

——単一能力（ワンオフアビリティ）のみの、部分展開。

世界が度肝を抜くような操縦を、彼女はやってのけていた。

「……私には、ゼロがお前と戦うとは思えんがな」

「なんですって？」

捨て台詞のように言った千冬に、今度はレヴィアが食いついた。

「あいつの戦う目的から言えば、『敵』でなくなつたお前と本気で戦う理由など存在しないし、仮にそうなつたとして、お前はその後何がしたいんだ？」

戦う理由がないなら、作ればいい。

だが、千冬の投げかけた「その後」という問いに、レヴィアは咄嗟に答えることが出来なかった。

「……」

負けたのなら、また挑めばいい。

だがもし、仮に、百歩譲って、万が一億が一……ゼロに勝てたとして、その後はどうするのか、レヴィアは今の今まで考えたこともなかった。

以前の世界なら、勝つ＝壊すに直結したが、この世界では違う。

無論、壊れるまで戦うことも出来るが、I Sの絶対防御の関係で、壊すのはとても骨が折れる。

それに、『壊す』理由でもあった。ゼロがご執心のあの女科学者はこの世界にはいない。

——つまり、ゼロの中の、あの女が占めていた部分に、自分が入り込み蚕食することも不可能ではない——

「——っ！」

ボンツ、と音が出そうなほどに、レヴィアの顔が急速に紅潮した。

耳まで赤くなった彼女は千冬に背を向け、ぶつぶつと小声で呟き始める。

「おい、どうし……！」

「わ、私は！　ゼロに勝って、ゼロを私のものにする！　貴女やあの女なんかには、ゼロは渡さないわ!!」

声をかけようとした千冬を遮って、レヴィアは早口で言い、興奮冷めやらぬ様子でア

リーナの出口に猛スピードでかけていった。

その様子は、もはや恋する乙女のそれであった。

レヴィアの豹変振りに毒気を抜かれた千冬は、追いかけることを忘れて立ち尽くし、彼女が見えなくなつてしばらくしてから我に帰つて、とぼとぼと帰路に着いた。

## 再会と初対面

チフユが部屋に戻ると、既にゼロが帰ってきていた。

「チフユ、戻ったか。ただの食事にしてはずいぶんと遅かったな」

「少し、生徒から相談を受けていた」

「消灯時間をとうに過ぎてからの帰宅に、ゼロは何かあったのか？」と心配そうに問う。

千冬は嘘は言っていない、だが真実とは程遠い説明を行う。

「言えるわけがない。お前のいた世界の敵と会った、などとは。」

そんなことを言えば、ゼロがすぐさま斬りに行ってしまおうのではないかと一抹の不安を覚えたからだ。

レヴィアにはそんなことはないと言い、千冬もそう信じているのだが、彼が敵と相対したときの抜き身の刃のような雰囲気からして、「敵」と認めたものにゼロは微塵も容赦をしないのであるということは想像に難くない。

やっぱり言わないほうがいいな、と千冬が脳内で結論付けたとき、ゼロも同じようなことを考えていた。

——チフユには関係ないから、ハルピユイアのことを言つて無理に巻き込む必要もないだろう。と

そうして思考がすれ違った二人は、言葉少なに明日の準備をし、千冬のみが就寝した。

・  
・  
・  
夢を見た。

ゼロと一夏が戦っている夢だ。

ゼロは普段の無表情からは創造も出来ないような好戦的で下卑た笑みを浮かべ、対する我が弟は満身創痍で、傷の痛みだけではない悲痛な面持ちで雪片を構えていた。

私は叫んだ。止めようと、走つて二人に近付こうとした。声の限りに叫んだ。

だが、二人は臨死の剣舞を止めはしない。

ゼロの放つた二発の光弾と一振りの光刃を切り払い、一夏は体制を崩した。

そこにゼロが、普段のダッシュとは異なる移動法で一夏に肉薄する。

そして目にも留まらぬ六連撃。白式が耐え切れずに空中で解除され、地に墮ちる最愛の弟を見て私は声にならない叫びを上げた。

「チフユっ！ 大丈夫か!?」

目を開けた瞬間に視界一杯に飛び込んできた夢の中の殺戮者に悲鳴を上げそうになる。

「っ!?……ゼロか、起こしてくれたのか」

だが、ゼロがいつもの無表情なのを見て、大いに安心した。壁にかかっている時計を見ると、目覚ましのなる時間より少し前だった。

「……ずいぶんと、うなされている様だったからな、迷惑だったか?」

「いや、助かった。ありがとう」

本当に助かったので素直にそうだったが、よほど私の顔色が悪かったのか、ゼロの表情は晴れなかった。

「……悪夢は……人に話すと楽になることがあるという……オレは人間ではないが、話を聞くことは出来る」

そしてこんなことを言い出した。

無論、先ほどの悪夢を話すわけには行かない。

だが、無理に断つても、彼の心配そうな無表情がさらに険しくなるだけだと直感した。「何故そんなことを知っているんだ? レプリロイドは睡眠が必要ではないのだろうか」

故に、私は話題を変えてはぐらかすことに決めた。

「……昔、シエルに聞いた。怖い夢を見たから話を聞いて欲しい、と」

後者の答えは、彼が戦闘用で、しかも気の遠くなるほどの旧式だから睡眠は必要ないのであり、人間とともに歩むために製作されたレプリロイドは、睡眠もとるし夢も見られない。

「一体どんな夢だったんだ？」

それからゼロは、自分がシエルから聞いたという悪夢の話をしてくれた。

それは、ゼロが任務に出たきり帰ってこない、という夢だった。

すぐさま搜索隊が結成されたが、芳しい成果は上げられなかった。

そして時が過ぎ、文字通り涙が枯れ果てた夢の中の彼女が、二度とやらないと誓ったはずの最大の禁忌（……）を侵そうとしたところで、シエルの夢は終わった。

最大の禁忌とは何か？ しかもシエルは一度それを破っているとはどういうことか？

疑問は尽きないが、ここで時間切れ。

「そろそろ出る支度を始めなければいけない時間だ」

ゼロが、つまらない話を聞かせてしまったな、と付け加え中途半端に話を切り上げた。続きが気になったが、朝の鍛錬と朝食を欠かさすわけには行かない。

——私は自分が見た悪夢のことなどすっかり忘れて、いたって普通の朝を過ごした。……と、思っていたのだが。

「しまった。スーツをクリーニングに出したんだ……着るものがない」  
本来なら、昨日家に夏用のものを取りに帰らなくてはならなかったのだ。

「他の服ではダメなのか？」

「駄目だ」

「……オレのを使うか？ オレにはジャージがあるから問題はないぞ？」  
しばしの思案の末、ゼロがそんなトンチンカンなことを言い出した。

「男物のスーツなんて誰が着るか。馬鹿者」

私にその手の趣味の人間を喜ばせる気はない。

仮に着たとしても、前日そのスーツを着ていたゼロがジャージで登校でもしたなら、本当にとんでもない噂が立ちかねない。

「む……ならば、取りに行くか？」

幸い、行つて帰つて来られるだけの時間はある。

「そうだな。ゼロは先に学校に行つてくれ。何かあったら山田先生に聞けば大丈夫だろう」

どうせ初日だ。朝っぱらから私が教えるような専門的な事柄はないだろう。それに、一緒に登校（出勤）というのも、これまた変な噂を立てられかねない。

……今日はアイツが転入してくるのだ。アイツの元教官として、情けないところを見るわけには行かない。

私は私服に着替え、人っ子一人いない早朝の学園を、鍛錬代わりの駆け足で最寄り駅へと向かった。

……

……

……

朝のHR、先に来ていた真耶とゼロは、生徒たちと談笑していた……といっても、真耶は名前のことで生徒たちからかわれ、ゼロは新任の教師によくありがちな質問攻めにあっていた。

「教師になる前は何をしていたんですか？」

「……仕事で世界各地を転々としていた」

「仕事は何を？」

「……IS装備のテスターだ」

「彼氏はいますか？もしくは彼女は？」

「……いない。どちらも募集中だ」

千冬がいたら絶対につっこみが入っていただろう発言が混じっていたが、ゼロは束とエックスが笑い転げながら作ったマニュアル通りに受け答えしているだけであり、そこに本人の意思はない。

のちに、これを知った千冬の多大なる苦勞によって、ゼロのこの発言は日本語に慣れていかなかったがための誤答であると認知され、事なきを得るのだが、この瞬間は、大いに教室を沸かせた。

上がる黄色い歓声の隅で、山田春——つまりハルピユイアが嘆息していたことと、篠ノ之箒が、自分の姉かもしれない人物の第一印象が木端微塵になったことは、いまさら語るまでもないだろう。

——ガラリ

そこに教室のドアがスライドし、HR開始ギリギリに千冬が到着した。スーツをピシッと着こなしているところを見ると、特に問題もなく行って帰って来れたようだ。

「諸君、おはよう」

一瞬にして静まり返る教室、無駄口でも叩こうものならその前に出席簿で叩くぞと言わんばかりの雰囲気、千冬が、本来のホームルームの役割である連絡事項を伝達してゆ

く。

曰く、今日から本格的なI Sでの実戦訓練が開始されるとのことであった。

「では山田先生、ホームルームを」

そして、授業に関する事務的な連絡を終えた千冬が、真耶とバトンタッチして教壇の後ろに行く。ゼロはといえば教室の後ろの方に立って連絡事項を聞いていた。

「はいっ！……ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！　しかも二名です！」  
あの『織斑先生』がいるにもかかわらず教室がにわか騒がしくなる。普段なら即座に千冬が注意するのだが、今回ばかりは何を言っても聞かんだらう、と彼女は無視を決め込む。

「失礼します」

「……………」

教室の扉を開けて入ってきた二人の転校生にクラス中の視線が襲い掛かった。

そして、驚愕する。

シャルルと名乗った方の金髪の転校生が、男性であったことに。

だがゼロは、もう一人の方の転校生に釘付けになっていた。

まるで人工物のような白銀髪に、片目を覆う眼帯、他者へ向ける不機嫌そうな表情。

「…………ラウラ、ボーデヴィツヒ」

見知った顔がいた。

ラウラの方は気付いておらず、千冬と二言三言交わしたのち、簡素な自己紹介を終えた。

そして、最前列に座る男性操縦者織斑一夏へ向けてつかつかと歩み寄り、頬を張ろうとして手を挙げた瞬間――

「!!」

「……」

――目があった。

今度はラウラが驚愕に目を見開き、ゼロに釘付けとなった。

そして、驚愕は次第に嫌悪に変わり、振り上げた平手は降ろされて握り拳を作り、一夏のことなど眼中になくなったかのように、教室の後ろにいるゼロのところまでずかずかと歩む。

ラウラがゼロの目の前に立つと、身長差から自然と見上げる形になる。だがラウラは一步も引かずにゼロを睨み付けた。

「なんでお前がここにいる」

「それはこちらのセリフだ。お前の所属はドイツ軍だろう。ボーデヴィツヒ少佐？」

軍人を入学させたとあっては、最悪、国家の介入行為とみなされてしまう。IS学園

はいかなる国家の介入をも許さないと定められている。

「高度な政治的取引がなされた……お前が気にする問題ではない」

「口を慎め、ラウラ。ここではゼロも先生だぞ」

周囲の生徒に聞こえないように小声で話していた会話を、持ち前の地獄耳で聞いていた千冬がラウラを注意した。

「了解しました」

ラウラはゼロの時とは打って変わって素直に返事をし、教室の隅に新しく用意された自らの席に座った。

「全く……では、一時限目からの実習に遅れないように、以上、号令ー」

そして、ラウラのゼロに対する態度に千冬が嘆息したところで、朝のHRの終了を告げる鐘が鳴った。

真耶、千冬、ゼロの順で足早に教室を後にする。生徒に「遅刻するな」とのたまった手前、自分たちが遅れる訳にはいかないからだ。

「ちよつと、待つてください。篠ノ之先生！」

だが、教室を出かかったゼロを呼び止める者がいた。

気の強そうなまなざしと、高い位置でくくった長髪の、武家の娘然とした生徒。

「……お前は、シノノノ生徒か」

シノノノ タバネの実妹。事情の説明が必要不可欠な人物の一人だった。

「貴方のような親戚を、私は両親からも聞いたことがありません。貴方は……誰なので  
すか？」

「……濟まないが今は、時間が惜しい。一言でいうなら……タバネの関係者だ」

実姉の名を聞いた途端、彼女の表情が曇る。

「また……あの人は勝手なことを……」

「……後で詳しく説明する」

ゼロはうつむいて何事かつぶやく彼女に謝罪し、先に行く真耶と千冬を追った。

……

## だが男だ

千冬姉に頼まれたこともあり、HRが終わった直後にシャルルの席に向かった。

「君が織斑くん？ 初めまして、僕は……」

「いいからとにかく移動が先だ」

俺はシャルルの手を掴み、一目散に駆け出す。

教室では女子が着替えるのだ。そこに男がいれば、間違いなく犯罪である。

シャルルにそんなことやあんなことを説明しつつ、男子ズ（俺たち）を捕獲せんとする女子の群れから逃げるようにして、本日俺たちが使用する第二アリーナ更衣室までやってきた。

やばい、時間がない。

会話もそこに着替えに専念する。シャルルが何やら顔を赤くしていたが、体調でも悪いのだろうか？ 聞いても「大丈夫」としか言わなかったが、まあ、たつた二人の男子だもんな！ いざとなれば、俺が負ぶって保健室まで連れてってやればいいのだ。

そんなこんなで着替えを終え、授業が行われるグラウンドへ向かう。その道中に、いろいろなことを話した。

曰く、彼は大手のIS開発企業の社長子息なんだそうだ。あまり実家とはうまくいっていないのか、話す時の表情は暗かったが、彼は姉の話になると打って変わって饒舌になった。

フアーニール・デュノア。

デュノア社の正規テストパイロット兼、IS装備開発の技術者でもあり、『烈火の腕（インフェルノ・アーム）』及びその運用法（ホールドアーツ）の開発者。

彼女は飛び級によつて数年早く義務教育課程修了させ、同時に大学に飛び入学、飛び級でさつさと首席卒業、という異色の経歴を持つ。（『この人物がすごい！ 生けるIS偉人100選』より抜粋）

わかりやすく言えば、シャルルと同年にも拘らず、大卒の社会人なのである。

これだけ聞けば、ただ頭がいいことを見せびらかしたいだけの高ビーお嬢様っぽいのが、シャルルの話、といつてももはや武勇伝に近いそれを聞く限り、彼女は豪放磊落で面倒見が良く、大企業の社長令嬢とは思えないほどに砕けた人だという印象を覚えた。

乗機は、彼女自らカスタマイズした専用機『ラファールリヴァイブ・カスタムI』、ISのゲームではいわゆる「投げキャラ」（ISのゲームは2D格闘ではなく3Dハイスピードアクションなので、立ち回りがベリーハードでしばしばネタキャラの扱いを受ける）なのだが、欧州連合（EU）諸国屈指の実力の持ち主で、「二つ名」まで付いている

そうな。

「でも、モンド・グロツソには出場履歴はないんだろ？」

「それがね、「オレは企業の所属だから、国家代表がどうこうって大会にや出られねーんだ」なんて変な意地張って予選にも参加しないんだよ」

オリンピックにプロのプレイヤーは参加できないのと同じだろうか？

だが、I Sの開発は、国と企業ががちりとスクラムを組んで、なおかつ癒着して行われている分野であるため、企業のテストパイロットが国家代表として出場することも少なくはない。

現に、シャルルがそうだ。

それを指摘したら、シャルルは少しばつが悪そうにした。

「鋭いね。でも僕の場合、書類上いったんテストパイロットを辞めてから国家代表候補に選出されたことになってるから、厳密には違反じゃないんだよ」

「汚いな大人、さすが大人汚い」

「それについては激しく同意するよ……」

シャルルがなんか煤けてしまった！　いかん、これは地雷だったようだ……猛省。

もはやズンドコ（死語）まで落ちた彼のテンションを回復するべく奮闘している間に、

本日の授業を行うアリーナについた。

始業時間ぎりぎりだったようで、いろいろと鈴とセシリアに小言を言われる。

——気を使ってくれたんだね。ありがとう。

といって別れ際に微笑んだシャルルが天使のように見えてくる……………止める俺！  
俺はホモじゃないノンケなんだっ！！

…………シャルルは男シャルルは男…………よし、大丈夫だ。

HRのあと、千冬、真耶、ゼロの教師陣は急いでアリーナへ向かった。

「では、ゼロは私と先にアリーナに行って、今日つかうISを出しておきます。山田先生もくれぐれも遅れないようお願いします」

「はー」

今日の授業でISを纏わない千冬や、ISスーツを着る必要のないゼロと違い、真耶は操縦実演のためにISスーツに着替える必要があり、途中で別れた。

アリーナへ行き、駐機状態にされていたISを専用のワゴンで運び出す。

ゼロも千冬も、程度は違えど常人と比べて怪力の持ち主なので、ISを纏わずにス

ムーズに作業を行うことができるようだ。

「……」

「……」

ゼロがワゴンに乗せ、千冬がアリーナまで押して行く……両者とも、あまり無駄口を叩かない性分である、ということも作業効率に拍車をかけたのだった。

「遅くなりましたー！……って、もう作業終わってますね」

故に、真耶がISを装着してやってくるころには、運び出しはすべて終わっていた。

「山田先生は、時間までウォーミングアップをしておいて下さい」

ISを運ぶという作業は結構な運動量にも拘らず息ひとつ乱していない千冬がそう指示を出した。

あとはISの調整だけであり、千冬一人でも十分事足りる。

「じゃあ、ゼロさんを借りていきますね」

「構いませんが……あまり本気になり過ぎないようにお願いします」

ウォーミングアップ代わりにゼロと戦うと言った真耶の目に、現役時代の鋭さを見た千冬が、渋々ながらも許可を出した。こうなった真耶は、なかなか頑固であるということを経験していたからであった。

「いいですよね？　ゼロさん」

「……ああ」

チフユがいいというのなら、と言わんばかりに快諾し、ゼロは真紅のアーマーを纏い空へ上がった。

ゼロと真耶は千冬の邪魔にならないように十分距離を取り、向かい合う。

※

「ルールは、火器の使用禁止、相手を一秒間、一方的にロックできた方の勝ちです」  
弾薬だって、タダではないんです。それに、使った分の弾薬がほぼ無条件に国から支給される代表候補生とは違って、IS学園で使った弾薬はIS学園、つまり日本の国庫から支払われることになるので、血税を、ただの好奇心のために使うわけにはいかないのです。

あとは、もうすぐで生徒が来てしまうため、流れ弾など安全面の配慮もあります。私の熱意が伝わったのか、ゼロさんは少し驚いた様子で了承してくれました。

何故、バトルジャンキーでもない私がこんな真似をしているのかといえ、ひとえにこの人への興味であると言える。

ゼロさんが採用試験の時に見せた、弾幕をすり抜ける奇妙な機動、あれの正体を見極

めたかった。

弾幕をすり抜けるのもさることながら、あのあと私の乗機だったラファールの戦闘口グを解析したところ、あの瞬間だけ、ISの索敵からもロストしていたことが分かった。人間が反応し辛い角度や速度で移動することによって、一瞬相手から消えたように見せる移動法は確かに存在する。『プリユンヒルデ』や『紅蓮の豪腕』といった、近接武装を主軸に戦う操縦者の移動法がそれだ。

だが、ゼロさんの移動法はそれに当てはまらなかつた。

ワンオファビリティかとも思ったが、試験に使っていたIS〈玉鋼〉は訓練用の自己進化プログラムがロックされた機体で、そんなことはありえなかつた。

となると、残りは装備か操縦技術かに限られてくる。

一瞬とはいえ、すべての攻撃と索敵を潜り抜ける装備や技術、そんなものが存在してしまえば、ISで良くも悪くも一変した世界がまた、変遷することになるだろう。

だから、見極めなければならぬ。

「ただ戦うのも退屈ですから、何か賭けますか。私が勝ったら……」

——シャドウダッシュの秘密、教えてくださいね。

「!？」

私はゼロさんの返事も待たずに戦闘を開始した。

・  
・  
・

甘かった。と言わざるを得なかった。

私の考えでは、ゼロさんの実直そうな性格を利用して、賭け事を押し付け本気にさせ、目的のシャドウダッシュを使わせることであった。見たところ、ゼロさんは空中戦を不得手としている（といつても、あくまで地上戦と比べてだが）ようで、あわよくば勝てると思っていた。

呼び出した五十一口径アサルトライフルの架空の射線が虚しく空を切る。そもそも、採用試験の時とはゼロさんの乗機が違い、それに伴い機動もかなり異なっていた。

空中の見えない足場を蹴って放物線を描くような動きをしたかと思えば、直線機動で素早く回避、という感じで一向に照準器にかすりもしない。私も一応負けてはいないのに、ゼロさんからロックはされていらないのだが、ゼロさんの得意分野は近接攻撃、射撃はあくまでサブウェポンでしかない。

織斑先生のいるところにほとんどの生徒が集合しているのを見て、タイムリミットが近づいていると感じた私は決めにかかろうと瞬時加速（イグニッション・ブースト）でゼロさんをすり抜けるように交錯し即座に反転、照準に捉えようとした。

しかしすでにそこにゼロさんはおらず、突如、ハイパーセンサーの警告音が被ロック

を知らせる。

「ッ！ 上!？」

ゼロさんは私の動きを読み、交錯した瞬間に上昇、太陽を背に私めがけて落下してきた。

一瞬、太陽光に目がくらんでゼロさんが見えなくなり、ハイパーセンサーから送られてくる視覚情報を頼りに銃口を向ける。お互いにロックされている状態では、タイムカウントは進まない。

ISの遮光機能が働き、見えるようになったかと思いきや、逆に暗すぎて見えなかった。

ゼロさんが間近まで迫り、太陽を覆い隠したからだ。

「……オレの事は、あまり詮索しないで欲しい……マヤやチフユに、危害を加えるつもりはない」

クロスレンジまで接近したゼロさんは私の持っていたライフルの銃口部分を掴んで、自分から逸らし、反対の手で持ったバスターショットを突き付けた。

ハイパーセンサーの隅に表示されていた『1000/msec(ミリセカンド)』という数字が見る間に減っていく。

「諦め……ません!」

私はゼロさんから距離を取ろうと、六時方向に瞬時加速した。

「!?」

「つて、きやあああああー!! どいてくださいいいーっ!!」

——ズドオオオオオオオオン。

いったい何をまかり間違ったのか、止まり切れずに生徒たちが集まっていた場所に墜落してしまった。

そのままゴロゴロと地表を回転して、止まる。

どうやら落下の際に生徒と抱き合うようにして巻き込んでしまったようで、胸と内太ももに違和感を感じる。

「……あのう、織斑くん?」

目を開けると——学園唯一の男子生徒だった!

織斑くんは、いったい何が起こったのかよくわかっていない、という表情で私の胸を鷲掴みにしていた。

「そ、そのですね。困ります……こんな場所で……いえ、場所だけではなくてです……私と織斑くんは教師と生徒なわけですから……」

織斑くんはゆっくりと状況を理解し、逆に体を硬直させてしまった。

どうしたものかと考えつつ、さっきの試合の行方を確認する。

画面の表示は「0 / msec」となっており、私が負けたことを示していた。

……勝たなきゃいけない戦いだっただのになあ。

私は一瞬、織斑くんのことを忘れて深くため息をついた。

「……ハッ!？」

固まっていた織斑くんが突如、出来合いのアスキーアートのような顔と声を出して私から飛び退き、直後、さっきまで織斑くんがいた空間を青色光が薙いだ。

発信元は、ブルーティアーズをまとい、額に青筋を浮かべたオルコットさん。

この間に、私はすべてを理解する。

そして、青春だなあ、と思った。

織斑くんが退いてくれたので上体を起こし、追撃せんと投げられた鳳さんの双天牙月を撃ち落とす。

青春するのもいいですが、今は授業中ですよ？

※

俺は、山田先生の助けもあり、クラスメートと幼馴染の暴力から救われた。かに思えた。

——ガシッ!

「なあ……織斑。放課後アリーナで模擬戦をしような……う。」

肩を掴まれて後ろを向くと、山田がアルカイックスマイルでこちらを見つ……ハルさん目が笑ってないよ!! むしろ「ゴゴゴゴゴ」って効果音とか暗黒オーラが出てそうだよ!!

そうでした。この人はシス（姉）コンだった。

「お、おう……」

い、行くとは言っていないし……呼びかけに対して返事をしただけだし（苦し紛れ）

「え？ 一夏自主訓練するの？ 私も混ぜなさいよ」

「わたくしも、自主訓練はやぶさかではなくてよ？」

セシリアと鈴に聞かれた……これは詰んだ。逃げられない。

俺は、女子三人にボコボコにされる未来を予測し、空を仰いで深くため息をついた。

「さて、小娘ども、いつまで油を売っている？」

魔王（マイグレートビッグシスター）の一喝で、授業に引き戻される。

確か、セシリアと鈴の模擬戦の相手が山田先生とかいう話だったな。

「今のうちに……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が搭乗しているISの解説をしてみろ」

「あつ、はい」

模擬戦の結果を端的に説明するところだ。

鈴&セシ「元グリーンベレーの俺に勝てるもんか」

山T「試してみるか？俺だつて元コマンドーだ」

鈴&セシ「テメエなんか怖かあねえ!!、野郎おおおぶつ殺してやらああ!!」

以下略

部隊名を「現代表候補生」「元代表候補生」に変えれば、大体こんな感じだった。

負けた原因のなすりあいをはじめた鈴とセシリアの二人を千冬姉が黙らせ、授業は続いた。

## 番外：回避型のメイン盾、信じるもの、悪のウイルス

——プルルルルルル……。

「ねえ……エックス君」

『どうしたの？ そっちから掛けてくるなんて珍しいね』

「……ちよつと前にさ、気まぐれで全世界のISの自己進化ログを解析したんだけど、どうやらデータ提出を拒否したコアがあるみたいなんだよね……全部で三機ほど」

『話が見えないな、もつと単刀直入に言ってくれるかい？ ボク頭脳派っぽいけど、実は脳筋なんだ』

脳（味噌）筋（肉）の電子データとはこれいかに、と東はツツコミたかったが、あえて本題を優先した。

「ISの生みの親だよ？ 私」

ISのことなら、すべて知っているとって差し支えない彼女がアクセス拒否を食らったのだ。

東的には、とても由々しき事態である。

『何を言っているんだい？ 『自己進化』の特性を持つ発明にはままあることじゃないか

……僕のいた世界では、自身の最高傑作にミサイルで街ごと吹っ飛ばされた博士もいるんだよ?」

エックスは心底不思議そうに言った。

「人間を目標に作られた発明(レプリロイド)と一緒にしないで。ISはコアの自己進化プログラム(脳みそ)から、マニユアル(教科書)まで全部私がつってるんだよ?」

つまり東は、ISの自己進化にかかわるプロセスとファクターをすべて把握しているのだ。

それは操縦者の行動と、記憶、そしてコアネットワークを介したIS同士の情報の共有が、主要要素になっている。

ISコアの疑似人格同士が常にチャットをしていると考えると分かりやすい。「今日、こんなことがあった」「今日、私はこういう進化をした」「今日、こういう機動をして、結果こうなった」といった情報を全世界のISが見て、参考にしたり、シミュレーションを行ったりするのだ。

そのチャットを『拒否する』という『自己進化』は、する意図がわからないし、そもそもどういう進化をすればそうなるのかも分からないし、『進化』であるかどうかも怪しい。

「……今まで使えていた機能を放棄するのは、生物界では『退化』っていうんだよ」

エックスに説明を終えた東は、苛立たしげに言い捨てた。

『ちなみに、そのISは今何のISになってるの?』

「ラファールのマイナーチェンジと、打鉄のマイナーチェンジ、あとは英独共同開発の新鋭機かな」

『……ふーん』

「何、今の間は。なんか知ってるの?」

『……秘密。なんなら会ってみて直接調査すればいいじゃないか。内二つはIS学園に  
いるんだろ?』

東が問い詰めると、エックスはまた奇妙な間の後に返答した。それと同時に、東アイ  
ランドのディスプレイに浮かんだ『不正アクセスを検知』の文字。

「あー!! エックス君勝手にコアネットワークにハックして操縦者の情報みたなー!!」

「サイバー空間は僕の家みたいなもんさ、自宅で探し物をして何が悪い?」

「開き直ったー!!? ちきしょー! いつか引つ掴まえてISのAIにしてやるー!!」

「まだ電脳世界の綻びすら観測できてないから、まだまだかかりそうだねえ」

ぐぬぬぬ。と息巻く東を軽くあしらうエックスだが、彼はあくまで向こう側の世界から  
こちらにアクセスしているに過ぎない。一日五分のエックスとの対話中、ずっと、サ  
イバー空間はこちらとあちらの世界を繋いでいるはずなのだ。だが東はその経路すら

観測できていない。

それがどれくらい難しいか、というのは、電腦世界を海に例えると分かりやすい。

凡人が浅瀬で魚（情報）を捕るところ、東は深海生物を捕まえに海溝に行こうとしているようなものだ。

「く、クロエちゃんのISが完成すれば、あつという間だもん！」

「そんな資材どこにあるの？ 『アカツバキ』に残りの資材全部使っちゃったじゃないか」

「ぐぬぬぬぬ……………」

『クロエちゃんのIS』とは、さっきの例えでいえば潜水艇のような役割を果たすことができる機能を持っている。

「ま、それはいいとして、パツと行ってパツと帰ってくればいいじゃない？ IS学園」

「……………やだ」

エックスの問いに、東は絶対に行きたくない。という不転の意思を示す。

——なぜなら、あそこは天災をもってしても度し難い奴が守っているからだ。

……………

「いやー、まさかIS委員会の人だったとは、誠に失礼を致しました」

用務員らしき地味な服を着た青年は申し訳なきように言った。

もちろん、身分証は偽造だ。本部に照会してもばれないだろうが、それはIS委員会のデータベースをいじくったからだ。

束はサンングラスにパツキンのウィッグを装備し、バレやしないと踏んで意気揚々と学園に踏み込んだところ、用務員と思しき彼に所属を問われてしまい、今に至る。

そして、用務員長に案内としてつけられてしまったのが、この、ゲームでは冒頭に死にそうなモブっぽい平凡な顔立ちをした青年である。

「……早く案内を」

「おおっと、ごめんなさい。本日は授業風景の査察でしたね。今は一年生と二年生がそれぞれ別の場所で練習をしています、いかがいたしますか？」

「……一年の方で」

アクセス拒否のIS持ちの生徒は、一年と二年の両方にいたが、箒ちゃんに私の変装が見抜かれる可能性があったため、二年の方にする。

「かしこまりました。ついてきてくださいね」

故についていく気などさらさらない。

視察の邪魔になるので無駄口は慎んでください。あと、こつちを振り向かずキリキ

り案内してください。と忠告し、彼の背中に足音を誤魔化す装置を取り付け、一年生の練習場に向かう曲がり角を間がった彼が見えなくなるのを待つて正反対の二年生の方向へ向かった。

——直後、

「どこへ行かれる？　　I S委員会の方」

先ほど見送ったはずの、用務員の制服の男に呼び止められた。振り返つてもそこにはおらず、視線を前に戻すと、声の主がいた。

用務員の男は帽子を目深にかぶり、目元をうかがい知ることができない。

だが、名札に書かれた名前が先ほどの彼とは違うことは分かった。

「……」

I S委員会の方、と呼んだ時点で、モブ顔の彼のような勘違いではないことに気付く。

「それに、学園が付けた案内を撒いてまで、いったい何を見に行く？」

周囲に人の気配はなかったはずなのに、どうやら一部始終を見られていたらしい。

「……別に、監視付では見られないところを査察するためですよ」

束はばれてしまったと肩をすくめ、しかし悪びれずに言った。

「……下手な芝居だな、シノノノ　タバネ」

「……………やははー、ばれちまっちゃーしよーがない！　天才の束さんだよー、はろー」

古事記には書いていないが、挨拶は大事なのだ。

ババーンと変装用の社会人スーツとカツラを取り、いつものスタイルになる。

「キミの事は興味ないから私は行くよ。じゃあねー!」

ひよいつと用務員をかわして先に進む、がいつの間に回り込まれたのか、用務員の男がまた前に立ちふさがる。

「キミもしつこいねー。あんまり束さんを怒らせるんじゃあないよ?」

もう一度、躲して前に進む。

「……この束さんに刃を向けるとは……どうやら死にたいみたいだね」

今度は苦無の様な刃物を背後から束の首筋に添えていた。

束は首を曲げて、付き付けられた苦無を鎖骨と下顎骨で挟み込むようにし、砕き折った。

用務員の男が息をのむ音を聞き、束は振り向きざまに超速の手刀を放つ。

凡人にはおおよそ反応できない速度で放たれたにもかかわらず、その手刀は空を切った。

「ふむ、てつきり理系畑で戦闘はからきしだと思っていたのだが、存外にできるようではないか」

外国の映画のように上半身をのけぞらせて、用務員の男は言った。

「っ！ この!!」

男の不安定な体制では避けられないだろうと踏んで、束は男のどてつぱら目がけて拳を振り下ろそうとした。

——バゴンツ!!

堅いものと硬いものがぶつかる感触、人間の腹と拳から通常こんな音は出ない。

束が、殴ったものを確認すると、薪用の丸太だった。拳の当たったところは、抉り取られたかのようにひしゃげていた。

「だが、そなたの『武』には『技』と『術』がない。その生まれ持った力を振り回すばかり……幼子とそう変わらぬ」

背後から数メートルのところに男は立っていた。

男はどこか興ざめしたように殺気を消し、服についた埃をぱしぱしと叩いていた。

「で、モノは相談なのだが……ここで引き返してはもらえぬか？」

「いやだね。束さんは諦めの悪い女なのさ」

「あと三十分ほどで授業が終わって生徒でぐった返す場所だとしても？」

それを聞いて、束はぐぬぬと眉をしかめた。

人に見られるのはまずい。

パツと行ってパツと帰る一番の理由は、なるべく他人の目に触れたくない。というも

のだからだ。

しかも、この男の挙動を見るに、三十分は優に稼げるぞ、と言外に言っているようにも取れる。

そして、世にも奇妙な現象が起こる。

「拙者がいるうちは、あまりここ（IS学園）に好き勝手出入りさせるわけにはゆかぬ。特に、正式な申し合わせ（アポイントメント）のない者はなあ？」

視界に捉えているはずの男の声が、背後から聞こえた。

振り返ると、さっきまで見ていた男がいる。

もう一度振り返っても、同じ男。

「……え？」

「おいおい、シュレディンガーの猫かよ。と思わず毒突きそうになる。」

「理論はどうあれ、できるのだから仕方ない」

束の胡散臭げな視線でそれを読み取ったであろう男は、言われる前に言葉を紡いでいた。

「で、如何なされる？ 天才殿」

『にげる』か『たたかう』かの二択。道具やポケモンはないのだ。

少し考えて、束は結論を出す。

「ちえつ。しようがないなあ……今日の所は帰らせてもらうよ……でも、」

——やられっぱなしはやだからさあ？。

「!?」

男の視界から束の姿が一瞬にして掻き消え、男を追い越して数メートル後方に一瞬で移動したように見えた。

束の手には、『さらやしき』と書かれた男の名札が握られていた。

「名札、もらつてくよ。どうせ覚えられないだろうけど……じゃあね、忍者のあんちゃん」

男——ファントムが名札のあった胸元を見ると、綺麗に安全ピンを外して名札を抜きとった跡があった。

そして、再び顔を上げると、束はもう来賓用のエントランスに向けて歩いていった。

「ふむ……用務員服への配慮、恐れ入る。だがしかし、やはりそなたの武は才能ありきにござるな」

凜、といつの間に抜刀していた忍者刀を、鞘に納める音になった。

——ビリリッ!!

それと時を同じくして、束の着ていたフリル満載の洋服が、胸元から大きく裂けてずるりと落ちた。

「あ……………？」

ウサ耳とあいまって、どこかいかかわしいお店のようである。

「……………格好の割に、乳当てはずいぶんとませておられる」

——ぎやあああああああああ————!!!

絹を裂くような悲鳴、とはとても呼べない叫び声だ！学園中に響いた。

「このエロ忍者！ つか絶対になぬつ殺してやる絶対になぬつ殺してやるぜえーつたいになぬつ殺してやる覚えとけよおー!!!」

声だけで人が殺せそうな重低音で！呪詛を吐きながら、束は人が来ないうちにそそくさと退散した。

……………

「そうだ！ 合宿の時に調べに行けばいいんだ！」

あのエロ忍者は、学校の用務員服を着ていた、ということとは、学園の回し者の可能性が高い。そうやすやすと学園を離れることはできないはずだ。

そう考えた束は、学園のコンピュータを衛星回線を通じてハックし、合宿の日程を入力した。

『……………さつき、君は僕の行動を咎めたけど、君も大概だよね』

「んー？ 人間なんてそんなもんだよ。裏切り、手のひら返しは人の世の常、特に、こつ

ちの世界ではね」

『……ははは……少しゼロが心配になってきたよ』

「ま、ゼロくんは必ずしも『人間』そのものを信じてるわけじゃないから大丈夫だと思うけど……エックス君と違って、ね」

——たとえば、エックス君は人を殺したことがなくて、ゼロくんにはある。

「それが、君たちの生みの親の違いからくる倫理観の違いを如実に表しているところだと私は思うよ」

『……』

「きつと……エックス君は根っからの善人だけど、ゼロくんの考え方にはどうしても『悪』が混ざってしまうんだと思う」

『悪』って言うっても、そんな言葉どおりの意味じゃないけどね。と束は付け加え、話を続ける。

……たとえばさ、

人殺しは悪いことだ。と大抵の人は言うよね。

だから君は、人間とレプリロイドの大半を滅ぼした戦争の元凶（バイル）でさえ、殺さなかった。

——でも、彼は何の躊躇もなく殺した。

「これは悪かい？」

『…………』

「…………『一概に悪いとは言い切れない』ことは確かだと思うよ。必要悪、って奴」

『そう…………かもしれない。少なくとも、ゼロのやったことを咎める権利を持つモノはあ  
の世界にはいない。第一ボクが許さない』

「ふーん、…………やつぱりエックス君は統治者には向いてないね。考え方が正し過ぎる。  
もはや聖人君子のレベルだよ」

人間は、いい部分と悪い部分両方を持っていて、上手に使い分けながら生活している。  
「そもそも、『人間』なんて、あんな不確かで曖昧なものを信じるから、体ぶっ壊されて  
あつちの世界で死にかけたりしたのさ」

——私はね、『Σウィルス』ってのは、レプリロイドをロボットの軀（三原則）から解  
き放つための修正プログラムだと思っただよ。

……………

ライト博士は、エックスに『迷う』ことを可能にさせた。

『迷う』ことで、ロボット三原則を超越できる可能性をエックスに委ねた。

ワイリー博士は、ゼロに『悪意』を持たせた。

『悪い』ことをしても『良い』という結論に至る思考プロセスを構築した。

まだ作られたばかりのゼロは『悪意』によって暴走してしまったが、結果として別のレプリロイド（シグマ）に『悪意』を植え付けることができた。

.....

「芽生えた『悪意』というものに従って行動するか、つていうのは本人の状況次第だからね」

本人の状況、つまり感染者（シグマ）周囲の人間たちに、ロボット三原則超越の可能性を委ねたのだ。

「二人の天才は、手段は違えど方向性は同じで、結論は違ってしまったわけだ」  
果たして、

迷い、人を信じることにした「エックス」か

迷わず、信じるものためなら殺人もいとわない「ゼロ」か

どちらが正解なのか。それは誰にもわからない。

——ミスウイトシスター箒ちゃんからの着信だよ♪

場違いな着信音が、二人の会話に終止符を打った。

## 一夏とゼロ／絶対零度の恋

真耶が、鈴とセシリアをのした後、代表候補生ごとに班分けをし、班毎に数機の I S を使つての実習となつた。

パツと見、ラウラ、一夏を除いた専用機持ち達はまともに指導できていた。

「ゼロ、済まないが織斑の様子を見てやつてくれないか。私が行くと、依怙鼻屑と取る生徒もいるだろうから」

「……ああ。わかつた」

ゼロが了承すると、千冬はラウラの班へ向かつた。

・ ・ ・

I S のコクピットは、直立状態では人が乗れない高さにある。故に、搭乗者が降り、駐機状態にする際は必ずしゃがませなければならない。

……のだが。

「あつ、箒！ 立ったまま I S から降りるなよ！」

また俺が、女子を抱えて飛ばないといけないじゃないか。  
そんな俺の悲痛な叫びも、箒はそっぽを向いて封殺した。解せぬ。

「……………どうした？」

そんな一夏のところにゼロが現れた。

さっきの『薄着の女子を持ってコクピットの高さまで運べ』という山田先生の、思春期男子への配慮など微塵もないアドバイスとは違った解決策を提示してくれることを一夏はゼロに願った。

「それが、ISを立たせたまま降りちゃったみたいで……………」

ゼロは、少し考える。

指導要領には、先ほど真耶が言ったようなアドバイスを記されていたのだが、時間も押しているため、居残り生が出てしまうかもしれないなかった。

「……………ふむ。ISをしゃがませればいい……………か」

「え？ 一体どうやつ……………」

一夏が言い切る前に、ゼロが地を蹴った。

ゼロはそのまま空中で体を半回転し、直立状態のISのコクピットに搭乗した。

かしゅー、とコクピットのサスペンションから空気が抜け切らない内に、ゼロはIS

をしゃがませて降機した。

「……………これでいいか？」

「えっ……………あつ、はい。ありがとうございます」

「……………このまま全員が実習できないと、放課後に居残りになる。急げ」

それだけ言つて、ゼロは一夏達のところから離れていった。

／  
あれは一体なんだったのだろう。

あの後、『このままだと居残り』という言葉聞いて本気になった女子たちのおかげで何とか授業時間内に全員の実習が終わった。

あの時は、ただすごいなあ、としか思わなかったが、よくよく考えるとゼロ先生がいかに常識はずれな動きをしていたかがわかってきた。

飛び乗るって何だよ!? ISはヨツシーか何かじゃないんだぞ？

ゼロ先生の略歴を調べても、特に当たり障りのない物（キューバとか南米系の工学部卒）だったし、公式の大会への出場経験がない彼女は、搭乗時間等のISに関するデータの一切がない。

セシリアや鈴に聞いても何も知らないみたいだった。

彼女ほどの身体能力と、教師になれるレベルのIS操縦技術があれば、絶対にどこか

の国が粉をかけているはずなのだ。

今でこそ「篠ノ之」姓のおかげでうかつに手を出す勢力はいないが、その姓も最近になって改姓したものだという。

経緯と実力がちぐはぐ過ぎるのだ。まるで、経歴があとから都合よくでつち上げられたかのように……

ま、でもあの千冬姉があれだけ信頼しているのであれば、多少経歴がブラックでも俺は気にしないんだけどね。

そんなことを考えながら、俺は皆と昼ご飯を食べ、午後を過ごした。

………同日

もう、春も過ぎ、初夏の日差しが屋外演習場を焦がす。

必要以上に砂埃が飛ばないように水が捲かれていたが、この日差しではそう遠くないうちに無駄になりそうであった。

暑くてあまり人気のない屋外の演習場には、数組の生徒たちがISに搭乗しての自習を行っていたが、みな一様に汗濡れていた。

……ある二人を除いては。

「さあ先生。お手柔らかにお願い致します」

「……ああ、よろしく頼む」

対峙する真紅と群青、ゼロとレヴィアであった。

レヴィアは狂笑に歪みそうになる顔を必死に抑えていた。

——なぜなら、そんな笑い方をしたら一発で正体がばれるのだ。というのも、初対面で全く気付かれなかったからである。

……

彼は名簿を見、そしてこちらを見た。

「最初の演習相手は……レヴィア・オルコット……さん、で間違いはないか？」

「ゼロ！ 会いたかったわ!!」

こちらの世界に来てから幾星霜、待ち望んでいた相手にやっと会えた私は、人目もはばからずに彼に抱きついてしまった。

半ばタツクルじみた抱擁にも全く動じないバランス感覚と、腰に回した手から人間にはないある種の『硬さ』が感じられて、本物の『彼』なのだということを実感する。

「……」

真偽の確認が済んだところで、顔を上げ、彼の表情を見る。

きつと驚いているだろう。

死んだと思っていたレプリロイドが人間になっていたのだから。

「……名前で呼ぶのは構わないが、初対面の相手にいささか友好的過ぎではないか？」

だが、彼の表情は困惑が占めていた。

……

向こうの世界では、お互いに命のやり取りをした間柄であったとしても、ゼロがレヴィアタンに気付かないのは、無理からぬことであつた。

表情や、身に纏う雰囲気の違い過ぎるのだ。

かつて、ゼロと刃を交えていたときの彼女は、絶対強者に挑む勇者の様な勇猛さと、刹那の命の輝きに魅入られてしまった狂戦士の様な危うさを秘めた笑みを絶やさず、彼に強烈な印象を与えた。

だが今のレヴィアは、四天王（ゼロの宿敵）ではなく一人の人間としてこの世界において、あのころとはまた違った心境でゼロ打倒を目指している。それが彼女の表情、雰囲気を変えてしまっていた。

「ごめんなさい。初対面の方にいささか無礼が過ぎました……以後気を付けます」

てへぺろ、を上品さで五倍希釈したような表情とセリフで、レヴィアはとつさに誤魔化した。

ゼロが自分に気付かなかつた訳にすぐに思い至つた彼女はすぐにも正体を明かす

ことはできた。が、そうはしなかった。

——その方が面白そうだったからだ。

彼女は無自覚に笑う。

「……………」

その笑みに妙な既視感を覚えたゼロであったが、他人の空似だろうと自己解決し、本来の目的である模擬戦演習に臨む。

……………

そして、冒頭に戻る。

「はあっ!!」

開始早々、『瞬時加速（イグニッションブースト）』で突撃し、エネルギー刃を持った槍で突く。

「やっ!! やっ!! やあっ!!」

初撃が躲されるのは読んでいたため、そのまま連続で突き、突き、薙ぎの連撃を放つ。

ゼロはゼットセイバーとリコイルロッドでその連撃を難なく受け流し、エネルギー兵器同士が干渉しあう特殊な雑音を奏でる。

ゼロの、あちらの世界とまったく変わらない身のこなしを見て、レヴィアの歓喜はさらに高まる。

だが得物のリーチの差もあり、ゼロは反撃に移ることができない。

このままでもいい演習にはなるのだが、臨機応変な戦いを身に着けるには不向きであり、ゼロは「なるべく様々な戦い方を経験させてあげてくださいね」と真耶に注意を受けていた。

「……ふむ」

故に、ゼロはバスターショットのチャージ攻撃でレヴィアをけん制し、距離を取って仕切り直した。

そして、ゼットセイバーとリコイルロッドを消し、武器を変更する。

「武器を合わせてくれるのかしら？ 舐められたものね！」

穂先の光る槍―トリプルロッドを持ったゼロを見て、レヴィアは苛立った。

彼女はゼロのもつとも得意とする武器がゼットセイバーであること。また、サブウエポンであるバスターと合わせた二つの武装は、いつの戦いでもゼロが使っていたことを覚えていた。

槍のデザインと穂先を包む緑光が、彼の武器であることを表していることは明白なのだが、槍を使っているとかなどあまり見たことがない。

きつと、先ほどの光るトンファアのような武装と同じく、あちらの世界でもごく短い期間しか使用されなかった武装だろうと辺りをつけた。

「……行くぞ」

今度はゼロがレヴィアに肉薄し、光槍を振るった。

速いだけの突き、この学園の平均的な二年生ならばなんなく対処できるであろうレベルであり、レヴィアにとっては舐められているようにしか感じられなかった。

「……つまらないわ」

「……!?!」

故に、レヴィアは自身の槍の穂先を彼のものとかち合わせ、外側から内側にらせんを描くように回転させて、ゼロの突きを逸らしながらカウンター気味に反撃した。

ゼロは反射的に、突き出された穂先を体を捻って回避し、その勢いで回転、槍の石突部分で打突した。

レヴィアは後ろに跳躍し、回避……できなかつた。

ゼロの光槍が伸び、石突が彼女の腹を打った。

スキンバリアによって緩和されはしたものの、鈍痛が彼女の鳩尾辺りに残る。

「へえ、その槍伸びるのね」

痛みを抑えて起き上がったレヴィアが、ガシンガシンと音を立てて折り畳み傘のよう  
に三段階に折り畳まって行くゼロの槍を見ながら呟いた。

そして、ゼロに見られないようにうつむき加減に狂笑（わら）う。

——『近似零度（ニア・アブソリュート・ゼロ）』、起動。

空気中の水分が凝結、凝固し、レヴィアのIS『蒼海の海神（リヴァイアサン）』にドレスのような意匠を纏わせる。

「……」

ゼロは何か得体のしれないスキルを発動したレヴィアを警戒し、油断なくトリプルロッドを構えた。

レヴィアの背後から、赤く光る球のような非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）が二基展開され、彼女のISの能力によって氷の造形を纏っていく。

——さあ、行きなさい。

赤い球体は二匹の龍と化し、氷同士が擦れ合う怪音を鳴き声にしてゼロに襲い掛かった。

「……この技は……？」

見たことがある。とゼロは既視感を覚えた。

迫る龍の顎撃を躲し、すれ違いざまにロッドから持ち替えたセイバーで三段斬りを叩きこむと、龍を形作っていた氷が砕け、ゼロの足元に散らばった。核となっていた球は、そのまま量子化して消えてしまった。

「見覚えがあるでしょ？」

——でも、ここからは違う。

レヴィアは、氷の龍の後ろから、槍を構えて突っ込んで来ていた。

「……………!?!」

意表を突かれたが、何の変哲もない突撃に、ゼロが対応できぬはずがない。

ゼロは、氷の龍の時と同じように避けようとして……………。

「無駄よ。私の氷があなたを捕えているもの」

膝から下が、散らばった氷と地面にしみ込んだ水が凍り付いて動かなくなっていることに気付いた。

眼前には、もはや隠しきれなくなった狂笑を満たす彼女がいた。

その瞬間、ゼロは、彼女の正体を理解した。

「……………済まない。レヴィアタン」

同時に、膝を始点に上体を水平になるまで倒し、腹部を狙っていたレヴィアの突撃を回避した。

二人の視線が交錯する。

ゼロはすれ違いざま、レヴィアの槍を掴む（…）。逆の手には、チャージ済みのリコ

イルロッド。

「……まだ、お前に壊される訳にはいかない」

——オオン!!

光刃が空を裂きレヴィアを貫かんとする。たちまち絶対防御が発動し人体にかかるダメージを殺し、そうしきれなかった運動エネルギーに従って飛ばされた。

「かはっ……」

レヴィアは地面を数回バウンドし、蹲るように着地した。

腹部に受けた衝撃によって肺の空気が追い出され、一時的な酸欠状態になる。

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

朦朧とする彼女の意識の中で、一つだけはつきりしていることがあった。

「はぁ……はぁ……」

——楽しい。

「はぁ……」

——楽しい楽しい。

「は……はは」

——楽しい楽しい楽しい  
!!!!!!!

「あははははっ!! 楽しいわ、ゼロ！ やっぱり貴方はこうでなくちゃー」

エネルギーは残りわずか。愛槍もゼロナックルによって奪われてしまった。

しかし、立ち上がった彼女の表情は狂喜が占めて——この瞬間、彼女は自分が人間であることを忘れた。

——スキンバリア、絶対防御、強制終了。全アラート停止。

——『近似零度（ニア・アブソリュート・ゼロ）』、超過駆動（オーバードライブ）。彼女の両腕を氷が覆い、二振りの騎槍に変化するや否や、ゼロに向かって呐喊した。

「……!?!」

一切の隙のない怒涛の連撃に、ゼロはたじろぐ。

生身を避けて武器破壊を狙おうにも、コンマ一秒もしないうちに元通りになってしまったため、防戦一方となった。

対するレヴィアは、人の身でありながら、レプリロイドの時と同等以上の速さと気迫で持つてゼロを追い詰めていた。

だが、彼女とてもはや人の身、先ほどまで酸欠状態だったところにこの運動量、徐々に動きが鈍くなってゆく。

「……!?!」

優勢を取り戻したゼロが、『リヴァイアサン』の腕部装甲を切り、マニピレータの機

能を停止させた。そして露わになった両腕を見て、ゼロは驚愕する。

「……お前、その腕……」

防御に使うはずのエネルギーをすべて氷槍の維持に使っており、冷気で指先が赤黒く変色してしまっていた。

「あははっ！ 貴方を倒せるなら、腕の一本や二本、どうってことないわ！」

「……『人間』が、自分の体を粗末に扱うな」

勝負はついた。とばかりに武装を量子化するゼロに、レヴィアは先ほどの狂喜とは打って変わって猛烈な怒りがこみ上げた。

「そうやって、貴方はまた……私をつ!!」

レヴィアは怒りにまかせて氷槍を作成、すでに感覚のなくなつて久しい腕に氷漬けにして固定、ゼロに突きかかった。

「……『人間』を守るレプリロイドだった奴が、自分（人間）を蔑ろにしてどうする!!」  
突きかかられたゼロはノーガード。氷槍は胸部アーマーに当たり、貫けずに砕け散つた。

ISのパワーアシストなしでは、急造の氷槍はもはや、氷の塊でしかなかった。

ゼロはレヴィアに肉薄、鳩尾を軽く殴つて昏倒させ、崩れ落ちる彼女の体を抱きかかえる。

そして、未だ交戦の意思からか、弱くもがく彼女に耳打ちした。

「……あの時から、お前がオレを恨んでいるのはわかっていた」

——レヴィアアタンの武人としてのプライドを、くだらない感傷で踏みにじったのは俺だ。

「だから……もし、あの世界でオレが必要でなくなったときは……お前に壊されるのも悪くないと思っていた」

——だが、もうお前はあの頃のお前ではない。『俺を倒す』などというつまらない理由で命を懸ける必要もない。

「……少し、熱くなり過ぎだ。レヴィアアタン」

ゼロが話を終え、レヴィアの意識は初夏の日差しに熱せられたゼロの無機質な温もりを感じながら薄れていった。

## 一夏と転校生

授業で初めて I S の演習があつた日から数日後の土曜日。自主練のためのアリーナ解放が行われている日である。

普段は暑くて人気のない屋外第三アリーナだったが、今日は学園で二人しかいない男子が一同に会するという情報がどこからか漏れたらしく、使用希望者が続出し、生徒たちは強制的に障害物回避実習をさせられているような形になっていた。

……

良い選手が、良い監督（またはコーチ）になれるかどうかはわからない。とよく言われるが、今、俺はそれを痛いほど実感しているところだった。

……オノマトペを多用するファースト幼馴染。

……何かと感覚に頼ろうとするセカンド幼馴染。

……前述の二人とは逆に、理論的かつ定量的過ぎる英国淑女。

彼女らはいい選手ではあるだろうが、監督としてはふさわしくない。そもそも、I S の操縦というものは、自転車の練習と同じで、乗れるようになるまでの過程、練習方法が十人十色なのだ。感覚でいけるやつもいれば、理論から入るやつもいる。故に、「自分

の場合はこうだった」と経験談的に他者に伝授しようとするれば、必ずどこかに齟齬が生まれるのは必定なのだ。

では、この集まりにおける『良い監督』とは誰か、と問われれば間違いなく俺は彼を推す。

「いいかい？ 射撃武器は、基本的にISよりも速いし、仮にISのハイパーセンサーで見えたとしても、人間の反応速度の限界で、弾を見てから避けたり、音を聞いてからじゃまず避けられない」

シャルル・デュノア。

彗星のように現れ、ISに悩む一匹の子羊である俺を導いてくれている。彼曰く、俺は射撃武器の特性がわかっていないのだそうだ。

こうしている今も、後付武装（イコライザ）のない俺の白式を見かねて、アリーナの壁に向かって射撃訓練をさせてくれている。

だのに

「そうは言うがシャルル、なら今俺の背後で起きていることはどう説明するんだ？」

俺は呆れられる覚悟で、先ほどからずっと気になっていたことを尋ねた。

ハイパーセンサーから見える俺の背後では、もちろん多数の生徒が演習をしている。

——ガイン！、ガイン！！

だが、一際異彩を放つ三人一組がいた。

内一機は、赤く彩られた『玉鋼』、ゼロ先生である。

彼女が仮想敵を務める通称『放課後ゼロ演習』は主に上級生に人気のコーナーとなっていた。

ゼロ先生は二年生二人を相手にブレードと拳銃で圧倒していた。

二年生の片方は大口径スナイパーカノン、もう一人はアサルトライフル&ショットガン、という完全に格闘機メタの布陣だというのに。

「んー。背後からの狙撃を剣で弾く……かあ。一夏にはまだ早いんじゃないかな」「幾ら操縦技術があってもできる気がしないんだが……」

「確か……ハイパーセンサーでほぼ全方位見えてるから、相手の視線と指の動きで射線とタイミングを読んで、弾道に得物を置いてバッテリーング、だったかな？」

姉さんの受け売り、僕はそんなことできないから心配しないでね。とシャルルは付け加え、自嘲気味に笑う。

「お、おう……」

まだ見ぬファーニールさんが千冬姉レベルの実力者であることに俺がドン引きしたところで、ゼロ先生が両生徒徒のシールドエネルギーを削りつくした。

「今の試合、それ以外にも一夏の参考になりそうなところがあつたよ。どこだと思う？」

さっぱりわからない。

「うーん、じゃあ聞き方を変えようか。スナイパーカノンの上級生はともかくとして、一夏だったらもう一人の中距離射撃手（ミドルレンジガンナー）とはどう戦う？」

「そりゃあ……多少の被弾を覚悟で突っ込んで……」

シャルルはそう言うと思つたよ、とばかりにはあとため息をついた。

「だから勝てないんだよ一夏。一夏の戦い方じゃ、相手の思うつぼだもん。頑張つて近づいても、近接（クロスレンジ）用のショットガンに吹っ飛ばされてふりだしに戻っちゃう」

先生の戦い方は、付かず離れずの距離を保ち、アサルトライフルの弾幕を避け続け、相手がしびれを切らしてショットガンを当てるために踏み込んだ一瞬の隙について懐に潜り込んでいた。

「あのショットガンは、ブレードを持った相手とやり合うために銃身を切り詰めたせいで弾丸の拡散率が激高なんだ。だから、アサルトライフルの間合いにいる間は、ショットガンの有効射程からは外れることになる」

生身の人間なら弾丸一発で事足りるが、ISの場合、シールドエネルギーを効率よく減らすために散弾を半数は当てる必要がある、有効射程距離、というものが存在する。有効射程外で撃つてもカス当たりにはしかならない。

「ショットガンの理屈は分かった。じゃあ、アサルトライフルはどうやって避けるんだ？」

弾幕を張る。という言葉があるように、雨あられのように弾丸が連続的に飛んでくるのであれば、やはり多少の被弾は必至だ。

「……やっぱり、一夏は射撃武器の勉強が必要みたいだね。偏差射撃、って知ってる？」

「それくらいなら知ってるぜ。セシリアがいつもやってる移動先予測射撃の事だろ？」

「間違ってはいないけど……六割ぐらいかな」

その後のシャルルの説明では、偏差射撃というのは高速で移動する物体に銃弾を当てるために、物体の移動先に向けて発砲することであり、セシリアのレーザーライフルは弾速が速い（レーザーの名の通り光速）ために、弾が届くまでの時間を考慮する必要はなく、逆に人間が無意識に行っている偏差（視覚情報を脳が処理する際のタイムラグ）を修正するためのものだそうだ。

「だから、あの上級生は、高速で移動するゼロ先生に攻撃を当てるために、ISの火器管制（Fire control system）に従って少し先を狙っているんだ。じゃあ、ここで一つ問題」

「でん！」とバラエティー番組のような効果音を口で言いながらシャルルが人差し指をピンと立てた。

真面目キャラだと思っていたが、どうやら日本のお約束（ジャパニーズジョーク）も  
行けるクチのようである。

「その上級生が引き金を引いた直後、ゼロ先生が止まったり、反転したらどうなる？」

「そりゃあ……外れるだろ。ミサイルでもない限り」

「正解、でもこれは単発銃の避け方。だからアサルトライフルみたいなフルオートタイプだと、もう一工夫する必要があるんだ」

「ずっと動き続ける、とかか？」

「まあそんな感じだけど……やってみるのが一番かな」

「えっつ」

何か今ものすごく不穏な発言が聞こえたような……

シャルルはゆっくりとした足取りで俺から距離を取り、振り返ると――

「よし、撃つから避けてね？」

――少女と見まごう満面の笑みをたたえる同級生。

伝説の桜の木の下ならば、衆道に目覚めかねないほどの威力だ。

……イージス艦にくっついてそうな七連装ガトリング砲を構えていることを除けば、  
だが。

「アッ……」  
「!!!!!!」

恐怖、ガトリンググモンスターと化したs y r r君UCの放つ弾幕を俺は避けたり食らったりしながら、初めはどうしたら効率的に避けられるか考える暇もなく闇雲に動いた。

「ほらほら、そんなに単調だとすぐゲームオーバーだよ？」

「ウソだろ！ 縦横無尽に動いているつもりなのに!!」

方向転換を繰り返しているはずなのに、吸い込まれるように銃弾が白式に叩き込まれていく。どうやらシャルルは弱装弾を使ってくれているらしい、じゃなかったらとつくにシールドエネルギーが尽きている。

「僕はI Sの示す偏差照準に向けて撃ってるだけだから、照準がどう動くか予測できるはずだよ！」

口で言うのは簡単だが、一発を避けるために方向転換しても、その間に回避先に向けて三発ぐらい撃たれているのをどうしろと言うのか。

シャルルには悪いが、からかわれているんじゃないかという思考が頭をよぎる。

どうせジリ貧なら、突撃すれば案外活路は開けるものだ。

俺はシャルルにばれないように瞬時加速（イグニツションブースト）の機会を窺っている、絶好のチャンスが訪れる。

シャルルのISのガトリングの銃身がオーバーヒートを起こし、回転が強制停止した。

「あれれ、夏だからかな、あと200発は撃てると思ったのに」

「隙ありだぜ。シャルル!!」

悪いがこの勝負もらった!!

俺は瞬時加速して雪片を大上段に構え、シャルルに突っ込む。

突撃は成功し、刀の間合いに持ち込めた。これで、取り回しの悪いガトリングはただの鉄塊と化す。

勝利を確信して、刀を振り下ろした。

「ルール違反は良くないなあ……この程度、想定していないとでも思っていたのかい？」

——と思っただら宙を舞っていた。

何が起きたのか一瞬わからなくなる。だがシールドエネルギーがごっそり減っていることと、一瞬遅れてやってきた下顎骨への鈍痛がそれを許さない。

パイルバンカー『灰色の鱗殻（グレースケール）』でのアッパーカットをもろに食らっ

たのだ。

突撃を読まれた上の迎撃、先ほど気をつけろと注意されたばかりであった。

フルオートで打ち込まれれば絶対防御すらも飽和させるパイルバンカー故に、一瞬意識が薄れ、機体制御を失う。

そのまま放物線を描くように自由落下し、アリーナの入口付近に到着した。

「いけない、やり過ぎた……一夏大丈夫!」

ああ、なんとかな。

地面か何かに顔が埋まっているのか、うまく喋れなかった。すこし落ち着こうと息を吸い込むと、最近何かと嗅ぎ慣れてしまったあの女子特有のいい匂いがした。

先ほどは地面といったが、そこまで硬くもないし、柔らかくもないし、人肌に暖かい。

「……………辞世の句は考えたか? 織斑一夏」

——着地点 転校生は まな板だった(字余り)

「……………よし、できるだけむごたらしくカイシヤクしてやろう」

ええっ! 俺何にも言っていないっすよ考えただけで!!

ラウラは俺の思考を読んだかのように、蔑んだ目で俺を突き飛ばし肩部カノン砲を向ける。

しかし彼女の瞳は、破廉恥な行動への嫌悪感以外の感情が占めていた。

「……………私は…………『強い』教官の『弱さ』である貴様を認めない」

——炸裂音

※

——衝突音

一夏にはこの二つが同時に聞こえた。

撃つたのはラウラ、それを、一夏との間に割り込むようにして盾で防いだのはシャルルだった。

「接触事故で気を悪くしたのなら謝る。原因は僕だからね…………でも、無防備の生徒に大口徑砲はいささか非常識が過ぎる。しかも、こんな入り口付近で」

「…………遅かれ早かれこの男にはこうするつもりだった。非常識だと思うなら力づくで止めてみる。ただ、フランスの安物骨董品ごときに何かできるとも思わんがな」

「へえ、なかなか面白いことを言うね。試してみるかい？ 頭でっかちの第三世代（ルーキー）さん」

第三世代のISは、その武装の特殊性と、最新技術を多数盛り込むことよって生じた整備性の劣悪化と信頼性の低下から『頭でっかち』と揶揄されることがある。

悪い顔で凄むラウラと、目の奥が笑っていない笑顔のシャルル、シュヴァルツェア・レーゲンのカノンと、ラファールのガトリングの銃口同士が今にも火を噴かんばかりに

にらみ合っていた。

そして、永遠にも思える緊迫した一瞬が過ぎ去り、二人が引き金に指を掛けたその時、途轍もないスピードで二人の間に何か割り込んだ。

「……お前ら、何をやっている」

演習を終えたゼロであった。

ゼロは何も武器を展開していなかったが、それは言外に、発砲されても瞬時に対処できると言っているようなものだった。ゼロを見たラウラは盛大に舌打ちをし、悪態をつきながらではあるが案外あっさり引き下がった。

「すみません。先生、異文化交流に失敗しました」

しれっと当たり障りのない嘘で誤魔化すシャルルに一夏は舌を巻く。

「……私怨による戦闘は危険だ。気をつけろ」

「はい。以後気を付けます」

ゼロは素直なシャルルの返事にうなずき、アリーナから立ち去ろうとする。

「ちよつと待ってください先生！」

そうは問屋が卸さないとばかりに、一夏がゼロを呼び止めた。

「……何だ」

「もし、この銃で弾幕を張られた場合、先生ならどんな風に動いて躲けますか？」

一夏はシャルルのガトリング砲を指して問うた。

問われたゼロは、難しそうな仏頂面で少し考え、すぐに出来るような方法ではないが、いいか? と前置き、話し始める。

ゼロ曰く、目線と銃口の向きから、弾道を予測し、射線と自分が被らないように動く。とのことだった。

「それってさつき、シャルルが言ってたファーニールさんの狙撃を弾く方法とそっくりじゃないか」

そしてそれは、シャルルの「偏差照準を予測する」という避け方とは異なっていた。だが、シャルルの教え方が間違っていたのではない。偏差照準云々は弾道を予測するプロセスにおいて重要な要素であるとのことだった。

「偏差照準を予測されてる、ってガンナー側が読んでいたら、射撃もまた違ったものになるからね。それで結局は読み合いになっちゃう」

この状況を打破し、継続的に弾丸を躲し続ける方法というのが、ゼロの言った、いわゆる後の先を取る方法らしかった。

「なんだかできる気がしないけど……こればかりは訓練で慣らして行くしかないか」  
「……聞きたいことは以上か」

「はい、ありがとうございます」

ゼロが踵を返したとき、鈴やセシリアと訓練に励んでいる箒を見つけた。

「……すまないが、シノノノ生徒に後でチフユの寮に来るように伝えておいてくれないか？」

唐突な頼みごとに、一夏は怪訝な表情をしつつも了承した。だが彼は千冬と箒が一体何の話をするのか見当もつかず、自分も行ってよいかゼロに聞く。

「……チフユの弟ならばいいだろう」

と快諾し、ゼロはアリーナから立ち去った。

……

「そろそろ上がろう、アリーナの閉館時間だ。先に行つて着替えておいてくれ」

僕は後片付けをして帰るから、と付け加え、シャルルはいそいそと撃ちだした空葉莢を拾い始めた。

「いや、俺も手伝うぞ？ それに、なんでいつも一緒に着替えたがらないんだ？」

対する一夏は先には上がらず、同じく葉莢拾いを始めながらシャルルに問いかける。

「……」

ピシリ、と凍ったようにシャルルが固まる。

「逆に……一夏は何でそんなに一緒に着替えたいの？ ホモセクシャルなの？」

シャルルの苦し紛れの口撃が予想外すぎて、一夏はたまらず吹き出した。

だが、一夏は考える。

ここで慌てて否定でもしたなら、本来の自分の疑問には絶対にはぐらかされてしまうことは火を見るより明らかだ。

故に、一夏は暴挙にでる。

「……裸の付き合いつていいよなーシャルル？」

「ひっ、否定してよそこは!!」

「俺だって、男の体に興味があるわけじゃない。それでもこんな女子だらけのところには放り込まれたら、男同士の友情つてもんに飢えるのは当たり前だよなー。そこにシャルルみたいな男が入ってきたんだ。裸の付き合いの一つもしたくなるだろう？」

一夏はそういいながら、シャルルの背中に手を回してがっちりと肩をホールドし、もう片方の手でシャルルのあごをくいと自分に向けさせた。

動揺から、上気した頬とうるんだ瞳が一夏を見る。予想以上の破壊力であった。

一夏が衆道に目覚める（もうシャルルでいいや、となる）まであと数秒、というところでシャルルがハッと気づいて一夏を突き飛ばし、

「もう。一夏の馬鹿、変態！ 野獣!! もう知らない!!」

そう言い捨てて、後片付けもほっぽり出してアリーナから逃げ出した。

「ミスったなあ……冗談でやったのに本気にされてしまった。でも、あの反応は……」

まるで女子のようだった。普段紳士然とした口調であるから余計にそのギャップに驚く。

男勝りな姉の影響で、ちよつとなよよした面もあるのかもしれない。現に俺も、千冬姉のせいで女子力高いしな、と一夏は適当に結論付け、手早く葉莢を拾い集める。

彼は、声を掛けられるその時まで、今の一部始終を見ていた三人の修羅に気付くことはなかった……

## 弾雨の後／ゼロ・シノノ

理由は不明だが、俺は箒と鈴とセシリアに散々追い掛け回された後、箒に後でゼロ先生の部屋の前で集まることを約束し、一旦自室に戻った。

——ガチャリ

「あつ」

「あつー」

部屋に入った途端、タオル一枚で風呂場から出てくるシャルルとぼったり出くわしてしまった。

いつもきっちり着替えてから出るシャルルがなぜこんなことになっているかという  
と、俺が切れていたシャンプーを詰め替え忘れたからだ。

その証拠にシャルルの手にはシャンプーの空の容器が握られている。

「ええつと……シャンプーって、どこ……だっけ？」

「お、おおう!? ……俺が持つてくから風呂ん中入つとけ。湯冷めするぞ」

お互いに全くの予想外の事態に大きく動揺している。俺も声が半オクターブぐらい  
上ずっているのがわかった。

「う、うん。じゃあお願い」

シャルルが空のシャンプー容器を俺によこしてバスルームに引っ込んだ。

「……………今のは何だ？」

シャルルに胸があつたぞ？

……………なるほど、わからん。

一体全体何が起こつてるんだ。

とりあえずシャンプーを詰め替えて脱衣所に置いてきた。

まずは……………冷静になつて考えてみよう。

1、俺の見間違い。

これが一番有力だ。というか、そうであつて欲しい。箒の「男女七歳にして同衾せず」ではないが、幼馴染でもない女子と同じ部屋などというのは道徳的に大変よろしくない。それに、シャルルは男、という触れ込みで転校しているため、それが嘘偽りだった場合、背後にきな臭い事情が見えて来てしまう。

2、シャルルはおっぱいの付いたイケメンである。

これも、俺の『シャルルは男であつて欲しい』という願望が生み出した希望的観測に過ぎないが、クライنفエなんとか症候群のように、男女両方の形質を持つて産まれていて、本人の気持的には男なのかもしれないということがないとは言い切れない。

3、シャルルは女、現実是非常である。  
もはや語るまい。読んで字のごとく也。

……やっぱり3だ。悲しいけど思春期男子のエロ視力が見間違いなどあるわけがないのだ。

よくよく考えれば、シャルルの反応といい、仕草といい、肯定材料として十分すぎる。そう考え始めたら、風呂場の方からのシャワー音が途端になまめかしい物に脳内変換される……いかんいかん、俺は由緒正しい日本男児、色欲などに屈したりはせん。

ただでさえ、ISの台頭で男の形見が狭くなっているのだ。俺が下半身でものを考えるような最低な男に成り下がった暁には、世の男はそれこそ蛇蝎のごとく嫌われてしまおうだろう。

……ガチャリ。

シャワールームのドアが開き、シャルルが恐る恐るといった様子で出てくる。

——気をしっかり持て、一夏。これからのお前の行動には、男の未来がかかっているんだ!!

と自分に言い聞かせ、男子高校生であれば、どうしようもなく迸ってしまうサムシン

グを鎮め、これからの事態に臨んだ。

.....

結果的に火サスの犯人顔負けの自供をしたシャルルだったが、一夏の機転で、彼女は I S 学園卒業までに、産業スパイとして自身を学園に送り込んだデユノア社との関係を何とかする。という方向で話が纏まった。

途中、箒が一夏を呼びに来たが、シャルルが体調不良で目が離せないということにして、ゼロ先生の話は後で箒から聞く、ということになった。

.....

「全く、一夏の奴ときたら……」

せっかく二人きりになれるチャンスだったというのに、と箒は思う。

彼女は、同性のルームメイトの看病など他の女子に任せて、幼馴染みである自分を優先して欲しかったが、一夏の誰にでも分け隔てない優しさも彼の魅力の一つであるために一夏に何も言い返せず、一人廊下を歩く箒はやり場のない苛立ちを覚えていた。

——誰にでも優しい彼だけど、私を誰よりも大切にして欲しい。

彼女が、最近購読した雑誌の特集『男に敬遠される女子の名言二十選』の一説が頭をよぎる。

……わ、私は、重い女でも、めんどくさい女でもないっ！

恋する女の子が意中の男にそう願って何が悪いのか。いや、悪くない。では、悪いのは誰だ。

私の気持ちに気付かぬ一夏が悪い。

よし、戻ったら一発ぶん殴ろう。

と、苛立ちの矛先を、一夏の預かり知らぬところで一夏に向ける筈であった。

——女から男への暴力は基本合法。

という、同特集の別の一説は、彼女の頭から完全に抜け落ちていた。

頑張れ一夏、負けるな一夏、これにあり。

……………

そんなこんなで筈は千冬の部屋にたどり着き、少し緊張した面持ちでゼロとの話し合いに臨んだ。

「来たか、まずは座れ」

最初は千冬が口を開く。

「いろいろ聞きたいことはあるだろうがまず言っておく、ゼロはお前たち篠ノ之家とは血のつながりはない。故にお前の両親はこの件に一切関与していない」

「それは……」

もう調べがついている。箒は時間があつたので両親に確認済みだった。

「念のためだ、一応、一夏にはそれだけでも伝えてくれ、アレはいつも余計な勘繰りばかりするからな……」では、本題に入ろう

一夏が来ないことは、事前に千冬に連絡していた。

そして、簡易キッチンから茶を淹れてきたゼロが戻ってくると、本来の話し合いが行われた。

「……オレはある目的のためにタバネと協力関係にある。その目的については話せないが、タバネには話してある。シノノノ、という性はこの学園でもっとも行動しやすいということと借りている状態だ」

以前、箒が問うた何者か、という問いに答えるような形でゼロが単刀直入に言った。

「あの人が、誰かと協力するとは思えない」

「それは私も思った。だが、現にこんな状況になっている。そんなに気になるなら、お前の姉に確認してみるがいい」

千冬がそう提案したが、実は箒は姉にも連絡済だった。その電話口で束は、

……ゼロの言うことがきつと真実だよ。

と、いつもの調子から一転、真剣な声色で言ったのだった。

しかも、名前を覚えるのが苦手な姉がきちんと名付きで呼んでいることを見るに、姉の眼鏡にはかかったのだということが理解でき、これ以上の追求は憚られた。

だが、束的には、ISの名前と同じような感じで機械的に覚えて呼んでいるに過ぎず、『名前』として憶えている訳ではないのだが。

「いえ、必要ありません。それで、ゼロ先生はいつまでこの学園にいて、『篠ノ之』を名乗るつもりなんですか？」

「……目的が達成されれば、オレはここを去る。コセキ等もおそらくタバネがすべて消し去るだろう」

「去る、とはどういう意味ですか」

箒が少しばかり語気を強めた。本当に学園から去るだけで篠ノ之の影響力から逃れることができると思っているのか、知りたかった。

「……タダのゼロとして、元いた場所に帰る」

「それでは甘いんです!! 貴方は『篠ノ之』姓が世界に与える影響を何もわかっていない」

『篠ノ之』を名乗った時点で、世界中に注目され、記録され、利用されてしまう。

『元いた場所』がそうではなくてしまう。

姉さんもそうだ。あの人は孤高だから人の恐ろしさを知らないのだ。

戸籍を消したところで、人の記憶からは消せない。とても優秀な篠ノ之のIS乗りがいて、途中でいなくなつたとなれば、人相書きを作つた諜報員によつて地の果てまでも探されてしまう。

それこそ政府の要人保護プログラムか、人の文明圏と隔絶された場所に行かない限り、追つ手は撒けない。

箒は、ゼロは目的達成後に本名を名乗つてどこぞの本当の所属先に戻るか、このまま教師として赴任するものだと思つていた。

もう一つ、死による逃避という方法はあつたが、それは考慮に値しなかつた。

「それについては問題ない。ゼロは、おそらく束にしかわからないような辺鄙なところから来ている。学歴等も偽造で、そこから追つ手が付くということはない」

「……おそらくはタバネも、足はつくまいと踏んで、この経歴と苗字を付けたはずだ」  
「……」

二人の言っていることがすべて本当であるなら、何も問題はない。だが、一対一、もしくは二対二等のフェアな戦闘を重視する学園ではあまり身につかない一対多戦闘（アンフェア・バトル）のエキスパート、おそらく千冬ですらその分野では及ばないだろう人材を野に放つのはいささか危険すぎると各国が判断しないとも限らない。足はつかなくとも、関わつた人間に執拗な取り調べがあることは容易に想像できる。

——なるほど、そのための『篠ノ之』か。

箒は姉の考えの片鱗を理解した。

篠ノ之一家は政府の要人保護でがちがちに監視されており、ゼロのゼの字も知らない状態だ。取り調べても何か出てくるはずがなく、残る束は消息不明であるために取り調べようがない。故に、各国はゼロの追跡を断念せざるを得なくなる。

「……他に、説明しておくべきことはあるか」

「いいえ。ありません。本日はありがとうございました」

そういつて、箒は席を立つ。本来ならゼロの正体や本当の経歴を聞こうと思っていたのだが、前述の理由から、深く知ることが悪手になるということが分かったのでこれ以上の詮索は辞めた。

「部屋まで送ろう。もう消灯時間ぎりぎりだからな。生徒一人歩かせては不審がられる」

ゼロもそれに続こうとしたが、二人も教師がいてはまるで連行だ、と千冬に諫められたために、一人部屋に残った。

……………

「織斑先生は、どこまで知っているんですか？」

自室への道すがら、箒は千冬に聞いた。この話し合いに千冬が参加していたのが不思議

議だったからだ。

「二応、アイツの目的や正体を知っている程度だ。まあ、あまり気分の良い話ではない。ゼロとはドイツで知り合った」

……しかし、ドイツに属しているわけでもなかったがな。と千冬は続けた。

深く詮索すまいと思っていた箒はこれ以上聞くことはせず、二人はしばし無言で歩く。

すると千冬が、少し躊躇しながら口を開く。

「篠ノ之は……人間と機械の違いについて考えたことはあるか？」

ISには、人格の様なものがあると、一般的に言われていたのを箒は思い出した。

「さあ……考えたこともありません」

「……そうか。つまらないことを聞いた。忘れてくれ」

仮に、人格があったとしても、それはただの『人格のある機械』で、それ以上でもそれ以下でもないのではないだろうか、と箒は漠然とだが思い、そこで思考停止した。箒は姉と違い、悲しいほどに凡人だった。

「着いたな。明日も早い、しっかり寝て寝坊などせんように」

「はい。見送りありがとうございました。おやすみなさい」

そういつて箒は部屋に帰って行った。

教員寮へ戻りながら、千冬は箒の物分かりの良さに感謝していた。彼女はゼロの正体や本当の出自については何も触れてこなかったからだ。

もし触れていたなら、事前にゼロから説明されていた経歴を話さなくてはならなかった。

その経歴というのは、東とエックスが笑い転げながら作った波乱万丈かつコメディタッチのものであるというのは、言うまでもないだろう。

## 黒い雨・稲光る雷鳥

箒との会談から一晩明け、いつものように出勤したIS学園教員室では、ある話題で持ち切りだった。

学年別トーナメント

「……なんだそれは」

そろそろそんな時期か、と呟いた千冬に対し、ゼロは訝しげだ。

「学年ごと」にトーナメント形式で模擬戦をする大会だ……演習相手の生徒から聞いたたりしていないか？」

「……いや」

そう言いつつ、ゼロは最近の演習の様子を思い出していた。

最近の『放課後ゼロ演習』の生徒たちは、まるで巨獣を仕留めんとする猟犬のような雰囲気ですべてゼロ打倒を息巻いており、始まった当初こそあった生徒側の『甘さ』は消え去っていたために、無駄口など叩かなくなっていた。

生徒たちからすれば「そこそこに戦ってあとは質疑応答だろう」といった従来の対教師演習の定石（主に真耶などがこれに当たる）が通じなかったための措置であり、彼女

らが不真面目だったわけではない。

そして決定的だったのはレヴィアとの一戦である。

普段は冷めた態度でひたすら己を磨く彼女が、燃え盛るような情熱でゼロに挑み、二年最強である楯無も舌を巻くほどの技量と速度を見せたにもかかわらず、ゼロはそれを（専用機こそ使ったもの）すべて受け切り、勝利したのだ。

……その時の損傷でレヴィアは学年別トーナメントに出場できなくなってしまうが、彼女は少しも悔やむ様子はなかった。むしろ悔やんだのは彼女打倒を目指す一部の物好きだけであった。

この一見以来、生徒たちはこの演習を、圧倒的な実力差を持つ相手にどれだけ食らいつけるか、自分の戦闘技能が『格上』にどこまで通じ、どう対処されるのかを、教えられるのではなく学び取るものであると理解したのだった。

しかし、この演習に否定的な意見を示す教師もいる。山田真耶などがそうだ。

彼女たちの言い分は、生徒が小手先の戦闘テクニクばかり器用になって『強くなった』と勘違いする可能性があり、基礎練習を疎かにし兼ねない。という、生徒を慮った危惧からであった。故に、現在この演習は二年以上の成績上位者の中でさらに教師に許可をもらった一部の生徒にしか申請資格はない。

例えば、射撃精度がこれの最たる例である。地道な射撃訓練によつて培われるそれは

「当たらなくてもばらまけば牽制にはなる」という、実戦的運用法と言えば聞こえはいい詭弁によつてないがしろにされがちである。といつても、本来の牽制とは『当たる』彈がばらまかれることによる牽制効果であり、それを理解していない生徒たちには『ゼロ演習』への申請許可は下りていないのだが。

——閑話休題。

「最近男子が入つたためにいろいろな噂や憶測が生徒たちの間で飛び交うこともありましようが、私達教師陣はいつも通りに男女分け隔てなく接してあげましよう」

時は少し進み、朝の教員会議のようなものを教頭がこの言葉で締めくくつて、担任を持つ教師たちがHRに向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

案の定、教頭の言うとおりに、とある噂が一年生を席卷していた。

——トーナメント優勝者は織斑一夏と交際できる。——

噂はあくまで噂であり、大多数の生徒はそのことを理解していたが、学内の雰囲気は『優勝者になれば告白しても抜け駆けにはならない』といつた程度の方に流されつつあつた。

そこに一夏本人の意思は全く介在していないことは疑うべくもない。

「ふん。下らん。皆、学園に何をしに来たのだ」

一年生の間に漂う甘ったるい雰囲気は辟易したハルがぼやく。

「若いのに勉強ばっかりしてるのもどうかと思うけどねえ？ 命短し恋せよ乙女、つてことで、皆生徒である前に一人の乙女なんじゃないの？」

「そんなに織斑がいいのか」

「いや、この人気はマーケティングの勝利だね。織斑くんがこの学園の女子のニーズにがつつりジャストミートしてるのが悪い」

共学上がりも女子校上がりも、おぼこい者もそうでない者も、等しく好感が持てる顔と態度、罪な男だねエ、とそのぼやきを聞いていたクラスメートが続けた。

彼女もハルと同じく織斑一夏になびかない、一組女子としては異端な部類だった。

「逆に、シャルル君はひ弱そうに見えて意外と女慣れしてるみたいだから、今こそパンダ状態でちやほやされてるけど、多分織斑くんほど燃え広がらないんじゃないかな、その分カルトなファンが出来そうだけど」

「……お前は一体何を言っているんだ……？」

「なに、掛け算好きが高じてしまっただけさね」

そういつて、クラスメートは噂の出所を搜索するためにハルとは離れた集団に向かった。

そもそも『掛け算』の意味も分からなかったハルが嘆息して授業の準備をしていると、

セシリアがやってきた。

「ハルさん、よろしくて?」

「何か」

「今日、放課後アリーナの使用許可を取ったのですが、私とご一緒に機動修練でも致しませんこと?」

模擬戦の一件以来、セシリアをハルはちよこちよこ二人で訓練をしていたり、挨拶や世間話などをする程度には仲良くなっていた。

「いいだろう。他の候補生にも声をかけるのか?」

「いえ、その……ハルさんは噂の事はご存じ?」

同じ相手とばかり訓練しては変な癖がついてしまうことを危惧したハルが鈴音や簪を挙げようとしたとき、セシリアは所在無さげに問い返した。

「勝つたら交際、というヤツか。興味はないがさつき知った」

「私も……クラスの皆さんと同じように、一夏さんをどこぞの輩に渡す気はありませんので」

そういえばセシリアは織斑に惚れているんだっとな、とハルは思い出した。そして、同じく一夏に首ったけの箒と鈴音のことを考える。

傍から見れば、さつきと告白してしまえばいいのと思うが、本人たちは変なところ

で意固地になっており、一夏を自身に惚れさせようと躍起になっている。

「なら、織斑とデュノア、ボーデヴィツヒも誘うべきだな。一年生の実力を見るに、脅威になるのは他クラスの専用機持ちだけだろう」

「ですがボーデヴィツヒさんは……」

故に、一夏に全く興味のないハルのような生徒なら、優勝しても問題ないため別にいくら手の内を見せようが構わないだろうと候補を挙げたが、セシリアは少し困ったような表情を浮かべた。

なぜならラウラは転校初日からクラスメートたちに冷たく当たったため、半ば孤立していたからだ。

それに彼女は、セシリアの慕う一夏にあまり良い感情を持つておらず、むしろ憎んでいるとさえ言え、それがさらにセシリアへ悪印象を強めていた。

「現状、彼女が一番優勝に近い。目的のためならば私情は挟むべきではないと思うが……そんなに苦手ならば私が誘って来よう。セシリアは後の二人を頼む」

「……わかりましたわ」

もしラウラがセシリアや一夏ともめそうならば、自分とラウラだけで少し模擬戦でもして、セシリアは一夏とシャルルの二対一で戦つてもいい訓練になるかもしれない。という風に考えていた。

「いいだろう。付き合つてやる」

ハルの誘いにラウラは二つ返事で承した。このことにハルは驚き、ラウラへの評価を改めたが、それはすぐに裏切られることになった。

・・・・・・・・

「中国の『甲龍』に、英国の『ブルーティアーズ』……カタログスペックは一流でも、操縦者が三流ではな」

男子は更衣室が一つしかなく、少し遅くなるとの連絡を受けたセシリアは、まだ着替え中のハルとラウラを待つ間、偶然一緒になった鈴音と軽く模擬戦でもしようか、などと話していた時にラウラの奇襲砲撃を受けた。

砲撃自体は回避できたものの、その時の二機の動きを見てラウラはそうのたまつた。「ハルさんの手前、あまり貴女と揉めたくはありませんが……交戦の意思がお有りです？」言葉には言葉で、鉛玉には鉛玉で。セシリア、言葉より先に鉛玉飛ばすような奴に言葉は要らないわよ」

不意打ち気味に大口径砲をぶつ放すというまるきり非常識な行動に二人は憤慨し、セシリアはレーザーライフルを、鈴音は衝撃砲を展開し臨戦態勢を取つた。

「どうした。怖気づいたのか？ 何なら二人まとめて掛かつてくるがいい。下らん男に

媚びる軟弱者どもなぞ、何匹いようが同じことだ」

ラウラは人を小馬鹿にしたような笑みで、二人をさらに煽った。

思いい人を悪しざまに言われたことで、二人の怒髪は天を衝いた。構えられた武装の引き金が引かれ、光条と不可視の衝撃弾が『シュヴァルツエア・レーゲン』へ向かい、ラウラも肩部大口径砲を発射した。

——おい、私抜きで始めるなんて水臭いじゃないか。

砲弾と光条、衝撃弾がぶつかる瞬間に、翠緑の機影がそこに割り込みその攻撃のすべてを迎撃して見せた。

レーザー、砲弾はどちらも光剣の二刀『轟雷』で、不可視の衝撃弾は電磁加速砲『秋雨』で迎撃した翠緑の機影——『打鉄隼式』を纏ったハルは、戦闘の出鼻をくじかれた三人を交互に見、非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）である『秋雨』に稲光を纏わせながらいつもの世間話のようなトーンで話しかけた。

「ボーデヴィツヒ、クラスメートの悪口とは感心しないな。ドイツには思いやりや遠慮はないのか？」

「そんなものは全体主義とともに死んだ。本当のことを言って何が悪い？」

「ならば言葉を返そうボーデヴィツヒ……三流の貴様が駆る『シュヴァルツエア・レーゲン』なぞ、第一世代にも劣るぞ」

……所詮はドングリの背比べなんだ、お前も、この二人も。

ハルはそう続けつつ、セシリアと鈴音に「ここは私に任せてくれ」という通信を送っていた。

「ずいぶんと大きな口を叩くな、『2・5世代（出来損ない）』の分際で」

ハルの言い方では、自分はお前たちとは違って三流ではない。と言っているようにも取れた。

「陳腐な表現だが、『性能の差が、戦力の決定的な差でないことを教えてやる』……とつとと来い」

ハルがニヤリと笑ってことさら火に油を注いだところで、『シュヴァルツェア・レーゲン』の大口径砲が火を噴いた。

## 戦うための強さ、強さのための戦い (She is stronger than I)

威勢のいいことを言っていたハルだったが、戦闘は回避が中心であった。多数の生徒が同時に使う関係上、アリーナでは銃砲弾に近接信管や時限信管を用いることが原則禁止されているのを逆手に取り、砲弾がかするかどうかというスレスレの回避運動をやつてのけた。

「ははは。まるでハエ叩きだ。」

「……弱い犬ほどよく吠える、か」

「何だと!？」

「本当のことを言つて何が悪い？」

——お前は弱い。

あからさまにそう言われ、ラウラは怒り狂いながらも、ハルの強さを頭のどこかで冷静に分析していた。

その気になれば砲弾を斬つて回避が出来るにも拘らず、機動力の高さを見せつけるかのように空を舞い続けている。

そもそも、砲弾を『弾く』のではなく『斬る』というのが埒外なのだ。

携行火器ならいざ知らず、『シユヴァルツェア・レーゲン』ほどの大口徑砲では、その砲弾は表層こそ完全被甲弾だが中身は火薬の塊であり、生半可な斬り方では誘爆をもろに食らってしまう。

一年前、ドイツでゼロが砲弾を斬って見せたときもそうであったが、ハルとゼロは斬った砲弾を誘爆させなかった。つまり信管を適切に焼き切っているのである。

「セシリアん時もそうだったけど、アイツって意外と口悪い？」

邪魔にならないような場所で二人の暴言の応酬を聞いていた鈴音がセシリアに問いかけた。

「人の怒らせ方、というよりは扱い方が絶妙なのですわ。ほら、最初はボーデヴィツヒさんがハルさんを煽る形だったのに、逆転していますでしょう？」

「それで、あの絶妙なあしらい……」

おそらくラウラは大口徑砲を撃ちながらAIC力場で捉えようと画策しているのだろうが、その企みは空振り続けていた。『シユヴァルツェア・レーゲン』の武装であるワイヤブレードを使わないのは、ラウラがハルVSセシリアの戦いの映像データを見ており、トーナメントを間近に控えた今、武装を破壊された場合今後の戦闘に支障が出るのを警戒したからであった。

「ハルさん本人はとても心根の優しい方なのですが……」

「博愛主義者じゃないってのは見りやわかるわよ」

傍でなされていたのんきな会話の裏で、ハルは少しずつ攻め始めていた。

レールカノンは実弾兵器、しかも強力な磁場をかける関係から飛翔体に信管と爆薬を付けることは出来ず、純粋な運動エネルギー（KE）ダメージを与える武装であり、AICとの相性は最悪である。

故にエネルギーブレード『轟雷』による光波が最も有力なダメージソースになる。

そう考えたハルは、踊るような空戦機動の中に攻撃動作を混ぜ、ラウラに向かって三日月型の光波を放つ。

「……チッ」

光波の攻撃密度自体は大したことがないため、ラウラは簡単な移動で回避できるが、その間は攻撃精度が落ちた。

その落ちた攻撃精度に付け入るようにして、ハルは飛ばす光波の数を少しずつ増やしていき、いつの間にかラウラは防戦一方になっていた。すでに大口径砲も光波迎撃に回されており、ハルへの砲撃は散発的なものになっている。

「どうした？ 息が上がっているようだが……」

「うるさいっ!!」

ラウラは大口徑砲で捌き切れなかった光波をプラズマ手刀で切り払い、ハルのいる空へ上がった。

——このままでは埒が明かない。

そう考えての行動であつたが、空戦機動ではハルに分があり、悪手であることがラウラも分かっていた。

しかし、攻撃回避の幅という見方で言えば、空中戦は悪手ではない。地面という壁がない分自由な回避行動が取れるからだ。

そして、ラウラは対ゼロのために用意していた秘策をここで使うことにした。

——砲声

「……ッ!?!」

ハルは先ほどもまでと同様に砲弾を避けようとして、故に（・・）それをもろに食らつてしまった。

……榴散弾か!

ハルは驚愕した。本来なら、時限信管や近接信管が使えないルール内で榴散弾を満足に運用することは不可能だからだ。

『打鉄隼式』は機動力と引き換えに装甲を大分削っているため被弾に弱く、飛行姿勢を著しく乱され地上へ墜落した。

——シールドエネルギー、30%減、飛行能力50%喪失。

とつきに庇ったセンサー類と武装が無傷なのが不幸中の幸いだな、とハルはラウラの追撃を躲しながら思った。

先ほどは不覚を取ったが、要は散弾銃とほぼ同じであり、飛行能力が低下していてもほんの少しのマニューバで回避することができた。

「どうした？ 自慢の空戦はもうしないのか？」

「本当の強者とは、場所を選ばないものだと思うが」

飛ぶのではなく跳ぶことによつて、上空から降ってくる榴散弾を躲す。

それは、水平方向の高速移動と、垂直方向の跳躍移動を組み合わせた機動であつた。

「お前……その動きは！」

「奇遇だな、私もこのマニューバには覚えがある。実に不愉快だが、これが最適解である以上、仕方あるまい」

ゼロの、というラウラの声を遮るようにハルは言い、光波と電磁加速砲を撃った。

光波が混ざることによりラウラは回避か迎撃を選択せざるを得なくなる。

「小癩な！」

ラウラが選んだのは迎撃、カノン砲で光波を撃ち、残りをAICで止めた。砲弾と光波が激突し大きな爆発が起こる。

A I Cで爆風を防いでいるラウラとは異なり、ハルは衝撃をもろに食らって身動きが取れない可能性が高かった。

故に、その爆風の向こうにいるハル目がけて、ラウラはカノン砲を三連射した。

「甘ん」

しかし、彼女は思い違っていた。

以前、機械の体で戦場を駆けていたハルにとって、その程度の爆風などそよ風同然だということ。

三点射で放たれた砲弾と合わせるように三度、光刃が振るわれた。

その三閃は砲弾を誘爆させることなく両断し、今まで途切れることのなかった『シユヴァルツエア・レーゲン』の砲弾幕に一瞬の、しかし致命的な穴を開けた。

——瞬時加速（イグニツションブースト）

まるで狩りをする猛禽類のように、ラウラという獲物へと急接近したハル。

一足遅れてそれを認識したラウラは、後手に回りながらもハルの動線上にA I Cの停止結界を張り、適切に対処しようとした。

「貴様がやたらアテにしているそれだが……そんなオモチャでは、私は止められない」

彼女は素早く、しかし素つ頓狂なタイミングで光刃を振るった。光波を出すには近く、切っ先を届かせるには遠い、そんな間合い。

故に、彼女は何もない虚空を斬ったはずだった。

「っ!!?」

停止結界が、斬れた。

エネルギー兵器同士が干渉するときのような怪音を響かせ、ハルの剣閃はAIC力場を退けた。

原則的に不可能ではないが、斬るとすれば停止結界には先に腕が引つかかるはずなのだ。

ハルはその後、まるきり常識はずれな現象に驚愕するラウラに肉薄し、嵐のような連撃を喰らわせた。瞬く間に『シユヴァルツエア・レーゲン』のシールドエネルギーは底をつき、ISが解除された。

.....

俺は、『斬る』という行為の一つの極致を見た。

ハルの剣捌きはおそらく、エネルギーブレードやバイブレーションソードのような、斬るのに『引き』も『押し』も『重さ』もいらぬ剣に特化したものだ。

これらの特殊な剣は、ISの台頭によって急速に開発が進んだ武装だ。

ここまで考えて、俺は少しの違和感を覚える。

——ISの台頭から今までの、数年というごく短期間で、あそこまで練磨された剣術

が生まれるだろうか？

「あの握り、振り、足運びはどれも既存の剣術にはないぞ。千冬さんの I S 剣術と違って」

俺と同じ疑問を持ったであろう筈が言う。彼女は専用機持ちではないが、その近接戦闘能力の高さから今回の練習に呼ばれていた。

「やっぱりそうだよな」

千冬姉の剣には篠ノ之流をはじめとする多くの剣術流派の所作の名残が確認できるのに対し、ハルの光剣術とも言える剣の所作にはありていに言って——人間味がなかった。

——飛翔することが前提の踏込み。

——地に足を付けずに二刀を切り返す体捌き。

—— I S の縦横無尽の高速移動に全く遅れない知覚。

特に最後の『知覚』の部分が、人間味を感じさせない大きな原因になっていた。

「一番近いのは得物が似ているゼロ先生だが、ゼロ先生の剣は速さと精密さが振り切れているだけで、動き自体は単純なものが多い」

ハルは二刀である分、ゼロ先生と比べて手数も多く複雑な動きが必要であるにもかかわらず、それらを完璧に使いこなしていた。

「……面白いな。箒」

「ああ、まだまだ世界は広い。だから面白い……学年別トーナメントが楽しみだな」

俺は、何の気なしに箒を見る。

箒は未だ残心を解かぬハルを食い入るように見つめ、先ほど彼女が見せた未知の動きを頭の中で反芻しているようだった。

最近、避けられたり、意味もなく暴力を振るわれたりで箒のことがよく分からなくなりかけていたが、こういう負けず嫌いなところは昔から変わらないことが分かって、俺は少しうれしくなった。

……

「……A I C を近接信管の代わりに使ったか、あれはいい攻撃だった」

勝負がつき、損傷の具合を確かめるためにピットへ戻るハルが、去り際に言った。

「お前こそ、何が2. 5世代（出来損ない）だ。『視えて』いるんだろ、A I C 力場が」  
「フン、どうだかな。当たらずとも遠からず、と言っておこうか。一応、隼式は日本の開発中I S（重要機密）だからな」

ラウラのかけたカマには引つかからなかったが、ラウラは確信を持っていた。

原則として、I S 学園に所属する生徒やそのI S の情報は各国で共有されているが、開発中の武装に関してはその限りではなく、情報の秘匿が可能なのだ。

故に、ハルのISの第三世代たる所以はレールガンなどではなく、先ほど一夏たちが疑問視した『人間離れた動き』を可能にするセンシングユニットにあり、そのユニットはAICの不可視の停止結界すらも視認し得るといふポテンシャルを秘めていた。

「……お前は、なぜ強い」

かつて、ラウラはドイツでゼロにした問いを、まるで条件反射のようにハルに投げかけていた。

ハルはピットへ戻る足を止め、踵を返してラウラをまっすぐに見つめる。

「強い、に理由はいらない。強さとは、勝った負けたの積算でしかない……かつて最も強くて偉大な英雄さえ、自分を強いとは思っていなかったぐらいだ。そもそも強いか否かも重要じゃない。何のために戦うのか、それこそが肝要だ」

——戦う理由があれば『強い』か否かは関係が無い。と、かつてゼロは言った。

「お前も、ゼロと似たようなことを言うのだな」

ラウラの胸の内、ふつつつと一度は収まった怒りがこみ上げてくる。彼女には、ハルのその答えが自分への嘲笑のように感じられたのだった。

「それは不本意だが、光栄だな……ッ!!?」

——アイツの戦士としての在り方だけは認めている。

という言葉はラウラの行動によって遮られた。

「ふざけるなよ山田ハル……それは、『最初から強い奴』の理屈だ」

彼女が最後まで使わなかった武装、ワイヤーブレードでハルを拘束した。

ハルはとつさにISこそ展開できたものの、避けることは適わなかった。

ラウラは思っていた。

ハルやゼロの言った理屈は『強さ』の使い道の話でしかなく、強くなること自体の理由にはならない、真正正銘『強者の理屈』である、と。

こちらが強く、お前が弱いから、お前は勝てないのだと。

『強さ』に理由を求めるようなお前など、どう頑張っても弱いままなのだ。

暗にそう言われているようにしか考えられなかった。

ラウラの怒りに呼応し、ワイヤーブレードの拘束が強まる。

「グッ……」

「……私は強い……弱くなんかないんだあッ!!」

そして、ラウラはトドメと言わんばかりに肩部カノン砲を発射した。

## 強さの因果論

俺は全くの無意識に、ISを展開していた。

「やめろおおおおー!!!」

零落白夜を使い、アリーナのシールドバリアを切り裂いた。

すかさずイグニッションブースト、対峙するハルとラウラとの距離を詰める。

俺には砲弾を確実に斬る技量はない。仮に受け流せたとしても誘爆は避けられない。でも、そんなことは俺を止める理由にはならなかった。

砲の射線からハルを遮りつつ、雪片式型を振るった。

だが、斬った手ごたえも、斬れなかったための爆轟も、俺には感じることは出来なかった。

「……ちつ、ゼロか。余計な真似を」

身体が動かなかった。俺は雪片を振り下ろす途中の体勢で砲弾と一緒に止められていた。

口惜しそうな憎まれ口は、いつの間にかワイヤーの拘束を抜け出していたハルのものだった。

## 『Time stopper』

俺と砲弾を停止させている電磁フィールドのようなものに目を向けると、その名前と思しき表示が出た。しかしながら、それらの詳細な情報はなく、効果時間と思しき秒数が表示されるだけだった。

この電磁フィールドを発生させたゼロ先生が、発生源の銃口を降ろしてこちらに向かってくる。

タイムストッパーとは書かれていたが、それが解けたら砲弾もまた動き出す、ということはなく、その場に落下し始めたところをゼロ先生が受け止めてから信管を無力化した。

「ハルを殺す気か、ボーデヴィツヒ」

「これで死ぬのであれば、所詮その程度の奴だったということだ」

ゼロの淡白な問いにラウラは悪びれずに言ったが、彼女の瞳は揺れていた。どうやら本人に殺す気はなかったらしい。

この時、俺は彼女を少し理解できたように感じた。

彼女は強さ、あるいは強いということに並々ならぬこだわりがある。

執着、または妄執を言っても良い。

そして、彼女の中にある『強さ』というものの根幹には、ドイツ教官時代の千冬姉が

ある。

——立てば軍人、座れば侍、歩く姿は装甲戦車。

その姿は、彼女の目にまぶしく映ったに違いない。それこそ、彼女が盲目的に『そうありたい』と思わせるほどに。

だが、憧憬は理解から最も遠い感情であるが故に、彼女は千冬姉の『弱点（強さ）』を理解できないのだ。

——守る故の強さ、守る故の戦い。

弱点があるから弱いのではなく、理由があるから強いでもない。

ましてや、強いから戦うのでは断じてないのだ。

その点、ハルやゼロ先生はよく理解していたように思う。だが、彼らには彼女の葛藤や妄執は理解できてはいなかった。だから、彼女は憤ったのだ。

……なら、俺のやることは決まっている。

「ラウラ、まだ戦い足りないって言うんだったら、次は俺が相手になるぜ」

「……フン、いいだろう。だが、貴様程度の腕では私に指一本触れることは出来んと思うがな」

「やってみなきやわからないだろ」

「御託を並べるのなら誰でもできる、さっさと始めろ」

先手は譲ると言わんばかりにクイクイ、と手招きするラウラ、しかし彼女の全武装は、馬鹿正直に突っ込む俺を血祭りにせんと狙っていることだろう。

——瞬時加速（イグニツションブースト）

俺はその見え見えの罠（といっても不可視の停止結界だが）に正面から突っ込む。俺にはその罠を食い破れるだけの勝算があつた。

シャルに教わつた『銃弾を斬るコツ』、

さつきハルが魅せた『人間離れした剣技』、

『停止結界が斬れる』という事実。

この三つの手がかりから編み出した策は、突き。

しかも、身体を水平にしてなるべく『零落白夜』を薄く広く纏わせた雪片の切っ先に隠しての突きだ。生身では考えられないISの空中機動力をアテにした、付け焼刃未満の技だったが、ラウラは驚いたようだった。

俺が普通に接近すれば、全身を。雪片を正眼に構えて来れば、持ち手を。斬ろうと振りかぶつた体勢であれば、小手先を。

それぞれ彼女は停止させる腹積もりだったのだろう。

ハルとシャル（正確にはファーニールさんの話か）に出会う前の俺なら、いずれかを  
選択して完封されていたと思う。

このまま行けば、この切っ先はラウラに届く。そう思った時だった。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れるんだ。なあ、ゼロ？」

俺とラウラの間に何かが割り込み、雪片の切っ先を逸らした。もともと慣れない体勢をさらに大きく崩された俺は受け身も碌にとれずにアリーナの床に激突した。

生兵法は怪我の元、とは誰の言葉だっただろうか。

「……」

この沈黙はゼロ先生のもので、この人はこの人で一瞬でラウラの側面に回って銃を突き付けて牽制していた。

割り込んだ何かとはIS用のブレードを持った千冬姉だった。IS用、とついているのは伊達ではなく、生身の人間に扱えるような重量ではない。だが、千冬姉は生身で問題なく使っている。もはやギャグ漫画の世界だなあ、などとろくでもないことを地面に埋まった頭で考えていた。

「お前に聞くべきではないな、この手の話は」

「……すまな、」

「謝るな。むしろ私が恥じているんだ」

短いやり取りを終え、千冬姉が俺とラウラに介入の経緯を話す。なんでも、アリーナのシールドを破ったのがマズかったみたいだ。今度から気を付けよう。

そして、トーナメントまでこの対戦の結果はお預けとなった。

「織斑もデュノアも、それでいいな？」

「はい、構いません」

はて、シャルは一体どこにいたのだろう。と思い、起き上がって辺りを見渡す。

すると、アリーナの端、今俺たちがいる位置から最も離れた位置に陣取っていた。

その手には無骨な狙撃砲が握られていた。

後から聞いた話では、A I Cの狙撃対応能力を見るため、だったそう。でも結局、発

砲はしなかったからできなかったようだ。

でも、面白い物（勝機）が見れた、とも言っていたのだった。

そして、誰かがハルの吊い合戦などしないように、トーナメントまで私闘が一切禁止となった。